早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

在日中国人ニューカマーと教育
—非集住地域に着目して—
Education of Chinese Newcomers in Japan: With a Focus on a Less Concentrated Area of Chinese Residents

２０１７年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

劉　昊

LIU, Hao

研究指導教員：　森本　豊富　教授

目次

序章 1
第１節　ニューカマーの概況と問題の所在 1
第１項　ニューカマーの登場と日本側の受け入れ施策 1
第２項　問題の所在 4
第２節　ニューカマーの教育をめぐる研究動向 6
第３節　課題設定 10
第１項　主体としてのニューカマー 10
第２項　育ちの過程への着目：「ルーツ」と「ルート」 11
第４節　調査概要 13
第１項　調査地 13
第２項　調査方法と調査対象者 14
第３項　各章の構成 16
第１章　在日中国人の歴史 18
第１節　オールドカマーの歴史 18
第１項　在日中国人の歴史的背景 18
第２項　横浜における中国人の歴史 20
第３項　神戸における中国人の歴史 22
第４項　長崎における中国人の歴史 23
第２節　ニューカマーの出現 25
第１項　中国人ニューカマーの概要 25
第２項　在日中国人留学生の増加 28
第３項　中国帰国者の出現 30
第３節　小括 32
第２章　母親たちの「創造的教育戦略」 34
第１節　課題設定 34
第２節　在日ニューカマーの教育戦略に関する先行研究 36
第３節　母親たちの教育観と学校外教育 38
第４節　雪梅の教育戦略 40
第１項　生い立ちと来日経緯 40

第２項　日本の学校に対する意味づけ：「無責任な場所」 42
第３項　「学校との積極的交渉」から「声かけ戦略」へ 43
第５節　小芳の教育戦略 45
第１項　生い立ちと来日経緯 45
第２項　成長が可視化する場所と日本の学校の戦略的利用 47
第６節　雅文の教育戦略 49
第１項　生い立ちと来日経緯 49
第２項　日本の学校への意味づけ：「遊び場」としての学校 51
第３項　子どもの「一時的喪失」体験から「家族団らん」へ 51
第７節　瑞麗の教育戦略 54
第１項　生い立ちと来日経緯 54
第２項　日本の学校に対する意味づけ：閉塞感がない場所、同胞と出会えた場所 56
第３項　同胞から学ぶ教育戦略と日本式教育・中国式教育の併用 58
第８節　紫微の教育戦略 60
第１項　生い立ちと来日経緯 60
第２項　日本の学校に対する意味づけ：「痛み」と「喪失」を生む場所 62
第３項　「弱い中国人」から「強い中国人」へ、「悪い中国」からの隔離 64
第９節　小括 66
第３章　細分化されるホーム意識—中国との関係性の不在に着目して— 69
第１節　課題設定 69
第２節　先行研究 70
第３節　中国との関係性の不在 73
第４節　自ら切り離すホームとしての中国 75
第５節　切り離されるホームとしての中国 77
第６節　細分化するホーム：「帰属を感じるホーム」「将来を望めるホーム」 80
第７節　小括 84
第４章　私の成長物語 86
第１節　課題設定 86
第２節　方法：オートエスノグラフィーの意義 87
第３節　第１の物語：出生から来日まで 90
第１項　中国の小学校で過ごした２年間 90

第２項　身近だった日本 91
第４節　第２の物語：来日から小学校卒業まで 93
第１項　「リュウホウ」の誕生と友達の喪失 93
第２項　恩師との出会い 95
第３項　会館での日々 97
第４項　いじめの経験と２度目の友人喪失 99
第５項　両親の苦労と私 101
第５節　第３の物語：中学入学から高校卒業まで 102
第１項　中学生活の始まり 102
第２項　自信に満ち溢れた時代 103
第３項　家族との別れ、そして出会い 105
第４項　進路と２枚の卒業証書 106
第５項　高校入学と学力低下、そして大学受験 109
第６節　第４の物語：大学入学から現在 112
第１項　大学入学とルーツの再確認 112
第２項　自分との対話と大学院進学 114
第７節　小括 116
結論 119
参考文献 123
参考 URL 131
謝辞 132

序章

第１節　ニューカマーの概況と問題の所在

科学技術の発達によりグローバル化が進んでいる。グローバル化にともない、ヒト・モノ・カネの移動もますます活発になっている。国連の発表によると、2015 年現在、世界の人口は約 73 億人であり、そのうち祖国を離れて暮らす人は約 2.44 億人である（国連人口基金 2015; UN News service 2016）。これは世界の総人口の約３%にあたる。このように、国際移動をする人は決して多いとは言えない。しかし、国によっては大規模な移民を抱えている。移民は当該社会の変質を促進する存在となる。そのため、移民をめぐっては現在でも多くの議論がなされている。

こうした状況のなか、日本社会の多文化化も着実に進行している。日本に居住する外国人は 2015 年末の時点で 223 万人強である（法務省 2015）。その中心を担っているのが 1970 年代以降に来日した人々である。かれらは戦前に来日したオールドカマー[1]（在日韓国・朝鮮人や在日中国人など）と対比され、ニューカマーと呼ばれる。本稿で関心を寄せるのは、こうしたニューカマーと呼ばれる人々である。本節では、まずニューカマーの登場背景と受け入れ施策の変遷に着目して概観した後、問題提起をする。

第１項　ニューカマーの登場と日本側の受け入れ施策

駒井によると、1990 年代までのニューカマー[2]をめぐる状況は大きく３つの時期に分けられる。すなわち、「出発期」「拡大期」「停滞期」である。第１期の「出発期」は 1970 年代末から 1980 年代前半である。この時期に来日したニューカマーは大きく４つの形態に分類できる。第１の形態は、風俗・サービス業に従事するアジア諸国からの女性労働者である。最初にやってきたのがフィリピン女性であった。その後フィリピン女性に続いてタイ、韓国、台湾からもそうした女性たちが来日した。第２の形態は、ベトナムやラオス、カンボジアからのインドシナ難民である。インドシナ難民の流入は、1970 年代後半に求められた国際的対応に端を発し、10,000 人ほどが来日した。第３の形態は中国帰国者の２世や３世である。中国東北地方に残った日本人が配偶者や子、孫たちとともに来日したのがこれにあたる。第４の形態は欧米系ビジネスマンである（駒井 1999, 28-29）。

第２期の「拡大期」は 1980 年代後半のことであり、ニューカマーが飛躍的に増加した時期である。この時期に来日したニューカマーの特徴は、好景気での労働力不足

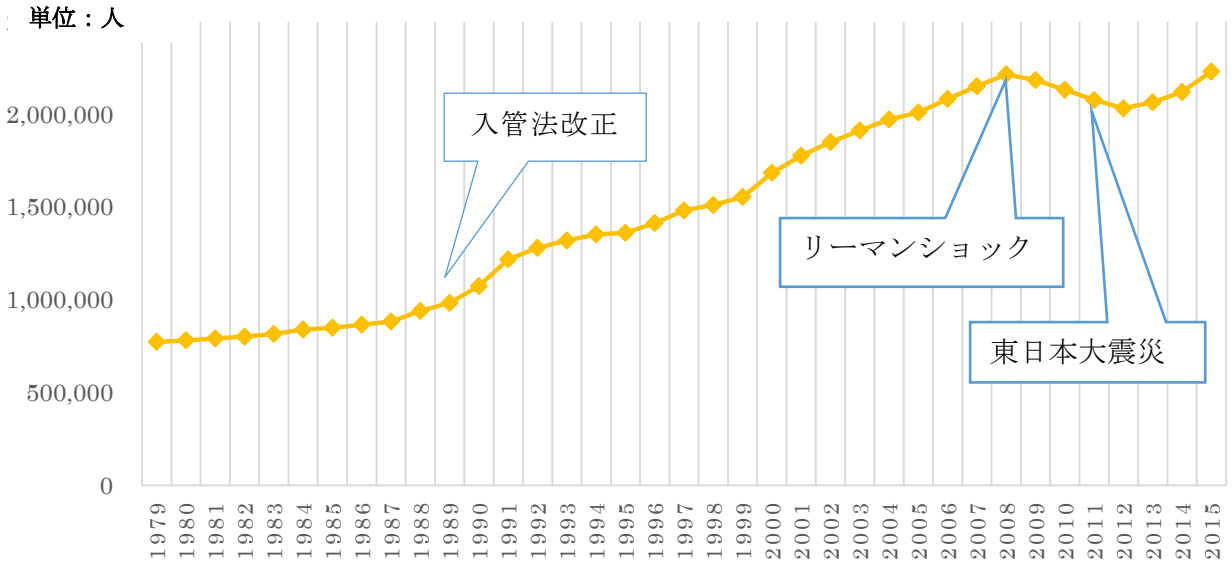
に起因する低賃金労働者と自己実現を求める人々である。「拡大期」におけるニューカマーの第１形態は、資格外就労者や超過滞在者などの非正規外国人労働者である。この形態はアジア全体からの男性で構成されており、就学生や研修生がかれらの主な資格であった[3]。第２の形態としては就労目的で来日した南米からの日系人が指摘できる。これは 1990 年に入管法が改正されたために、日系人の子孫や配偶者の入国と滞在が自由化された結果に起因する。第３の形態は、自己実現型のニューカマーで、日本への留学生が主である。これは 1983 年に打ち出された留学生 10 万人計画によるものである（駒井 1999, 29-30）。

「停滞期」である第３期は 1991 年以降を指す。この時期は日本のバブル経済が崩壊した時期である。その結果、不足していた労働力が労働力過剰に変わった。その結果、非正規労働者は微減した。一方で、南米からの日系人は増え続け、国際結婚や日本企業の海外進出にともなう外国人雇用も増加した（駒井 1999, 31）。

ここまで、ニューカマーの出現と増加した背景を述べた。では、この時代のニューカマー受け入れの施策はどのようなものだったのであろうか。高畑によれば、1990 年代までの外国人住民施策は、「権利の獲得」から「多様性を生かす」時代だととらえられる。1970 年代は、在日コリアンの定住化と社会運動の時代であった。当時、外国人にとって制度的な差別がまだ多かったため、在日コリアン２世が中心となって、差別撤廃運動が展開された。これが「人権型」施策である。1980 年代、1990 年代になると「地域の国際化」が課題となる。ニューカマーの定住が進んだのである。そのため、全国各地の自治体に国際交流会館が作られた。そして、自治体は「在日外国人対応型」「国際交流推進型」を軸に、国際交流事業を進めることになったのである（高畑 2015, 144-145）[4]。

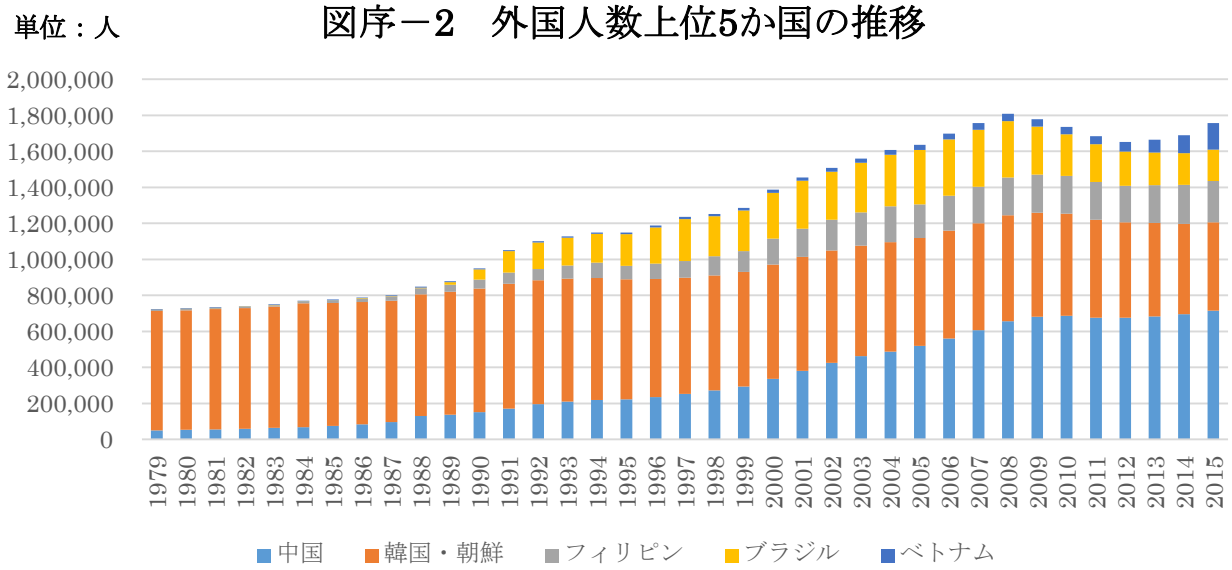
次に 2000 年代に目を向けてみよう。図序―１、２[5]は 1979 年から 2015 年現在までの在日外国人人口の推移、及び 2015 年現在における外国人数の上位５ヶ国を示している。

図序－1　外国人登録者数及び在留外国人数の推移



出所：総務省及び法務省をもとに作成

図序－2　外国人数上位5か国の推移



出所：総務省及び法務省をもとに作成

これらの図からは、2000 年代に入ってからも引き続き外国人人口が増え続けた点と、その中心を中国[6]、韓国・朝鮮、フィリピン、ブラジル、ベトナムが占めている点がうかがえる。一方で、2008 年を境に 2012 年まで外国人人口が減少に転じている。その背景には、2008 年に起きたリーマンショックと 2011 年に起きた東日本大震災がある。

まず、アメリカを震源地としたリーマンショックは、日本の製造業にも深刻な不況をもたらした。ほとんどが派遣会社を通した就業形態にあった日系ブラジル人は、その不安定な立場ゆえ、真っ先に解雇の対象となった。そのため、多くのブラジル人がブラジルへの帰国を決意したのである。また、ペルー人に関しても同様の傾向があった。次に 2011 年に起きた東日本大震災によって多くの外国人が帰国したことも、2008 年から始まった外国人減少の一因となっている。その後、2013 年からは、また増加傾向にあり、2015 年現在では約 223 万人の外国人が日本に在住している。

2000 年代以降のニューカマーをめぐる日本側の動きで着目すべきなのは、「外国人集住都市会議」が組織された点である。外国人集住都市は、外国人が多く居住する複数の都市や地域が協力して、外国人をめぐるさまざまな問題解決を図るために組織された。

高畑によると、このような 2000 年代以降の動きは「多文化共生の時代」（2006 年）と「日系人の時代」（2011 年）だととらえられる。「多文化共生の時代」であるが、これは「労働から帰国」という外国人に対する従来の認識から「生活者としての外国人」へと認識が変わったことを指す。換言するならば、外国人を日本社会の一員としてとらえるようになったのである。一方、「日系人の時代」は、先述のリーマンショックを受けて、日系人に対するさまざまな支援が講じられた時代である。ブラジルやペルーに戻らなかった日系人は日本に定住する意志が固いとみられ、多くの施策が打ち出された。すなわち、200 万人という在日外国人全体が対象だったこれまで視点と違い、リーマンショック以降の外国人施策はほとんど日系人に限定されたのである（高畑 2015, 145）[7]。

第２項　問題の所在

前項では、ニューカマーをめぐる時代の変遷をみてきた。1970 年代に始まったニューカマーの流入から 30 年以上が経過した。かれらの中には、日本で生活するにつれて当初予定していた帰国が延期されたり、帰化や定住をするようになった者も数多くいる。そんなかれらにとって子どもの教育は大きな関心事である。子どもをどこで育てるのか、あるいはどう育てるのかなどといった点が常にかれらを悩ませるのである。また、ニューカマー自身だけでなく、未曾有の外国人増加にホスト国である日本もニューカマーの教育に目を向けざるをえなくなる。なかでも、まず声を挙げたのは学校を始めとする教育現場であった。ピアスをつけるのが普通の子どもや日本語が全く話せない子どもたちに学校側は瞬く間に混乱に陥ったのである。

このような状況で、ニューカマーの子どもに対する学術界の関心も高くなり、社会学、文化人類学、教育学などさまざまな分野で研究が蓄積され、多くの成果を挙げている。一方で、見逃してはならない点がある。すなわち、ニューカマーの教育に関する研究は、外国人が集住している地域で行われており、非集住地域に焦点があてられることはほとんどなかったという点である。外国人集住地域は行政の関心が高く、外国人に対する政策が多くある。エスニック・スクール（以下、ES）やインターナショナル・スクール（以下、IS）など活用できる資源も豊富であり、日本の学校と対比しながら学校を選択できる。また、同胞が多い地域に住む者は、大学進学や就職で成功している者を子どものモデルに据えることも可能である。さらに、エスニック・コミュニティが発達している地域では、同胞の強いネットワークが子どもの教育達成に繋がる(Bankston and Zhou 1996)。

では、上述した恩恵を受けられない環境に居住するニューカマーはどうであろうか。親世代に関して言えば、かれらは少ない資源の中で自身が望むような教育を展開できているのであろうか。日本の公教育しか選択できない環境で、不本意ながらも子どもを日本の学校に通わせているのであろうか。あるいは選択肢が限定された環境でもその環境に積極的な意味を見出しているのであろうか。ブルーマーは、ものごとの意味が「自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正」され、「個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生」すると述べている(ブルーマー 1969=1991, 2)。であるならば、非集住地域で出会う「ものごと」に対しても、個人によって扱われ方が異なるはずである。

以上の議論を受けて、本稿では非集住地域に居住するニューカマーの教育のあり様を、中国人ニューカマーを事例に描き出す。異文化間教育学を専門とする佐藤は、新原(2001)を引きながら、「『例外』や『異端』とされたものを取り込んだ『総体としての現実』」(2010, 27)を把握する必要があると指摘する。すなわち、従来気づかない、あるいは見逃されがちであったことにも焦点をあてる必要があるというのである。このように考えると、従来あまり論じられてこなかった非集住地域に居住するニューカマーを取り上げることは、ニューカマー全体の教育問題を考えるうえで、非常に意義があると思われる[8]。最後に、本稿では「２つ以上の異なる文化のはざまで展開する（あるいはそうした状況を想定した）人間形成・教育にかかわる問題」（江淵 1997, 14）という意味で「教育」をとらえる。したがって、例えば第３章や第４章では、いわゆる教育的事象だけでなく中国人ニューカマー青年が育った過程に着目するが、そうい

った人間形成の過程をも「教育」ととらえる。

第２節　ニューカマーの教育をめぐる研究動向

本節では、ニューカマーの教育をめぐる研究の動向を概観する。まず言及しておかなくてはならないのは、ニューカマーの子どもたちが日本の学校文化にいかに適応していくかという視座が研究のスタートラインだったという点である。こうした適応研究は、学校・教室における子どもたちの経験や日本の学校文化がもつ特性に着目しながら論じられてきた（金井 2005, 235）。なかでも、大きな影響力をもって語られてきたのが、日本の学校のモノカルチュラリズム論である。

日本の学校文化を恒吉は、「日本の学校文化は、単一文化化の志向を通じて、実際は存在しながらも支配的ではない文化の存在を見えにくくしている」(234)と指摘する。そして、このような日本の学校文化を「一斉共同体主義」と呼ぶ。すなわち、日本の学校においては「みんな同じ」をスローガンに、結局は日本人のための教育に帰結しているというのである（恒吉 1996）。

太田もまた、日本の学校文化が孕むモノカルチュラリズムに言及している。そして、日本の学校文化を「奪文化化教育」と批判している。太田によると、日本の学校ではニューカマーの子どもたちは積極的に排除されることはない。むしろ、日本人と同様に扱われているという。この点においては、日本人もニューカマーの子どもも平等のもとで扱われると見受けられる。しかし、こうした平等は国民教育を重視する日本の学校文化によるものであると太田は指摘する。すなわち、日本人の子どもに対する国民教育を第一義に置き、その中に外国人の子どもを組み込む行為が外国人の子どもたちがもつ固有のエスニシティを奪う結果につながっているというのである（太田 2000）。

志水・清水は、恒吉の「一斉共同体主義」論を批判的にとらえながら、ニューカマーの子どもたちの適応問題を考察している。志水らも恒吉がするように、ニューカマーの子どもたちが、日本文化の同化圧力による「日本人化」がかれらを見えにくくしているという視点に立つ。しかし恒吉と異なるのは、志水らは「日本人化」だけでなく、「日常化」にも目を向けた点である。つまり、ニューカマーの子どもが多い学校では、かれらの存在がかえって異質性を低下させるのである。また、かれらが抱える問題を「見ようとしない」教師もニューカマーの存在を見えにくくさせていると志水らは指摘する。そこでは、かれらが抱える問題を外国人ゆえの問題とはとらえず、「問題の個人化」に向かう教師の姿が描き出されている（志水・清水 2001）。

以上のように、日本の学校文化は宮島が「例外を許さぬ同化主義だった」(1999, 135)と語るような文脈で論じられてきた。一方で、児島(2006)のような研究も誕生することになる。上記の研究と同じく日本の学校文化を考察した児島が恒吉や太田と異なるのは、日本の学校文化を本質主義的にとらえないという点であった。つまり、ニューカマーの子どもたちを一方的な被害者ととらえるだけでなく、かれらの側に立つ視点が必要だというのである。この視点から、児島はかれらの学校への適応を描き出したのである。

適応研究が蓄積されていく一方で、かれらの学力や学習の困難さにも注目が集まるようになる。ニューカマーの子どもの教育が注目を集めた当初はもとより、長い期間が経過した今でもかれらの学力に関する明確なデータはない。その理由としては、集団としての学力を測ることには意味がないという教育現場の認識が考えられる（志水 2008, 20)。ただ、それでもニューカマーの学力や学習状況を、言語や文化資本の観点から説明を試みようとした研究がある。

第１に、言語の問題である。太田はカミンズをもとに、一連の研究のなかで「社会生活言語」と「学習思考言語」という概念を用いてニューカマーの子どもたちの学力問題を考察している。社会生活言語とは、表情やジェスチャーなどの非言語的要素を多く含む文脈に大きく依存した言語である。社会生活言語は日常生活で習得できるため、必ずしも高い障壁ではない。通常１～２年程度で身につく。一方、学習思考言語は文字通り、勉強をするうえで必要な言語である。社会生活言語と異なり、学習思考言語は、非言語的要素をほとんど含まないため高い認知レベルが必要となる。習得には 5 年ほど必要である。学校で特に求められるのは後者の学習思考言語である。しかし、学校側は社会生活言語が身についた段階で、ニューカマーの子どもたちを問題なく学校生活を送れていると判断する。そのため、実際には学習思考言語が身につかないまま授業を受けなければならない子どもが多く存在するのである（太田 2000)。

太田の議論をさらに発展させたのが宮島である。宮島は学習思考言語をさらに２つのカテゴリーに分類して考察を行っている。「抽象的学習言語」と「歴史文化言語」である。前者の抽象的学習言語は、数学や理科で使用される用語はどの文化でもある程度の共通性をもっている。そのため、文化の壁は比較的少ない。対して、歴史文化言語は、国語や社会などで使われる言語である。こうした言語が理解できるかどうかは、出身文化に大きく左右される。つまり、歴史文化言語は、「歴史的、ないし固有文化的に文脈づけられて」(147)いるため、家庭での会話や学校教育、読書やメディアなどの経験を経ないと獲得が難しいのである（宮島 1999)。

第２に、言語とも大きく関連する文化資本の問題である。鍛治は、中国帰国青年が中国で身に付けた文化に着目して論を展開する。すなわち「優等生文化」を多く保有する「知識青年」と「優等生文化」を保有しない「DP-lize」[9]である。知識青年の場合、高い学力にもかかわらず、日本では言語などの問題によって「学力」として認識してもらえない。プライドを傷つけられたかれらは、やがて苦悩する日々を送る。しかし、中国で培った「優等生文化」がかれらを学校につなぎ止めるのである。反対に、DP-lize たちは、「優等生文化」を保有していない。そのため、「学力」もほとんどないかれらは、「反学校」的な行動を取ったりするのである（鍛治 2000）。

宮島は、南米系と東南アジア系ニューカマーを事例に、社会関係資本を含む文化資本の継受の難しさを指摘する。その要因として、出身国とホスト国である日本の間における経験の不連続性を挙げている。つまり、ニューカマーたちは先行者からの文化資本の継受がなく、出身国で培った経験を資本としてできないのである。そして、その不連続性の背後には言語の問題、子どもたちの学習への動機づけや自己定義の困難さ、モデルに代表される社会関係資本の欠如が控えているという（宮島 2002; 2014）。

適応から始まる一連の問題はやがて、ニューカマーの子どもたちの不就学に対する関心につながっていく。不就学問題は 2000 年代初期まで詳細が把握されていなかった。そうした事態を打開したのが小島・中村・横尾であった（志水 2008, 18）。

小島らは、可児市に居住する学齢期にある外国籍児童の就学状況を、４月～９月、10 月～３月の２期に分けて調査した。その結果、多くの外国籍児童が学齢期にありながら、不就学の状態にあったことを明らかにした（小島・中村・横尾 2004）。小島らの報告以降、不就学問題への関心はますます強まることになる。とりわけ、宮島・太田編(2005)、佐久間(2006; 2011a)にその実態がよくまとめられている。

宮島・太田編は、日本社会のモノカルチュラリズム、家族と子どもの教育の関わり方、ES の存在、子どもたちにとってのロールモデルの不在、そして地域が果たす役割など、多方面から外国人の子どもの不就学問題を考察している（宮島・太田編 2005）。

また、佐久間は日本の教育制度を中心に外国人の子どもの不就学問題に言及している。佐久間によると、かれらの不就学の原因を大きく５つに分類できる。すなわち、「本人の学習意欲の欠如」「両親や家族」「いじめなどの人間関係」「日本語指導や受け入れ態勢」「構造化された不就学」である。こうした原因に付随して、日本の学校文化に対する敬遠や異質な生徒の排除が外国人の子どもたちを不就学へと導くというのである。また、リーマンショック後にはブラジル人学校を辞め、かつ日本の学校にも行っていない子どもも多く存在すると佐久間は指摘する（佐久間 2006; 2011a）。

不就学問題が注目を集め始めたのは先述の通り、2000 年代中頃であった。同じ頃、ニューカマーの子どもたちの進路問題に関しても多くの議論がなされるようになった。この時期ニューカマーの増加から 20 年以上経過していた時期である。なかには長期的に日本に滞在する者も増加した。進路問題は、こうした滞日の長期化によってもたらされたと言える。

山﨑は、中学におけるニューカマー生徒に対する進路指導を、「縮小（冷却）」機能と「再加熱（加熱）」機能に焦点を当て、観察をしている。そして次の２点を明らかにしている。第１に、学習支援者は単純な学業成績ではなく、「不平等な学業成績」を用いて、外国人生徒を「縮小」している点である。第２に、学習支援者は外国人生徒がもつ異文化的な文化資本をポジティブに評価することで、かれらを「再加熱」していた点である（山﨑 2005）。

広崎は、進路多様校に通う中国系ニューカマー生徒を「直前来日型」と「早期来日型」に分類し、かれらの進路を周囲とのかかわりから考察している。そこで明らかになったのは、教員文化や生徒文化が中国系生徒の将来展望を阻害する要因になる一方で、ボランティアや教員による支援が将来展望の実現を促進するという点である。また、業績主義的な将来展望を抱く中国系生徒にとって、学校における情報不足や言語面でのハンディキャップが大きな妨げになるというのである（広崎 2007）。

鍛治も広崎と同様に、中国出身生徒の進路規定要因を考察している。鍛治の研究が特徴的だったのは、従来エスノグラフィーなどの質的方法で語られがちであったニューカマー児童の教育を量的方法で考察している点である。鍛治によると、かれらの進路は、中学を起点として高校進学までは移民世代に、高校進学から大学進学までは中国における父職などの社会経済的地位にそれぞれ大きく影響される。また、中学の段階で来日した者、就学する前から日本にいる者、そして中国における父職が農家だった者の教育年数が短くなるという（鍛治 2007）。

研究が蓄積されるにつれて、ニューカマーの子どもたち自身の経験と進路選択過程を結びつける視点も現れるようになる。こうした視点に関しては児島の研究が参考になる。児島は、在日ブラジル人を事例として、かれらが学校から早期に離脱し、就労へと水路づけられていく姿を描き出している。まず児島は学校からの離脱の要因が、①来日後の頻繁な移動、②学校での経験と学校側の対応、③移動による喪失や不安、学校で経験する困難であることを指摘する。そして学校から離脱した結果、日常に対する抵抗として形成される「脱出の物語」と消費社会の接続によって、かれらは就労へと導かれると論じる。こうした結果を受けて、在日ブラジル人の若者たちを主体と

してとらえると同時に、構造的な制約を受けない存在だと過大評価してはならないと結論付ける（児島 2008; 2013）。

第３節　課題設定

前節では、ニューカマーの教育に関する先行研究を概観した。では、非集住地域に焦点を当てた場合、先行研究からどのような課題を設定できるのであろうか。本稿では、次の２つの視点に立つこととする。すなわち、「主体としてのニューカマー」「ルートへの着目」である。

第１項　主体としてのニューカマー

前節でみてきた通り、ニューカマーは親世代・子世代にかかわらず、教育面で不利な状況に置かれている。そのような状況に対して、現場や研究者はかれらが抱える問題、あるいは課題を解決するべく議論を積み重ねてきた。つまり、ニューカマーの教育に関する議論（教育以外の議論でも）は、常に「解決すべき問題」として考えられてきたのである。そのうえで、ニューカマーを「支援するべき存在」だととらえてきたのである。しかし、かれらを「支援される存在」に収束させることを批判的にとらえる視点もある。中島はニューカマーの教育支援に取り組む過程で、日本人とニューカマーの関係性、つまりマジョリティがマイノリティを支えるという自明性を指摘する。そして、このような固定した関係性は、支援する強者―支援される弱者という非対称性を生み出すと主張する（中島 2007a; 2007b）。また、清水も「『日本人（支援する人）―外国人（支援される人）』」という固定的な関係ではなく、「支援をする日本人を支援される外国人が選択していく」関係の重要さを指摘する（清水 2009, 48）[10]。

ニューカマーを「支援すべき存在」とする視点が、かれらが抱えている悩みや社会的不平等の解明や解決に大きく貢献してきたことは言うまでもない。確かに、ニューカマーが日本社会で直面する不利な状況を解決することは重要である。しかし、一方でニューカマーを絶えず支援されるだけの存在、あるいは解決すべき問題を抱えているだけの存在と認識するのは、かれらを「弱者」に押しとどめてしまうことにつながる。山ノ内は日系ブラジル人の子どもを事例に、差別や被差別を「固定した１つの実体」ととらえる視点が、かれらを「被差別の状況に置かれている子どもたち」という存在に閉じ込めると主張する。そして、日系ブラジル人の子どもたちは一方的に「被差別の立場にある子どもたち」という立場に甘んじるのではなく、「自らが置かれた不平等な文化的・社会的再生産構造に対する『抵抗』として、独自の『対抗文化』を構

築」するというのである（山ノ内 1999, 93）。また、児島は文化的再生産が決定論的である点に異を唱える M. アップルの主張を軸に論を展開する。児島は、日系ブラジル人の子どもたちを、日本的な規範や価値の同化圧力にさらされながらもさまざまな「戦術」を駆使して生き抜く「創造的適応」を実践する主体として描いた（児島 2001）。

ここまで論じれば、ニューカマーの教育に関する重要な視点が浮かび上がってくる。かれらを受動的な存在としてではなく、主体性をもった能動的な存在として認識する必要性である。すなわち、郡司が言うところの「積極的位置取り型」の研究が、より求められるのである（郡司 2005）[11]。にもかかわらず、ニューカマーの教育が注目されるようになってから今日まで、かれらを主体的な存在としてとらえる研究は不足しがちであった。その背景を三浦は、ニューカマーを社会的弱者と認識してきた先行研究にみている（三浦 2015, 4）。この点については、永田や福田も指摘するところである。永田によると、従来の研究はニューカマーを社会的弱者だととらえ過ぎていたために、かれらのしたたかに生きる姿を見落としてきた。そのため、「社会や集団という枠の中で、日々暮らしている個人が、制約された権利や、限られた機会の選択、国民国家を単位とする集団的な概念に翻弄されながらも」主体的に生活を送る姿を描く必要があると述べる（永田 2011, 22）。また、福田はこれまでの研究がとらえてきたのは、ホスト側からの問題設定は、移民に関する問題の一側面しかとらえていないと指摘する。そのため、移民当事者側の視点にたち、かれらの自律的・能動的な活動に注目する必要があるという（福田 2012, 2）。

以上の議論から、本稿ではニューカマーをはじめから「問題」を抱える存在や抑圧された存在だとはとらえない。かれらの主体的な側面を重視し、郡司(2005)が主張する「積極的位置取り型」研究に立脚する。なお、この視点はとりわけ第 3 章の中心的な視点となる。

第２項　育ちの過程への着目：「ルーツ」と「ルート」

2012 年に開催された異文化間教育学会の全国大会では、ニューカマーの子どもたちがもつ「見えにくさ」や「見えなさ」が特定課題として組まれた。そこで議論されたのは、従来の研究視点からの転換である。

渋谷によると、ニューカマーの子どもたちを「ルーツに依拠して本質主義的にとらえようとするやり方が、綻びをみせて」(2013, 2)いる。ニューカマーの子どもたちを「外国人」だととらえればとらえるほど、かれらは「見えない」存在になるというのである。そこで、こうした本質主義的な視点に替わるものとして「ルーツ」から「ル

ート」への転換が提唱された。すなわち、ニューカマーの子どもたちの「今」を理解するためには、「どこから来たのか（ルーツ）」だけでなく、「どのようにして今に至っているのか（ルート）」を問うことが重要なのである（渋谷 2013, 2）。ここでは『異文化間教育』37 号に収められた論説をもとに、「ルート」に着目する重要性をみていこう。

高橋は中国帰国児童を例に、学校で行われている教育実践とかれらの間にずれが生じていると指摘する。学校で行われる日本語教室を始めとした中国帰国児童をエンパワーするための実践が、かえってかれらを傷つけてしまうのである。すなわち、中国帰国生徒の多様性を不問にし、中国にルーツをもつ存在として同質化を強制したり、中国語を話すべきだという認識が、かれらがもつ「個」の側面を見えなくさせるというのである。（高橋 2013）また、榎井は、「気になる子どもたち」として、「在留資格のない子どもたち」「呼び寄せのティーンエイジャー」「日本国籍や日本生まれ／育ちの子どもたち」を挙げる。そして、かれらが「不法滞在の子どもたち」として線引きされたり、日本生まれなどの「日本人とされる子どもたち」に対する支援体制が整っていないと指摘する（榎井 2013）。松尾は「日本人性(Japaneseness)」[12]の概念から、日本人の「みる・見ない」のポリティクスを論じる。松尾によると、日本人性に起因する自文化中心主義的な認識は、「差異を本質化するまなざし」と「差異を個人化するまなざし」を生み出す。前者は、外国人の子どもたちのルーツを本質的にとらえてしまうため、あるはずの多様性を見落とすことにつながる。後者は、文化的配慮を欠くため、日本社会への参加という構造的な同化を阻む形で機能する。そして、こうした「みる・見ない」のポリティックスはマジョリティである日本人によって選択されるという（松尾 2013）

ホールは「文化的アイデンティティとは『あるもの』というだけではなく『なるもの』なのである」(1990=2014, 93)と語る。つまり、本質主義的な視点ではなく、構築主義的な視点を強調している。同様に、以上の研究も本質主義的な立場に立った見方に警鐘を鳴らしている。もちろん、上記の研究でも指摘される通り、ニューカマーの子どもたちがもつルーツを問う作業も重要である。ルーツを重視することは、かれらに自身のエスニシティに対する肯定感を持たせ、アイデンティティの安定化にもつながる。しかし、ルーツにのみ固執した見方は、「子どもの主体性や構造的不平等を見誤る」（渋谷 2013, 3）ことにつながる。そのため、非集住地域という、かれらが歩んできた経験、つまりルートを通して、かれらの「今、ここ」をとらえることが必要なのである。本稿第 4 章では、中国人ニューカマーのホーム意識に言及する。そこに引き

付けるならば、中国系だから中国がホームとして固定されるとは限らないし、日本生まれだから中国にホームを感じないとも限らない。つまり、本質主義的にかれらを規定するのではなく、ルートにかれらのホーム意識を見出すことが重要なのである。

第４節　調査概要

第１項　調査地

本稿では、調査地として筆者が育ったＰ県Ｑ市[13]を調査地に選定した。Ｑ市はＰ県東部にあり、Ｒ県との県境に位置している。Ｑ市は周辺地域から形成される大規模経済圏の中心都市であり、鉄鋼業や造船業をはじめとした製造業が盛んな地域である。

教育面に目を向けると､Ｑ市は同和教育や人権教育､平和教育が盛んな地域である。そこでは、教育行政以上に教職員組合が中心となって、教育現場における差別問題に取り組んできた。そして、ニューカマーの子どもたちの教育に関しても、同和教育や在日朝鮮人教育の流れで取り組まれてきた。また、教師組合による「高校『全入』運動」も盛んに叫ばれてきた。その結果、日本語に不自由が見られる場合でも、義務教育終了後は本人の希望により職業高校や定時制高校への進学が比較的容易な地域となった（山ノ内 2002)。

2015 年度末の総人口は、約 47 万人である。外国人は約 6,500 人で総人口の約 1.4%となっている。うち、中国人は約 2,700 人であり、帰化者も含めれば、中国にルーツをもつ人々はさらに増えると推測できる。外国人人口に目を向けると、Ｑ市は 6,000 人を超える外国人を擁しており、外国人が少ない地域とはいえない。しかし、Ｑ市は従来の研究が対象としてきた地域とは大きく異なる。従来の研究では、外国人にとって（相対的にではあるが）多くの資源を活用できる地域に焦点をあてることが多かった。例えば、外国人に対する行政の関心が大きく、ES や IS などが存在する地域である。一方、Ｑ市の外国人が選択できるのは日本の学校のみである。また、行政も外国人政策に強い関心を寄せているとは言えない。

Ｑ市には、元留学生が経営する食料品店が存在し、同胞をモデルとして中華料理店を経営する者も多い。このように考えると、同市に居住する中国人ニューカマー間には強い紐帯が存在し、一定規模のエスニック・コミュニティを形成しているととらえられる。しかし、Ｑ市には Breton や Zhou が指摘するような「制度的完全性」が存在しない。Breton や Zhou は、エスニック・コミュニティが移民の上昇移動を促進するには「制度的完全性」が必要であると主張する。「制度的完全性」を備えたエスニック・コミュニティとは、学校や商業、政治を司る団体がきちんと整備され、そしてそれら

の制度が自民族によって運営されていることで当該エスニック・コミュニティを構成する人々の要求に応えられるコミュニティである(Breton 1964; Zhou 2009)。以上の点をふまえれば、Q 市は本稿の対象地に相応しい地域ととらえられる。

第２項　調査方法と調査対象者

本稿では、2013 年から 2016 年にかけて Q 市で断続的に行った半構造化インタビュー調査をもとに考察をしていく。第２章、第３章のサンプリングは、筆者が幼少時から親交のある中国人ニューカマーを訪ねる方法と、インタビュー対象から別の対象を紹介してもらうスノーボウルサンプリングを併用した。なお、スノーボウルサンプリングのデメリットとして、恣意性が挙げられる。つまり、属性が偏りやすいという点である。しかし、本稿では、非集住地域に住む者を対象としている。また、日本の学校で子育てをする／した親、日本の学校を経験している青年に焦点をあてている。そのため、非集住的な環境では可視化しにくいかれらを見つけ出すことができるスノーボウルサンプリングは有効であると考えられる。

調査対象者と筆者は筆者の幼少時から親交があり、家族ぐるみの付き合いをしている者もいる。したがって、対象者とのラポールは十分に形成されている。インタビュー場所は喫茶店や筆者宅、対象者宅、レストランであった。それぞれのインタビューは１時間から３時間であり、対象者の希望や言語能力にあわせて、中国語と日本語を使い分けた。インタビューはボイスレコーダーに録音した。データはインタビュー終了後、筆者が日本語に翻訳したうえで文字起こしを行った。また、第４章では筆者自身が対象者となるが、ニューカマーの教育を専門とする研究者２名にインタビューをしてもらう方法を用いた。なお、そこで得られたインタビューデータはそのまま使用するのではなく、筆者の人生を振り返る際に自信の記憶との整合性をとるために使用した。対象者の概要は以下の通りである。

表序―1　調査対象者概要[14]（母親）

インタビュー対象者リスト

名前	年齢	国籍	出身地	来日年	最終学歴	職業	来日目的	子ども	子どもの学歴	国籍	出生地	在日年数
シュエメイ 雪梅	47	中国	遼寧省	1995年	高卒	中国語講師・日本語教師・通訳	日本人と結婚	長男	公立高校在学中	日本	日本	17年
ジーアイ 智愛	40代	中国	山東省	2008年	高卒	中華料理店ホール	出稼ぎ夫の呼寄せ	長男	公立中学校在学中	中国	中国	2年6ヶ月
シャオファン 小芳	42	中国	四川省	2012年	高卒	中華料理店ホール	出稼ぎ夫の呼寄せ	長男	私立高校在学中	中国	中国	1年3ヶ月
グイイン 桂英	43	日本	遼寧省	2000年	高卒	無職	母親(帰国者)の呼寄せ	長男・長女	公立小学校在学中	日本	日本	長男:12年 長女:8年
ヤーウェン 雅文	40	中国	遼寧省	2001年		工場勤務	母親(帰国者)の呼寄せ	長男・長女	長男:公立高校(夜間)在学中 長女:公立小学校在学中	中国	長男:中国 長女:日本	長男:5年 長女:8年
イェーチン 叶青	51	中国	黒竜江省	1985年	中卒	中華料理店経営	親族(帰国者)の呼寄せ	長女・次女・長男	長女:公立高校卒業 次女:公立高校卒業 長男:私立大学卒業	中国	長女:中国 次女:日本 長男:日本	長女:28年 次女:28年 長男:24年
ルイリー 瑞麗	46	中国	湖南省	2004年	大卒	飲食店パート	夫(元留学生)の呼び寄せ	長女	公立高校進学予定	中国	中国	12年
チュンイェン 春燕	41	中国	黒竜江省	2005年	中卒	工場パート	日本人と結婚	長男・長女	長男:私立大学在学中 長女:公立小学校在学中	長男:中国 長女:日本	長男:中国 長女:日本	長男:8年 長女:9年
ズーウェイ 紫微	43	中国	浙江省	2003年	大卒	無職	夫(元留学生)の呼び寄せ	長男・長女	長男・長女:公立小学校在学中	中国	中国	長男:12年 長女:12年

＊プロフィールは、インタビュー時点のもの。

表序―２　調査対象者概要（子世代）

氏名	性別	年齢	国籍	来日年齢	学歴	職業	家族の属性
武志（叶青の子）	男	27	中国	日本生まれ	大卒	介護関係	帰国者家族
陽子（叶青の子）	女	29	中国	２ヶ月	高卒	専業主婦	帰国者家族
智子	女	26	中国	日本生まれ	中卒	工場勤務	帰国者家族
恭子	女	28	中国	日本生まれ	高卒	介護関係	帰国者家族
美香	女	27	中国	５歳	高卒	建築関係	帰国者家族
久美	女	32	中国	７ヶ月	高卒	工場勤務	帰国者家族
義昭（雪梅の子）	男	20	日本	日本生まれ	高卒	会社員	国際結婚家族
健軍	男	26	中国	15 歳	大卒	会社員	出稼ぎ労働者家族
国祥（春燕の子）	男	20	中国	12 歳	大学在学中	大学生	国際結婚家族[15]

＊プロフィールはインタビュー時点のもの。

第３項　各章の構成

最後に本稿の構成を述べておこう。第１章では、数多くの在日外国人のなかでも、もっとも多様性に富む在日中国人の歴史的を概観する。具体的には、オールドカマーとニューカマーに分けて、在日中国人の流入初期から現在まで、いかなる歴史的変遷を遂げてきたのかをみていく。

第２章では、中国人ニューカマーの親世代が展開する教育戦略を描き出す。そのために、日本の学校教育に対する意味づけと、かれらのライフストーリーの２つの視点に着目する。なお、本章では先述の通り、かれらの主体性を重視し「積極的位置取り型」研究の見地に立つ。

翻って､続く第３章では子世代に視点を変え､かれらのホーム意識を明らかにする。ここでは、中国との関係性の不在に着目して、在日中国人ニューカマー青年が非集住地域というルートのなかでどのようなホーム意識を保持しているのかをみていく。そして、かれらのホーム意識が一枚岩では語れないことを明らかにしていく。

第４章では、筆者個人の経験に焦点をあてる。非集住地域において、ニューカマーは語る手段をもちにくい。そこで、オートエスノグラフィーを用いてＱで育った筆者

個人の成長物語を提示する。そして、非集住地域に居住するニューカマーたちにとっての１つのモデルを提示することを試みる。

結論では、本稿で明らかになった知見を再度確認する。そして、最後に本稿の課題と今後の展望を述べる。

---

[1] 旧植民地出身を指す言葉として使われる。この用語は、「来たくて来たわけではない」人々に対する配慮の欠如という批判から、「オールドタイマー」が使われることもある（佐久間 2011b, iii）。

[2] 駒井(1997; 1999)ではニューカマーの訳語として「新来外国人」を使用しているが、ここではニューカマーと統一する。

[3] 就学生や研修生として来日し、資格外活動に及ぶ者が多くいた。また、それとともに、超過滞在者も増加した（駒井 1999, 29）。

[4] 山脇(2014)の講演内容を高畑がまとめたもの。

[5] 図序―１、及び図序―２は、2011 年までは「登録外国人統計」、2012 年からは「在留外国人統計」にもとづいている。これは、2012 年 7 月 9 日に外国人登録が廃止されたことにともなう統計の名称変さらによる。

[6] 台湾を含む。

[7] 注３に同じ。

[8] 数少ない非集住地域に関する研究のなかで、比較的まとまったものに徳田他(2016)がある。徳田らは、非集住地域の特徴として、文字通りの「マイノリティ」として生活をしなければならない点を挙げる。こうした非集住地域の特性を指摘する徳田らの研究でさえ、教会や民族学校などの関係性を資源として活用できる地域やエスニック集団への着目にとどまっている。

[9] 「地痞赖子(dipilaizi)」という、「ごろつき」を意味する否定的なイメージをもつ中国語に、鍛治がある種の肯定的イメージをもたせた独自用語である。それは、中学の段階で中国の農村や地方都市から日本に学校に編入した中国帰国生徒で、中国で身につけた「優等生文化」が低く、「反学校的」文化を中国あるいは日本で身につけた男子を指す。

[10] 清水は、「支援する人」が不要だとはとらえていない。「支援」は必要だとしたうえで、こうした固定的な権力関係を指摘している。

[11] 郡司は、外国人児童が再生産構造に一方的に同化していく姿を描いた恒吉(1996)や太田(2000)の研究を「同化再生産型」研究、再生産構造にさらされながらも主体的に生き抜く姿を描いた児島(2001)や山ノ内(1999)の研究を「積極的位置取り型」研究と分類している(郡司 2005)。

[12] 松尾がアメリカの白人性研究(whiteness studies)に着想を得た概念で、「日本人／非日本人の差異のポリティックスによって形成されるもので、目に見えない文化実践、自分・他者・社会をみる見方、構造的特権から構成されるもの」(2013, 64)と定義される。

[13] Q 市と同じ経済圏に属する市として隣県の S 市がある。本稿では S 市も含めて Q 市ととらえ、調査対象者を募った。

[14] 筆者を除き、本稿で使われる人名や施設名は全て仮名。

[15] 国祥は、春燕の連れ子。

第１章　在日中国人の歴史

本稿では、中国人ニューカマーを事例に考察を進めていく。中国人ニューカマーは他の国籍のニューカマーと比較して多様性に富んだ集団である。本章では、在日中国人がいかなる歴史的変遷を経て現在に至るのかをオールドカマーとニューカマーに分けて概観する。なお、本章では在日中国人を大陸出身者だけでなく、台湾出身者なども含む包括的な概念とする。また、世界に広がる中国人を指す概念として、華僑や華人[1]が使われることもあるが、本稿ではそうした概念も含んで在日中国人とする。

第１節　オールドカマーの歴史

第１項　在日中国人の歴史的背景

過によれば、1571 年の長崎開港に在日中国人の歴史的始まりをみることができる。長崎貿易時代に今日の在日中国人の来日パターンや居住様式などの原型をみることができるためである（過 1999, 21）。そして、日本に在日中国人社会が形成され始めたのは、ある程度往来が規則的かつ継続的になった江戸幕府誕生初期である。この時以来、各時代で異なる郷幇[2]が在日中国人の歴史的特色となった（許 2005, 70）。以下、先行研究に基づき、在日中国人が登場した背景と歴史的特色を概観する。なお、ここでは日本の鎖国期と安政開国以降の２期に分けてみていくことにする。

まずは、鎖国期である。貿易体制が確立する以前、長崎貿易は長崎、平戸、台湾を拠点としていた鄭氏政権[3]によってほぼ独占されていた。鄭氏による独占は、政権滅亡後も長崎貿易に影響を与えた。すなわち、鄭政権滅亡後も、鄭成功の出身地である福建省からの船が多数を占めていたのである。当時、中国船は日本から金、銀、銅や俵物三品（ふかひれ、干しあわび、いりこ）を中国に持ち帰った。一方、日本側は生糸や織物、薬などを中国側から輸入した。1683 年に鄭氏が清朝に降ると、1661 年から続く遷界令[4]も解除された。これにともない、長江流域の業者である三江幇（江蘇・安徽・浙江・江西）から生糸や織物を仕入れた台湾・福建・広東からの商船が増加した。中国商船との貿易により、日本側は銅の不足に陥った。そのため、幕府は 1715 年に正徳新令を出し、銅貿易を免許制にした。そして、免許の割り当てなどで三江幇を優遇した。これは、三江地域が生糸や織物の産地であったこと、日本が輸出していた俵物の一大消費地だったことに起因する。正徳新令の公布により、福建商人は衰退し、三江幇の商人が隆盛を極めた。そして、後に三江幇商人が各港で海産物の輸出を担うことにつながっていく（許 2005, 71）。

ここで、鎖国期における貿易に携わる中国人の居住形態に目を向けてみよう。明朝

末期と清朝初期は中国人商人だけでなく、清朝に対抗する士大夫なども多く来日した時期である。こうした人々は、幕府の指定により長崎に集住した。かれらは、土地購入権や住居所有権、そして永久居住権を与えられていたため、「住宅唐人」と呼ばれていた。住宅唐人の他に、比較的長期間在日が許された人々としては医師、儒士、画家などがいたが、かれらは他人の家を借りることしかできなかった。そのため、住宅唐人を中心として、出生地に応じて郷幇が形成れるようになった。鄭氏政権の滅亡にともない、1684 年に清朝が遷界令を解除すると、中国船が急増することになる。1648 年に 24 艘だったものが 1688 年には 193 艘にまで増加したのである。そのため、幕府は増加した中国人を長崎の一地区に集住させた。そして、後の新地中華街のもとにもなった唐人屋敷が作られた。なお、1784 年までに唐人屋敷に居住していた人は 892 人だったが、幕末にかけて減少した（小田 2010, 11-12）。

以上が 1639 年から続く日本の鎖国期の流れである。この時期まで、日本の海外貿易は清朝とオランダに限定され、貿易港も長崎だけに限られていた。しかし、1853 年にペリーが来日し、翌年の 1854 年に日米和親条約が締結されると、日本の鎖国は終わりを迎え、在日中国人社会の形成も次の段階に入ることになる。

陳は、安政開国以降における在日中国人の歴史は３つの時期に分けられると述べる。すなわち、1859 年から 1899 年が第１期、1899 年から 1945 年が第２期、1945 年から 1980 年代半ばが第３期[5]である（陳 2013, 14）。まず第１期であるが、この時期は、外国人の居住が外国人居留地（以下、居留地）に限定されていた時期である。安政の開国とともに、長崎以外にも函館や横浜、神戸などが開港され、大阪や東京が開市された[6]。そして、外国人居留地中心の自由貿易体制に移った。この頃になると、既に中国で基盤を築いた欧米の商社は、日本により多くの市場を求めるようになった。来日した欧米人は、やがて日中貿易の構造とその担い手である中国人貿易商の重要さに気づくようになる。言語面や文化面の壁を乗り越えるために中国人貿易商に頼るようになったのである。そこで、欧米人は中国人を買弁として雇用した。こうした買弁は、時に貿易の実権を握ることもあったという。また、西洋人の随伴者として、「三把刀」[7]業（料理人、洋服仕立て業、理髪業）に代表される多くの中国人が各港にやってきたのである（過　1999, 22）。なお、第１期において大きな存在感を示したのは広東幇であった。かれらは買弁として、主に横浜で積極的に活動した。1883 年における在日中国人は 4, 983 人であり、うち 67.5%が横浜に集中したという。そして、その大半が広東人だったという（陳 2013, 14）。

第２期は、居留地制度が廃止され、中国人も内地雑居[8]が許された時期である。居住

がある程度自由になった中国人であるが、農業や漁業、鉱業などに携わる労働者は、許可がない限りは居住と就労の自由は認められなかった（小田 2010, 21）。このことが、戦前における中国人の職業構成を貿易商と雑業者という２大主軸に規定した要因である（内田 1949, 6）。先述したように、第１期では広東幇が主に貿易を担っていた。第２期に入ると、異なる様相を呈することになる。すなわち、広東幇だけでなく、福建幇、三江幇、北幇（山東、河北）なども多く進出したのである。なかでも、1900年には日中貿易の約 60%を扱うまでに成長した神戸港における中国人の出身地の内訳は特に多様性に富んでいた（陳 2013, 14）。

以上、在日中国人の登場背景を日本の鎖国期と開国以降に分けてみてきた。ここまでみてきたように、在日中国人の登場背景は、長崎開港から続く日中貿易に求めることができる。各港に進出した中国人たちはやがてそこに定住し、いくつかの集住地区を形成するようになる。現在の横浜、神戸、長崎にある中華街である。そして、これらの中華街が在日中国人にとって重要な役割を果たすようになっていく。次項からは横浜、神戸、長崎における中国人社会の歴史をみていく。

第２項　横浜における中国人の歴史

横浜の中国人社会も、開港にその始まりをみることができる。1859 年に横浜が開港されると、外国人居留地が形成された。欧米の商社は外国人居留地に商館を開き、商売を始めた。そこで重要な役割を果たしたのが先述した買弁と呼ばれる中国人である。また、欧米人に伴われて、多くの中国人雑業者も来日した。横浜における中国人の原点はこうした人々にあると言える。

1854 年に、江戸幕府による鎖国は終わりを告げたが、外国人の行動は依然制限されていた。外国人居留地に居住することが強制されていたのである。当時、横浜の外国人居留地には中国人の他にアメリカ人、イギリス人、フランス人などがいたが、中国人と欧米人は居住する場所が異なっていた。欧米人は、港付近に商館を設置し、高台に自宅を構えた。一方、中国人たちは比較的入手しやすい低湿地に集住していた。すなわち、中国人と欧米人の「すみわけ」がみられていたのである（山下 2000, 68）。そして、そうした「すみわけ」のもと、横浜中華街が形成されていったのである。

横浜の外国人居留地における外国人人口と出身地に目を向けてみよう。まずは人口だが、中国人は他の外国人よりも圧倒的に多く、全体の 70%を占めていた時期もあった（齋藤他 2011, 60）。1867 年の中国人人口は 660 人であり、1870 年になると 1,002 人に増加した（伊藤 2005, 86）。その後、1876 年には 2,300 人となり、1898 年には

5,369 人にまで増加した（齋藤他 2011, 60）。このように、順調に人口を伸ばした中国人であったが、そのうちのほとんどが男性であった。そのため、多くの日本人女性[9]が中国人の妾になったという（山下 2000, 69-70）。次に出身地であるが、横浜における中国人の多くは、広東出身であった。例えば、1923 年の統計によると広東出身者は全体の 73%にも及ぶ。広東に次いで多かったのが、三江幇に所属する人々である。これら 2 地域の出身者は同郷団体を作り、中華学校なども作られた（伊藤 2005, 89）。

1899 年になると、外国人居留地制度が廃止され、在日中国人をめぐる状況も大きく変わることになる。内地雑居令が出され、外国人の居住が自由となったのである。しかし、その一方で中国人には就業制限がなされ、「三把刀」を中心に在日中国人の職業範囲が限定されていった。このことは横浜の中国人にとっても例外ではなかった。

こうして横浜の中国人社会は形成されてきたが、1900 年代に入ると、いくつかの出来事がターニングポイントとなる。第 1 に、1923 年に起きた関東大震災である。日本人の犠牲者だけでなく、関東大震災は在日中国人社会にも大きな被害をもたらした。当時 4,700 人を超えていた在日中国人は震災で 3,000 人強にまで減少したのである（山下 2000, 70）。第 2 に 1937 年に勃発した日清戦争による影響である。日清戦争により、中国大使や横浜総領事館が引き上げ、中国人たちの生活が厳しくなっていった。また、日本側による中国製品の輸入制限や中国側による日本製品のボイコットなどで、横浜の中国人たちはさらに苦しくなっていったのである（伊藤 2005, 88）。

1945 年の第 2 次世界大戦終戦により、横浜の中国人社会もまた変遷を経験する。なかでも、大陸と台湾の政治対立による影響は大きい。現在横浜には 2 つの中華学校がある。台湾支持者が運営する「横浜中華学院」と大陸支持者が運営する「横浜山手中華学校」である。両者は、もともと「横浜中華学校」という 1 つの学校だった。しかし、政治対立により 2 つに分裂した。このように、両者の政治対立は子弟教育に顕著である。

また、中華街のイベントにも大陸支持者と台湾支持者の対立がみられる。横浜中華街における政治対立は普段は可視化できるほどに顕在化しているわけではない。しかし、毎年 10 月になると、その様相ははっきりあらわれる（山下 2000, 74）。10 月 1 日の国慶節と 10 月 10 日の双十節である。国慶節には中華人民共和国の国旗が、双十節には中華民国の国旗がそれぞれの支持者によって掲げられる。こうした日には、爆竹や獅子舞など、中華系の伝統行事が盛大に行われる（山下 2000, 74）。一方、政治的に対立している大陸支持者と台湾支持者であるが、1990 年には両者の歩み寄りもみられた。1986 年に出火によって被害を受けた関帝廟を両者が協力して出資し再建した

のである。その完成式典に政治的立場に関わらず、2,000 人以上が集まった（山下 2000, 75）。以上のような変遷を経て、横浜中華街は現在に至っている。

第３項　神戸における中国人の歴史

神戸港は、長崎や横浜、函館に遅れること９年、1868 年に開かれた。この年が神戸における中国人社会と南京町形成の起源となる。先述のように、神戸港は 1900 年には日中貿易の 60%を占める港であった。これは、中国人貿易商が数多くいたことを物語る。また、その他にも横浜と同様、三把刀業者などの雑業者が多く進出していた。その中国人社会の形成を考えるうえで、まず触れなければならない点が２つある。

まずは、居住形態である。横浜同様、神戸も外国人の居住に関しては、1899 年まで居留地が設置された。しかし、横浜と異なるのは、神戸の中国人たちは居留地内での居住や商売が基本的には許されていなかった点である。これは欧米から来た外国人たちが条約国の国民であったのに対して、中国人は無条約国の国民だったからである（過 1999, 36）。また、神戸の居留地が狭かったというのも１つの理由だと考えられる（山下 2008, 224）。これらの理由から、中国人たちは居留地の西側にある「雑居地」[10]と呼ばれる地区に居住した。そして、そこで多くの中国人が商売を営むようになった。この雑居地が現在の南京町のもととなる。

次に、出身地の多様性である。横浜同様、神戸には広東から来た中国人が多かった。しかし、横浜においては広東人が大多数だったのに対して、神戸には広東人を中心としつつ、福建や浙江・江蘇からの人々も多くいたのである（陳 2005, 106）。こうして、「極めて多元的な出身地別構造」（陳 2005, 106）のもと、神戸の中国人社会は形成されていく。また、1930 年には 6,600 人を超える中国人が神戸にいたが、これは関東大震災などにより、横浜から神戸に移動した者が多くいたことが考えられる。

出身地が多様であることは、すなわち同郷組織の多様化につながる。神戸では、三江幇、福建幇、広東幇が組織された。このような同郷組織はそれぞれ、三江公所、福建公所、広業公所を設置した。そして、1983 年には各組織を統括するために、中華会館が完成する。これは、出身地ではなく「中国人」として団結して、日本での生活をより良くしていくためであった。すなわち、中華会館の誕生は、当時の在神中国人にとって、「出身地主義から新たなナショナリズムへの目覚め」（陳 2005, 107）となったのである。

前項では、横浜の中国人社会がいくつかの転換期を経て現在の状況に至っている点を紹介した。神戸の中国人社会も同様に、いくつかの転換期を経て形成されていった。

開港による中国人社会の形成期、第２次世界大戦後、中国の改革開放後である。これらの時期には、制度変革を伴う社会変動と、神戸の中国人社会への新参者の流入という特徴が挙げられる（陳 2005, 110）。

第１の転換期は、これまでみてきたように、開港によって日中貿易に携わる中国人が多く来日し、神戸に中国人社会が築かれた時期である。第２の転換期は、台湾人の到来である。第２次世界大戦後、在日中国人にかけられていた制限はほとんど取り除かれた。また、日中貿易は量、方法ともに限定的なものとなった。そのため、多くの中国人は貿易を諦めて、不動産業や製造業など他の職に就いた。なかでも、新来中国人と見なされた台湾人が数多く含まれていた[11]。そして、第３の転換期は、次節で触れることになる、ニューカマーの到来である（陳 2005, 110-111）。（もちろん、神戸に限ったことではないが）このような多様な構成のもとで、神戸の中国人社会は発展していった。

こうした神戸の多元的、あるいは多様性のある中国人社会の特徴を陳は、「共生」にあると述べる。すなわち、日本製品の販路を広げるために地元の政財界と密接な関係を築いた点、中国人も日本人とともに阪神大震災で「共死」を経験した点、大陸出身者と台湾出身者が共生している点である（陳 2005, 112）。なかでも、大陸出身者と台湾出身者の共生については、横浜の中国人社会と比べ対照的である。例えば、先述のように、横浜では政治対立のもとで子弟の教育を担う重要な役割を果たす中華学校が大陸系と台湾系に分裂した。一方、神戸では分裂は免れている。この点で、まさに多元性や多様性を特徴にもつ神戸の中国人社会の姿をみることができる。

第４項　長崎における中国人の歴史

これまで、日本３大中華街を擁する横浜と神戸における中国人社会の形成過程をみてきた。最後の長崎は、先述した通り、在日中国人社会の始まりの地である。そのため、横浜や神戸よりも格段に長い歴史をもつ。長崎港は 1570 年頃に、対ポルトガル貿易のために、大村藩によって開かれた。そして、中国人が長崎に定住し始めたのは 1600 年頃である（陳 2005, 120）。

周知の通り、1600 年代から日本は鎖国状態にあった。その間、長崎は当時の日本における唯一の貿易港であった。その背景にあったのは、キリスト教に対する禁教令である。それまで、ポルトガルとも貿易を行っていた日本だったが、島原の乱を機に貿易相手をオランダと中国に限定した。鎖国により、日本における中国人たちの生活も長崎に制限された。このように、この頃の中国人の生活は幕府による禁教令の影響が

大きいと言える。例えば、長崎に残る「唐四箇寺」にそのことが垣間見える。当時、長崎の中国人は華東地方[12]から来た人々であった（譚 2008, 28）。かれらは、出身地別に郷幇を形成し、４つの菩提寺を建立した。興福寺（三江幇）、聖福寺（広東幇）、福済寺（泉樟幇）、崇福寺（福州幇）である。これらの菩提寺は、長崎の中国人たちにとっては、礼拝の場、供養の場、そして団結の象徴として大きな意味をもっていた。しかし、それ以上に、幕府に対して自分たちがキリシタンではなく、仏教徒であることを示していたという点で大きな意味をもっていた（譚 2008, 30）。

こうして中国人たちは、日本の鎖国のもと、1689 年には第 1 項で述べた唐人屋敷に集住させられる。唐人屋敷への集住令により、唐船船員と在住中国人は明確に区分されるようになった。また、新規の定住は困難になり、中国人たちは日本社会に同化していった。1854 年に開国されると、中国の戦乱などで唐人屋敷に残った者たちは非条約国民と扱われ、苦しい立場に置かれた。そのため、かれらは外国人居留地に「外国人付属」の中国人として貿易を続けた。そして、貿易時代からの福建省、三江地域出身者に広東出身者が加わり、長崎の中国人社会が始まったのである（陳 2005, 121-122）。

1868 年に唐人屋敷が外国人居留地に編入されると、唐人屋敷居住者や外国人居留地から多くの中国人が、新地に集まった。貿易商や雑貨商が栄えた新地は、やがて長崎における中国人社会の中心となった。一方で、唐人屋敷の代わりに中国人たちは新たな同郷組織を作った。1869 年には福建商人による福建会館と広東商人による広東会所、そして 1878 年に三江出身者による三江会所が完成した（陳 2005, 122-123）。

1871 年に日清修好条約が締結されると、長崎にもようやく清国領事館が置かれた。そして、本国の保護のもと、長崎在住の中国人たちはさまざまな活動を展開した。まず、1893 年に孔子廟が完成し、1905 年には時中小学校[13]が設置された。そして、1907 年には、先述した３つの同郷組織を基礎とした長崎華商商務総会が長崎の中国人の中心団体として発足した（陳 2005, 123）。

最後に、長崎における中国人数の推移と出身地をみておこう。安政開国以降、欧米人に伴って、多くの中国人が長崎に流入した。例えば、幕末から明治初期にかけて 100 人台から 700 人前後に増加している。また、1899 年に外国人居留地が廃止されると、周辺的労働力を要した日本側の事情により、1920 年代後半には 1,200 を超えた。第２次世界大戦後に目を向けると、1981 年には、大都市圏へ移動した者が多くいたために、700 人台にまで減少する。一方、長崎における中国人は、そのほとんどが福建省北部の福州市出身である（阿部 1997）。その理由として、江戸時代に来航した者の多くが

福州出身であった点、明治以降には他地域出身者が長崎から出て行ったのに対して、福州出身者は長崎へ引き続き流入した点が挙げられる（許 1989）。このような過程を経て、長崎には現在の新地中華街を中心とした中国人社会が形成されていった。

第２節　ニューカマーの出現

前節では、横浜、神戸、長崎を中心に在日中国人オールドカマーの歴史的変遷を概観した。本節では、戦後に多く来日した中国人、すなわちニューカマーの変遷をみていく。

第１項　中国人ニューカマーの概要

過によると、戦後の在日中国人社会は 1972 年の日中国交正常化を挟んで前後期に分けられる（過 1999, 59）。まず、前期を過は次のようにまとめる。1950 年代から 1970 年代末まで、在日中国人の数は４～５万人と大きな変化はなかった。これは、1972 年まで、日本と中国の国交が断絶されていたからである。

日本の敗戦とともに、下関条約で中国国籍を失った台湾出身者は中国国籍を取り戻した。国籍回復によって台湾出身者は「新華僑」と呼ばれ、当時の在日中国人の多くを占めるようになった。例えば、1948 年の統計によると全中国人の約 40%が台湾出身者であった。そして、福建、広東、三江地域、山東に台湾を加えた地域がこの時期の在日中国人の主な出身地となった。1949 年に中華人民共和国が成立すると、国民党が政権を握る台湾は大陸から離れていった。そのなかで、日本は台湾との外交を続け、中華人民共和国を認めなかった。そして、大陸出身の中国人には出入国管理条約などで厳しい制限が加えられた。その結果、大陸出身者は帰国ができず、多くの問題が発生した。

この時期の職業に目を向けてみよう。中国は戦勝国であったため、1952 年のサンフランシスコ講和条約まで、在日中国人は事業経営などで成功していた。しかし、その後は日本の経済発展とは反比例して衰退していった。また、数多くいた三把刀業は料理人の「一刀独栄」となった。在日中国人たちは外国人であるために、就職できないなどの壁にぶつかった。そのため、２世や３世は親の仕事を継ぐほかなかった。こうした在日中国人の経済的困窮や雇用面での障害は 1970 年代になるまで改善されなかったという（過 1999, 59-62）。

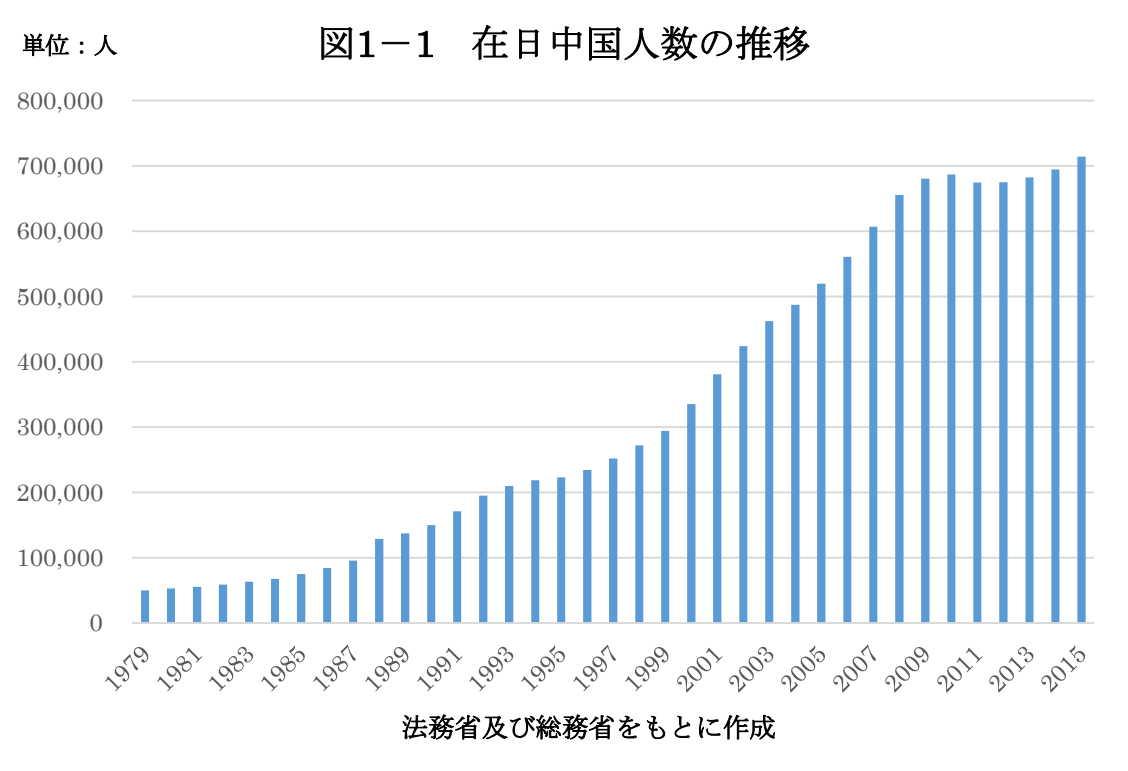
次に後期である。1970 年代末、とりわけ 1980 年代に入ると、在日中国人社会に大きな転機が訪れる。1978 年の改革開放政策（以下、開放政策）によって、中国人の移

動が自由になったのである。そのため、この時期を境に来日する中国人は飛躍的に増加した。この時期に来日した人々は、戦後流入した中国人のなかでも新しい部類であり、いわゆる「ニューカマー」と呼ばれている。先述の通り、戦後 1950 年代から約 30 年間横ばいだった在日中国人人口は、開放政策によって爆発的に増えることになった。その皮切りとなったのが就学生や留学生（以下、留学生）などの学生であった。

表１―１　年次別在日中国人数（単位：人）[14]

年次	人数	年次	人数	年次	人数
1979	50,353	1992	195,334	2005	519,561
1980	52,896	1993	210,138	2006	560,741
1981	55,616	1994	218,585	2007	606,889
1982	59,122	1995	222,991	2008	655,377
1983	63,164	1996	234,264	2009	680,518
1984	67,895	1997	252,164	2010	687,156
1985	74,924	1998	272,230	2011	674,879
1986	84,397	1999	294,201	2012	675,370
1987	95,477	2000	335,575	2013	682,402
1988	129,269	2001	381,225	2014	694,974
1989	137,499	2002	424,282	2015	714,579
1990	150,339	2003	462,396		
1991	171,071	2004	487,570		

出所：法務省及び総務省をもとに作成



また、在日中国人急増の他の背景には、中国帰国者およびその家族や日本人の配偶者の増加もある。1990 年代に入っても、これらの人々を中心に在日中国人はその数を順調に伸ばしていった。そして、2000 年代に入っても変わらず増加し、2007 年にはそれまで在日外国人でトップを走り続けてきた韓国・朝鮮人を抜いた。2011 年から 2012 年にかけて、在日中国人人口は少し減少する。これは、2011 年 3 月に起きた東日本大震災に起因する。しかし、2013 年には再び増加し始めた。現在の在日中国人人口は、2015 年現在で 714,579 人と、依然として在日外国人のなかで圧倒的な割合を占めている。

オールドカマーと比較した時、出身地の変化にニューカマーの特色をみることができる（山下他 2008, 128）。1980 年代中頃まで、台湾出身者が在日中国人のかなりの割合を占めいていた。例えば、1959 年では全体の 47%、1974 年では全体の 51%を台湾出身者が占めていた（小田 2010, 53）。これは、台湾出身者が中国国籍を取り戻したことによる。1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて、台湾出身者が占める割合が減少する。代わりに著しい増加を見せるようになったのが、上海からの人々である。それまでほとんどいなかった上海出身者は、1988 年の時点では全体の 16%を占めていた。こうした上海出身者の多くは留学生などの学生であったという。また、この時

期には北京出身者も増加した（小田 2010, 53）。

1990 年代に入ると、上海からの人々以外に急激な伸びを見せたのが東北３省（黒竜江省、遼寧省、吉林省）出身者である。この増加の背景には、中国帰国者とかれらの縁戚がある。張によると、1995 年から 2005 年までの 10 年間における中国から日本への移出は、東北出身者が全体の約 45%も占めていた（張 2009, 66）。

表１―２　年次別在日中国人数（単位：人）

地区	1986-1995		1995-2005	
	規模（人）	シェア(%)	規模（人）	シェア(%)
東北	40,525	29.24	134,805	45.45
華北	6,250	4.51	10,717	3.61
北京	14,278	10.3	4,765	1.61
華東	9,844	7.1	60,596	20.43
上海	37,183	26.83	14,099	4.75
華中	6,105	4.4	18,560	6.26
華南	17,162	12.38	20,459	6.9
西南	3,652	2.64	5,755	1.94
西北	2,486	1.79	9,310	3.14

出所：張(2009)

こうした傾向はそれ以降も続き、2011 年の在留外国人統計[15]によると、在日中国人の中で最も多いのが東北出身者であり、全体の約 36%となっている。また、これらの他に、従来在日中国人の多くを占めいていた華東地方、とりわけ山東省、江蘇省、福建省からの人々が東北出身者に続いている。

以上のように中国人ニューカマーが多く来日したが、属性に関して言えば次の人々を見逃してはならない。すなわち、在日中国人ニューカマーの先駆者となった就学生や留学生、日中関係に人生を翻弄された残留邦人、あるいは中国帰国者及びその家族である。次項からはこれらの人々の定着経緯を概観する。

第２項　在日中国人留学生の増加

先述のように、1970 年代末は中国の改革開放によって、中国人の海外渡航が緩和さ

れた時代であった。中国人留学生の歴史もまた、このことに端を発する[16]。日本における中国人留学生の増加には日中両国の社会的背景が深く関わる。まず、中国側である。坪谷によれば、改革開放は中国人の「出国熱」をもたらした。従来、中国では戸籍制度や居住・移動制限など、国民の社会移動は大きく制限されていた。そのため、改革開放が実施されると、国内移動と国外移動に大きなコストの差がないことに気づいた多くの人々が海外に目を向けたのである（坪谷 2008, 41-42）。また、このような国民の欲求だけでなく中国政府も留学政策を重視した。人材育成と通じた先進技術導入を海外に求めたのである（井口・曙 2003, 107）。こうした、政府と国民双方の思惑が一致したとも呼べる状況で、1984 年に中国国務院は「私費留学に関する暫定規定」を公布し、２年後の 1986 には公民出境管理法が出され出国が自由となったのである（坪谷 2008, 45）。

次に、日本側の要因に目を向けてみよう。まず挙げられるのが、1983 年に打ち出された留学生 10 万人計画である。これは、留学生政策を通じて先進国としての役割を果たすためであり（鈴木 2011, 153）、そして東南アジア諸国で親日国家を作るため（坪井 2006, 1）に策定された政策であった。第２に、日本側の労働力不足が挙げられる。当時、日本はバブル経済の好景気によって労働力が不足していた。そのため、日本の企業は留学目的で来日する中国人に注目したのである[17]（坪井 2006, 4）。

1985 年から 1990 年は、中国人留学生増加の第１次ピークと言われる。この時期、中国人留学生をめぐる社会問題が起きるようになる。在籍する学校にほとんど通学せず、単純労働に打ち込む者が頻出したのである。すなわち、留学生としての身分を隠れ蓑にし、不法滞在者に転ずる者が多くいたのである。このような、問題に対処するため、日本政府はさまざまな対策を講じた。その結果、1990 年以降の中国人留学生増加は鈍化する結果となった（坪井 2006, 6）。

留学生 10 万人計画では、21 世紀までに目標を達成することが予定されていた。しかし、1997 年に起きた通貨危機によって、多くの留学生が帰国した。1998 年の在日留学生数が５万人強であったことからもわかるように、当初の予定は崩れたのである。ところが、1999 年頃から留学生が急増し、2003 年に 10 万人の目標が達成された。その大きな立役者となったのが、中国人留学生であった。これが第２次ピークである（坪井 2006, 9）。

ここでも日中両国の政策に中国人留学生増加の背景がみてとれる。まず、日本側の政策は次のようにまとめられる。まず、1996 年に身元保証人制度が廃止され、大学による保証が認可された。これは、高額で悪質なブローカーを利用した身元保証を留学

生が利用しないようにするためであった。また、1988 年にはアルバイト制限の緩和や留学環境の充実が図られた。1999 年になると、在留許可期間が延長され、外国人の地位が向上した。そして、2000 年以降も入国審査書類の削減、大学等の教育機関による受け入れ審査、日本留学試験を用いた渡日前の留学許可が実現した（坪谷 2008, 55）。

では、中国側の政策はどうだったであろうか。坪井によると、第２次ピークの背景には中国の高等教育拡充策があるという。先述のように、中国は高度人材育成のため、海外に留学生を数多く送り出した。一方で、国内でも人材育成を図るために高等教育の大衆化を推進した。そのことが教育の流動化を促したのである。そして、アルバイトをしながら留学ができるという利点が留学を希望する中国人の目を日本に向けさせたのである。また、出身地域にも中国人留学生増加の背景がみてとれる。すなわち、華東地方や東北地方から多くの留学生がやって来るようになったのである。なかでも東北地方の出身者が目立った。東北地方には多くの朝鮮族が住んでおり、かれらの多くは第１外国語として日本語を学ぶ。そのため、日本の大学や日本語学校は東北地方を中心に勧誘したのである（坪井 2006, 9-13）。

以上の経緯で 1980 年代末から増え始めた中国人留学生は、2015 年末の時点で、台湾出身者も含めると約 11 万人である（法務省 2015）。この数字は、永住者を別とすれば、在日中国人の中で最も大きな割合を占めている。永住や技術・人文知識・国際業務など、他の在留資格に切り替えた元留学生もいるため、留学を背景に来日した中国人はさらに増加すると考えられる。また、日本における留学生全体の数においても、中国人留学生の数は突出している。2015 年末の時点で、日本には 25 万人弱の留学生がいる（法務省 2015）。上記の数に照らし合わせると、実に半数近くが中国からの留学生ということになる。このように、来日時期と数の双方において、中国人留学生は中国人ニューカマーのなかでも際立つ存在となっている。

第３項　中国帰国者の出現

日本に居住する外国人の中には、単純に「外国人」という括りではとらえられない人々がいる。例えば、日本とブラジル両国にルーツをもつ日系ブラジル人が挙げられる。一方、在日中国人に目を向けてみると、「中国帰国者」（以下、帰国者）も日系ブラジル人のように「特殊性」を帯びて日本で暮らす人々である。帰国者は、研究者だけでなく、1980 年代からマスコミにも注目され、大きく取り上げられてきた人々である。かれらは、どのような背景で日本社会に登場したのであろうか。

帰国者の歴史的背景は戦時まで遡る。1932 年に日本が中国東北部に満州国を建国し

た。同時に、多くの日本人が農業移民[18]として満州に渡った[19]。大戦が始まり、敗戦が濃厚になると、日本政府は「根こそぎ動員」で連合軍に対抗した。その結果、満州の開拓団の男性もほとんど招集され、女性や子ども、老人が開拓地に残された。そして、1945 年 8 月 9 日のソ連参戦で、残された人々は開拓地からの避難を余儀なくされた。当時、避難用の列車は軍属やその関係者が優先されたために、開拓地の人々は、歩行による避難をするほかなかった。そして、その避難の道中で多くの者が命を落とした（蘭 2016, 5-6）。死の危険が常に付き纏う状況で、女性たちは中国人家庭に入ったりして生き延びることができた。また、子どもたちは親と生別、あるいは死別した。終戦を迎えると、中国本土にいる日本人の引き揚げが問題となった。そのために行われたのが前期（1946 年～1949 年）と後期（1953 年～1958 年）の 2 回にわたる集団引き揚げであった。

前期集団引き揚げは、アメリカ軍、国民党軍、日本政府の役割分担のもと行われた。この時期、満州や関東州から約 127 万人の日本人が引き揚げた（呉 2004, 52）。一方で、1949 年に前期集団引き揚げは終了するが、その時点で、満州奥地にいた者など多くの日本人が満州に残された。こうした人々は中国残留日本人と呼ばれ、その一部が後の中国帰国者となる。残留日本人は、残留婦人と残留孤児、日僑 2 世に大きく分けられる。厚生労働省によると、残留孤児とは終戦当時の年齢が 13 歳以下の者を指し、残留婦人とはそれ以外の者を指す[20]。

後期集団引き揚げは、中華人民共和国が成立後に日中両政府の交渉で始まった。この時、前期集団引き揚げが国主導で行われたのに対して、後期は民間主導で行われた。中国にいる肉親の安否を知りたいという人々の希望から、日本赤十字社や中国紅十次会が中心となり、行われたのである。ただし、後期集団引き揚げは対象者にとって厳しいものであったと南は言う。すなわち、中国人と結婚した夫人は、夫をともなって帰国できなかったうえに、経済的理由から里帰りのための一時帰国も制限されたのである（南 2010, 122）。こうして、1958 年の引き揚げ終了までに、約 33,000 人が日本に帰国した（蘭 2016, 6）。

以上、2 回にわたり集団引き揚げが行われたが、残留日本人はまだまだ数多くいた。かれらはその後 30 年以上も日本に帰れなかった。冷戦構造によって、日中が国交を断絶したからである。1972 年に日中の国交が回復すると、ようやく日本への扉が開かれることになる。ここに、「中国帰国者」が生まれたのである。こうして、中国残留日本人は、帰国者へと変わり日本に「帰国」するようになる。しかし、かれらにとって、帰国は容易ではなかった。すなわち、日本人であるという証明が必要だったと蘭は次

のように指摘する。残留婦人の関しては、身元の確認が比較的容易であった。一方の残留孤児は、身元の確認が非常に難しかった。仮に日本人であるということが証明されても、日本での肉親探しや中国側の養父母の許可が必要だったのである（蘭 2016, 6)。ただ、この「帰国の壁」とも言える日本側の要求は 1984 年に「中国残留日本人孤児問題の解決に関する口上書」が日中間で交換されたことによって、緩和される。そこには、孤児に永久帰国の希望があれば、身元が未確認でも日本政府は受け入れる旨が盛り込まれた（呉 2004, 80)。そして、1985 年には「身元未判明孤児の永住帰国受入れ（身元引受人制度の創設)」が実現した（中国帰国者支援・交流センター)。また、この口上書によって、孤児の家族が渡日をした場合、かれらが中国籍であっても認められるようになった（呉 2004, 80)。

以上の流れで、残留日本人は次々に帰国した。かれらは、帰国後の生活が安定すると、中国から家族を呼び寄せるようになる。それは、１人あたり 20～30 人と言われている（蘭 2016, 6)。現在、日本にいる帰国者は 20,000 人強であり（中国帰国者支援・交流センター 2016)、家族も含めると 15 万人前後だと言われる（蘭 2016, 6)。なお、現在は残留孤児の 91%帰国している（蘭 2016, 6)。

第３節　小括

本章では、在日中国人の歴史をオールドカマーとニューカマーに分けて概観した。日本における中国人社会は、長崎開港にまで遡る。当初、比較的自由に日本と貿易を行っていた中国であったが、日本の鎖国政策によって、オランダとともに行動が長崎に制限されるようになった。そこでは、福建や三江、広東の商人たちが同郷組織を作り、生活の安定を図った。その後、幕府の締め付けが厳しくなると、中国人の活動範囲はさらに狭い唐人屋敷へと追い込まれていった。1854 年に鎖国が終了すると、長崎に限定されていた海外貿易は横浜、神戸などにも広がっていった。鎖国にともない、多くの中国人が西洋人の使用人として来日した。これらの人々は三把刀業や通弁の職で活躍した。そして、日本での生活が長くなるにつれて、長崎、横浜、神戸では中華街が形成されていった。

第２次世界大戦が終わると、戦前とは全く異なる様相で中国人が多数流入するようになる。そのきっかけとなったのが、留学生であった。また、引き揚げ者と移民という「二重の性格」（蘭 2000, 3）をもつ中国帰国者やその他の資格をもつ人々も多く来日した。こうした人々は、福建や三江、広東が在日中国人の出身地の主流を占めていたオールドカマーと異なり、東北地方から数多くやってきた。以上のような経緯で、

在日中国人は増え続け、現在では従来在日外国人のほとんどを占めていた韓国・朝鮮人を抜いて最多になっているのである。

---

[1] 一般的に華僑とは、海外に居住する中国系の人々のうち、中国国籍を保有する者を指す。一方、華人とは中国以外の国籍を保有する者を指す。両者を厳密に分けることは難しく、現在では華人の方が多く使われている（山下 2005, 18-19）。
[2] 中国内外で中国人たちが出身地に基づいて形成した同郷集団。
[3] 鄭成功が清朝に抵抗するために、台湾で立ち上げた政権。1662 年に成立し、1683 年に鄭氏が清朝に降ったため滅亡した。
[4] 清朝が鄭政権の弱体化を狙って、広東省から山東省までの海岸線から 15km 以内の住民を強制的に内陸部に移動させた政策。
[5] この時期は第２節で触れる。
[6] 開港とは、貿易のために市街地と港を開くことであり、開市とは市街地のみを開くことである（伊藤 2013, 12）。
[7] 料理人の包丁、仕立て業の鋏、理髪業の剃刀という 3 種類の刃物を指す中国語。
[8] 外国人の居住制限を解除し、日本国内における居住を自由とした政策。1899 年から実施された。
[9] こうした女性は「南京らしゃめん」と呼ばれ、軽蔑された（山下 2005, 69-70）。
[10] 日本人の居住地区に一定範囲設けられた地区で、外国人の居住が許可された。
[11] 1974 年では、在日中国人の 50%以上が台湾出身者であった（小田 2010, 53）。
[12] 山東省、江蘇省、安徽省、浙江省、江西省、福建省、上海市を総称した地域。
[13] 1987 年に休校となった。現在、跡地は中国語学校となっている（阿部 1997, 88）。
[14] 台湾出身者を含む。
[15] 在留外国人統計における中国人の出身地統計は 2011 年までであり、それ以降はとられていない。
[16] 中国人留学生の原点は、1896 年と言われている（鈴木 2011, 58）。しかし、本稿ではニューカマーに焦点あてるため、戦前については触れない。
[17] 当時、留学ビザで来日した者は留学生、日本語学校で日本語を学ぶ者は就学生と区別されていた。就学生は、アルバイトをするうえで、留学生よりも厳しい制限がかけられていた。そのため、留学生を目指して多くの就学生が来日した。なお、2010 年に就学と留学の区分は撤廃された。
[18] これらの人々が満蒙開拓団とも呼ばれる。
[19] この他に、都市部に都市部に居住する一般日本人もいた（蘭 2000, 27-28）。
[20] 女性意外にも少数ながら残留男性もいたため、残留婦人等と厚生労働省では表記される。しかし、残留男性は極わずかであったため（呉 2004, 7）、本稿では残留婦人と表記する。

第２章　母親たちの「創造的教育戦略」

第１節　課題設定

ニューカマーの子どもの育ちの過程を描き出すには、かれらと親の関係を見逃してはならない。なぜなら、ニューカマーの子どもたちは、かれらにとって最も身近な「重要な他者」である親との関係や相互作用のなかで成長していくからである。

在日ブラジル人の教育戦略を考察した児島(2006)によると、かれらは主に経済的な理由により、来日の際に保有していた「家族の物語」を修正していくことになるという。「家族の物語」とは、「家族としての移民の論理づけ」 の問題である。すなわち、「だれが、何のために移住するのかについての家族の『物語』」が形成されるのである（広田 1997, 58）。こうした物語は、かれらが移住社会で直面する状況を定義する役割をもつ。換言するならば、かれらは形成された「家族の物語」にしたがって移住先社会を生きているのである（広田 1997）。ここで気をつけなければならないのは、「家族の物語」は随時修正される点である。母国から異質な場所に移動した移民は、移住先社会に適応する過程で、母国では経験したことがないものごとに遭遇する。また、多くの困難や壁にぶつかることもある。そうしたなかで、かれらが当初抱いていた「物語＝状況の定義」（広田 1997, 59）は再構成されていくのである。

こうした「物語＝状況の定義」の再構成は、「永続的ソジョナー」を生産することに寄与する。「永続的ソジョナー」とは、漠然とした帰国の意思をもつが、具体的な帰国の計画を持たない移民を指し、ソジョナーと定住者の中間に位置する概念である(Uriely 1994)。本章の対象者に引きつけると、かれらも来日期間の長期化につれ、来日当初に抱いていた計画を変更せざるをえない者が多い。その大きな要因の１つが子どもの教育である。本章の対象者の多くは「日本に長い期間いる予定はなかった。」と語る。しかし、中国語が話せない、あるいは「日本人化」していく我が子をいかに育てるのかという難題にぶつかった時、かれらは帰国への想いをもちながらも、その計画の具体化は困難になる。では、そのような状況のなか、かれらはどのような教育的営みを展開するのであろうか。そこで、本章では非集住地域に居住する在日中国人ニューカマーの母親たちが限られた選択肢のなかで展開する教育戦略を明らかにする。その際、以下に２つの視点を設定する。

第１の視点は、中国人ニューカマーのライフストーリーである。志水(2013)が言うように、教育戦略を文化的再生産の一環としてとらえるならば、親がどのような人生を歩んできたのかが極めて重要になる。すなわち、かれらが培ってきた経験や資源が

子どもの教育という行為において、いかなる形で立ち現れてくるのかという点に着目することが必要なのである。

ライフストーリーにはいくつかの立ち位置がある。実証主義アプローチ、解釈的客観主義アプローチ、対話的構築主義アプローチである（桜井 2002）。本章では、対話的構築主義アプローチのスタンスをとる。桜井によると、対話的構築主義アプローチでは、語られた内容に関心を寄せるとともに、どのようにして語られたのかという点にも注意を払う必要がある。すなわち、対話的構築主義アプローチは、調査対象者の語りである一方で、インタビュアーとの「『共同作品』」とも考えられるのである（桜井 2002, 28）。インタビューを行っていると気づくことがある。それは、かれらが日本に関する知識をほとんどもたずに来日してくるという点である。そうした状況下では、子どもの教育に関する知識も乏しいのは想像に難くない。例えば、かれらは日本に存在するESやISを知らない、あるいは耳にしたことがある程度だという。そして、筆者の質問によって初めて、それらの学校と日本の学校を対比させるようになるのである。こうした観点からみると、本章で用いるデータも調査対象者たちと筆者がともに作り上げた作品であると考えられる。

第２の視点は、学校教育への意味づけである。言うまでもなく、学校は子どもが成長する過程で中心的な役割を果たす。そのため、学校選択は親にとって非常に重要な作業となる。後述するように、制度的完全性を一定程度備えた集住地域では、ES やISを視野に入れた学校選択ができる。一方、そうした学校が存在しない非集住地域では、日本の学校を選択せざるをえない。ここである疑問が浮かび上がってくる。日本の学校教育しか選択できない状況を親はどのようにとらえているのかという点である。そのような地域に住む親たちは、一方的に日本の学校を押し付けられて子どもを通わせているのであろうか。仮にそうであったとして、親はどのような対策を講じるのであろうか。そこに主体的な戦略は存在しないのであろうか。戦略は「高度に状況依存的」で、「貫くべきものではなく変更すべき」ものである（石川 2001, 154）。であるなら、資源が限られた地域に住む者も、状況が絶えず変化するなかで戦略を変えていると推測できる。例えば、ES がなくても日本の教育に意味を見出す戦略に変更する可能性もあるし、逆に意味を見出せない場合は他の戦略をとる可能性もある。また、最初から日本の教育に積極的な意味を見出し、日本の学校を戦略的に利用する可能性もある。そこで第２の視点として、日本の学校に対して親がいかなる意味づけをしているのかに着目する。

第２節　在日ニューカマーの教育戦略に関する先行研究

ここでは在日ニューカマーの教育戦略に関する研究を概観し、本章の位置づけを確認する。志水・清水はブルデューの文化的再生産論をもとに日系ブラジル人、インドシナ難民、韓国系ニューカマーの教育戦略を析出している。その際、志水らは「家族の物語」（広田 1997）に着目し、家族の移住に対する定義づけが教育戦略に影響する点を明らかにした。すなわち、日系ブラジル人の場合は「一時的回帰の物語」から「安定の物語」へ、インドシナ難民の場合は「安住の物語」、そして韓国系ニューカマーは「挑戦の物語」という物語のもと、教育戦略を行使するというのである（志水・清水 2001）。また、児島も「家族の物語」が学校選択に及ぼす影響に焦点をあてる。そして、「来日初期」「長期化の過程」「滞日 10 年前後」と時間が流れるにつれ、「家族の物語」が変化する点や、その変化のなかで日本の公教育とブラジル人学校を柔軟に選択していく姿を描いている（児島 2006）。

三浦は、社会関係資本を資源として用いながら教育戦略を組み立てる在日フィリピン人母親を２つのカテゴリーに分けて分析している。日本で子育てをする国際結婚をした母親と、子どもを母国に残して出稼ぎに来た母親である。まず、国際結婚をした母親の場合は、教会ネットワークや子育てネットワークをはじめとする社会関係資本のもと、規則の遵守やフィリピン文化の継承などの教育戦略を組み立てていた。一方、出稼ぎで来日した母親にとって、子どもを日本に呼び寄せるかどうかが大きな教育戦略となる。彼女たちにとって、子どもを呼び寄せるかどうかは夫婦間におけるジェンダー規範に対する葛藤に左右されるというのである（三浦 2015）。

在日中国人の教育戦略を取り上げた研究としては、坪谷(2008)、賽漢卓娜(2011; 2014)、趙(2011)、舘(2013)が挙げられる。留学生として来日し、卒業後も日本に居住する中国人夫婦の「再生産戦略」を調査した坪谷は、かれらの戦略を「帰国戦略」ととらえた。そして、「帰国戦略」で最も重視されるのは、アイデンティティの保持や中国語の習得である点を明らかにした。また、かれらの戦略を支えるために重要な役割を果たすのが、中国語学校、あるいは中国語教室であるという（坪谷 2008）。

賽漢卓娜は、日本の農村に嫁いだ中国人女性の教育戦略に言及している。すなわち、国際結婚をした中国人母たちは日本語が生活の中心を占める環境のもとで子どもたちを「付加価値の高い女性」「独立型マージナルマン」「優秀な日本人」に育てようとするのである（賽漢卓娜 2011）。そして、賽漢卓娜はその研究を発展させ、小学生段階と中学生以上の段階における中国人母親の教育戦略を比較する。小学生段階では、「自立／移動できる教育方針」に基づいて教育が行われていた。一方、子どもが中学生以

上になると、子どもを尊重した戦略へと切り替るのである。そして、こうした子ども尊重の教育戦略は「結果的同化」につながるという（賽漢卓娜 2014）。

趙は、農村出身の中華料理人の教育戦略を考察し、次の２点を指摘する。第１に、中華料理人は教育力が低いため、積極的に学校に関与できない点である。第２に、男尊女卑の思想から、息子と娘の将来展望において異なる戦略を行使している点である（趙 2011）。

舘は、中華学校に子どもを通わせる老華僑保護者とニューカマー保護者の教育戦略に注目する。老華僑保護者にとって、民族学校は「安心感」を与えてくれる場所であり、自分が卒業した学校に子どもを入学させるのは「普通のこと」であると述べている。一方、ニューカマー保護者は「母国語」や「学力」を重視して子どもを入学させると分析している（舘 2013）。

以上、在日ニューカマーの教育戦略に関する研究を概観した。宮島(2002)は、「移民マイノリティの示す適応の戦略は、能力、コスト、そして周囲の差別的反応などに集約され、ほとんど一時しのぎ的に『切り抜ける』という選択に向かいがちである」(140)と述べる。宮島の主張に対し、賽漢卓娜(2014)は、「切り抜け」の可変性を指摘する。本章の関心に引きつけるならば、「地域性」という点に、その可変性を見出すことができる。志水・清水(2001)、児島(2006)、坪谷(2008)、趙(2011)、舘(2013)に関して言えば、これらの研究は、主に ES などを選択肢に含むことができる地域で行われている。また、三浦(2015)の場合は、エスニック教会や地域学習室というフィリピン人同士の社会関係資本を蓄積できるネットワークが多く存在する地域で行われている。すなわち、これらの研究は活用できる資源が豊富な地域だからこそ見出せる戦略である。こうした地域では、一時的な「切り抜け」や単なる戦術が、さまざまなエスニックな関係性との出会いや相互作用によって、確固たる戦略へと変わることも考えられる。では、非集住地域に住む者たちはどうであろうか。教育戦略を分析する際、「語られないもの」に着目することが重要である（志水 2013）。先述のように、本章の対象者たちは日本に存在する ES の存在をほとんど認識していない。そのため、筆者による質問がない限り、かれらが自発的に ES の話題を発することはない。このような「語れないもの」も、志水が指摘する「語られないもの」ととらえるべきであろう。仮にかれらの適応の戦略が一時的な「切り抜け」であったとしても、「語れないもの」を「語られるように」してあげることで、それは主体性をともなった戦略へと変化するかもしれないからである。

第３節　母親たちの教育観と学校外教育

以上の議論をふまえ、次節からは母親たちが行使する教育戦略をみていくが、まずは彼女たちの教育観をみておこう。中国人移民の子どもは、親からホスト社会における「成功」を期待されており、その背景には、Wong(1998)が指摘するように教育による階層上昇がある。そのため、中国人移民は一般的に教育熱心である（坪谷 2008, 147）。本章で登場する母親たちも先行研究で指摘されてきたように、基本的には教育に対して熱心である。そんな彼女たちの教育に対する熱心さは、学校外教育に見ることができる。例えば、次節で登場する雪梅は、子どもにピアノや少林寺拳法、塾などの習い事をさせていた時のことを次のように語る。

> 息子はピアノもやっているのですが、…（中略）…幼稚園の先生が「この子はアニメなどの歌詞をよく覚えますね。」と言うんです。だから、私も息子にはもしかしたら音楽の才能があるのではと考えるようになったんです。／少林寺に関して言えば、私が習わせたかったというところです。男の子だし、中国の代表的な文化だと言えますし。だから、「習いなさい。」とよく言っていました。…（中略）…私も息子に中国文化を吸収させたかったですし。（雪梅）

次節で詳述するように、雪梅が考える教育達成の第一義は、「勉強」で将来を勝ち取ることである。そうした点から彼女は、日本の学校教育に否定的な立場をとることになる。しかし、自身の経験から「勉強」以外でも「学ぶこと」が階層上昇につながることを知っている彼女は、子どもに将来性を感じれば積極的に「勉強」以外の教育を施していく。また、中国文化の継承という雪梅自身の願いも、彼女が学校外の教育の場に子どもを送り出す要因となっている。一方、消極的な理由から、子どもにさまざまな習い事をさせる母親もいる。桂英である。

> 私たちは自分に能力がないので、お金を出して子どもたちに希望を託すしかありません。…（中略）…息子は４年生から塾に通わせています。娘は５歳から公文、6 歳からそろばんをやらせています。半年くらいそろばんをやりました。７歳からは水泳教室に通わせました。子どもを多方向で伸ばしたいからです。自分たちに教える力がないからお金を出して習わせるしかありません。（桂英）

このように、桂英は自分の「非力さ」から子どもたちに多くの習い事をさせている。

彼女は雪梅とは違い、教育が階層上昇につながることを知る一方で、具体的な方法を模索できないでいる。そのため、習い事をさせることで考えうるあらゆる可能性を子どもたちに持たせようとしているのである。こうした学校外教育を施そうとする姿は、子どもが来日初期段階である智愛と小芳、春燕以外の全員に見られる[1]。

ここで注意しなければならないのは、彼女たちには子どもたちを習い事などの学校外教育を受けさせるだけの経済的余裕があるという点である。本章の母親たちは、「経済的に困ることはない。」「日本人より上かもしれない。」と口々に語る。もちろん、「教育費が大きなウェイトを占めています。」「自分たちが食べられなくなったとしても、子どもを学校に行かせる。」と桂英が語るように、教育費が生活を圧迫しないほど裕福ではない場合もあるが、それでも余裕のある経済条件が彼女たちに学校外教育を選び取ることを可能にしているのである。

以上のように、積極的／消極的にかかわらず、熱心な教育観や経済的余裕もと、彼女たちが豊富に存在する学校外教育を主体的に選択している姿がみてとれる。一方、学校教育となると状況は一変する。どんなに教育に熱心でも、あるいは経済的に余裕があっても、ES や IS が存在しない Q 市では、日本の学校教育しか選択できない。つまり、日本の学校教育しか選択できないなかで、教育戦略を展開していかなければならないのである。

そこで、次節からは学校教育に着目して母親たちの教育戦略を描き出していく。その際、教育戦略を「望ましいと考える人間形成上の価値や将来像」を子どもが実現できるよう、「利用しうる資源」を選択しながら行う「意図的ないし無意図的」な諸活動ととらえる（児島 2006, 73）。また、児島が言うように、「日本社会という異質な世界」にニューカマーがどのように適応するかを明らかにするためには、「家族の物語」（広田 1997）に着目する必要がある(2006, 50)。そのため、まず母親たちのライフストーリー（生い立ちや来日経緯、現在置かれている状況など）を記述する。そのうえで、教育達成に対する意識や日本の学校に対する意味づけに焦点をあて、彼女たちが展開する教育戦略と教育戦略が編み出されていく過程を描き出す。なお、本節では各事例とも「生い立ちと来日経緯」「日本の学校に対する意味づけ」「教育戦略」の順に構成するが、小芳のみ日本の学校に対する意味づけが教育戦略そのものとなるため、まとめて記述する。

第４節　雪梅の教育戦略

第１項　生い立ちと来日経緯

雪梅は中国の東北部、遼寧省の生まれである。都市部で教師をしていた父のもとに誕生した雪梅であるが、幼少時に農村部に移り住むことになる。文化大革命の下放政策[2]によって、父が農村部に送り込まれたためである。以来、農村部で 20 年間を過ごしたという。そこでの生活を、農業以外にすることがなく、家も貧しかったと雪梅は振り返る。そうした環境のもと、１冊の本との出会いが彼女の人生を方向付けることになる。「風と共にさりぬ」である。この本に影響を受けた彼女は、原著で読みたいと思うようになる。また、「昔の子どもは家から離れたことがないから。」という雪梅は「外の世界」に対する憧れや好奇心ももっていたという。こうした経験から、雪梅は大学で英語を勉強したいと夢みるようになる。当時、村は教育環境に乏しく、高校さえなかった。また、中学校も雪梅が進学する時にようやく設立された。しかし、劣悪な環境でも「絶対高校に合格してやる。」と考えていた彼女は猛勉強の末、他の地域にある高校に進学した。

かねてからの夢であった英語の勉強ができると、雪梅は期待を胸に高校に進学した。しかし、彼女の進学先には英語の科目はなく、代わりに日本語が教えられていた。英語が学べず落胆する雪梅ではあったものの、「外の世界」への好奇心が、彼女を熱心な日本語の学習に向かわせることになる。彼女の高校は中高一貫校であり、そこに在籍する生徒には、中学校から日本語を学んでいた者も一定数存在していた。外部の中学校から進学した雪梅は、そのような生徒に３年半の遅れをとっていたが、誰よりも熱心に勉強をした。その結果、半年で校内でも上位に入るほど雪梅の日本語は上達した。

「テレビはニュースと日本語講座しか見なかった。」と語るように、高校卒業後も雪梅は熱心に日本語を勉強した。その努力が報われて、彼女は原材料を扱う貿易会社に就職することになる。日本語力を買われた彼女は、当時では比較的良い待遇で雇用された。しかし、収入のほとんどは手元に残らなかった。先述のように、彼女の家は、下放政策で農村に送り込まれたため、非常に貧しかった。雪梅には兄と妹がいるが、家が貧しかったために、妹の学費や兄の子どものお小遣いも彼女が負担していた。この頃には、彼女は一家の稼ぎ頭とも呼べる存在になったのである。

この時期は、雪梅が来日する契機となる時期でもあった。当時、彼女に日本語を教えていた日本語教師が雪梅に日本人男性を紹介したのである。家を養わなければならなかった雪梅は結婚を全く考えていなかった。しかし、紹介してくれたのが自分の恩師だったため、会うだけのつもりで恩師の紹介を受けた。これがきっかけで、２人は

交際をするようになり、結婚に至る。雪梅の両親は彼女の結婚に否定的であった。とりわけ、父親の日本に対する「悪い」イメージは最後まで拭い切れなかったという。結局、黙認という形で結婚を許された雪梅は、夫にともなわれて 1995 年に来日することになる。ここで注意したいのは、彼女が自分の幸せのためだけに来日したわけではないという点である。「愛情がないわけではない」と彼女は語る。一方で、来日した本当の理由は「家のため」だとも語る。日本で稼いだ資金で両親に家を買うため、また、仮に日本で思ったようにいかなくても、日本語を身に付ければ、中国に戻った際に武器になると考えての来日だったのである。

雪梅は来日後、P 県 R 市で 3 年間過ごした後、夫の仕事で Q 市に移り住むことになる。日本に来てからも、彼女の「家のため」の生活は続いた。自分の学業のために家の蓄えをほとんど使い果たした彼女は、「罪悪感に苛まれた」と振り返る。この罪悪感から、中国への送金こそあまりしなかったものの、両親のために家を建てるという目標のもと奮闘した。包装関係、パチンコ店、トラック運転手、さまざまな職業を経験した彼女は、懸命に貯金をした。その結果、来日わずか 3 年でその目標を達成させた。こうした生活を、非常に苦労したと雪梅は振り返るが、金銭面での苦労はなかったようである。結婚当時、会社を経営していた夫は幾度なく転職し、それが原因で家賃も払えないほど困窮していたようである。しかし、夫が生活費を何とか負担していたため、貯金に専念できたこと、そして「小さい頃から苦しい経験はしてきたから、苦労することは何とも思わない。」と語るように、仕事中心の生活を送っていたため、彼女自身は金銭面に苦しむことはなったのである。仕事中心の仕事を送っていた雪梅であったが、一方で彼女の勉強への想いも消えてはいない。先述のように、日本語を学ぶ場所として日本をとらえていた彼女は、来日後も「辞書は毎日見ている。」「今でも本を読んでいる。」と語り、今でも手を抜くことはないという。その結果、合格率 10% 未満の日本語の試験にも合格したとのことである。

1996 年に長男を授かった雪梅は子育てをするなかで、日本での生活に転機を迎えることになる。子どもが通う中学校の PTA 活動を通して、彼女は当時の校長から新しく来る中国人の子どもの日本語指導を頼まれたのである。来日後、ブルーカラー職にしか就いたことがない彼女は、校長の打診を快諾した。そして、教育職という仕事に非常に満足しているという。実際、彼女は自分のこうした経験を「天助自助者」[3]と表現している。この言葉には、熱心な勉強や苦労を厭わず働き続けた経験への想いが込められている。現在、雪梅は中国人の子どもに日本語を教える仕事のほかに、公民館などを利用して日本人に中国語を教えている。また、法廷通訳や警察に頼まれて、通訳

をすることもある。当初は帰国も視野に入れていたようだが、中国の環境に慣れないこと、日本での生活に慣れたことなどから、現在は帰国する意思はない。

第２項　日本の学校に対する意味づけ：「無責任な場所」

雪梅にとって日本の学校とは「無責任な場所」という言葉に集約できる。その理由には「無責任な教師」と「無責任な教育方針」が挙げられる。第１に、雪梅は「無責任な教師」に不満を抱いている。

> 先生は本当に無責任だと思います。…（中略）…小学校に行った時、授業中にもかかわらず子どもが教室を走り回っているんですね。そういう光景は中国では考えられません。１番印象深かったのは、息子が小学校２年生の時でした。…（中略）…友達が授業中に絶え間なく息子に話かけていたんです。先生も何も言いませんし、言っても聞きませんよね。だから、日本の教育にはとても不満です。今の高校に行かせたのも本当に後悔しています。中学時代もそうでした。…（中略）…ある日目にした光景ですが、授業中に１人の生徒が紙飛行機を先生に向けて飛ばしたんです。そして、ガムを噛みながら「お前、死ね。」と言っていました。そんな状況ですよ。（雪梅）

上記の語りのように、雪梅は日本の学校が教師と生徒間に存在する権力関係を軽視している点に不満を感じている。中国の教師は権威が高く、語りに見られるような光景はほぼみられない。つまり、雪梅にとって、生徒が教師のいうことに従うのは当然なのである。反対に教師が権力を行使して生徒をしつける行為はごく自然であり、またそれが教師の仕事なのである。ところが、日本では生徒をのびのび育てる方針であるため、雪梅は自身が想定する教育と日本の教育に大きな乖離をみるのである。第２に雪梅は「無責任な教育方針」にも大きな不満を感じている。

> 部活に参加させるのなら、保護者には納得できるだけの成績を示してもらわないと。日本の学校のこのようなやり方は絶対に許されないと思います。…（中略）…最低限のことができないのなら、部活に参加する資格なんてないと思います。…（中略）…以前、息子の部活が規模の大きい発表会に出たんです。ハイレベルなものでした。そういう時思うんです。音楽でここまで伸ばせて、どうして英語でできないのかと。…（中略）…子どもを預けているのに、もう犯

罪みたいなものじゃないですか。（雪梅）

雪梅にとって、学校は「勉強」[4]をする場所であり他のことをする場所ではない。そのため、雪梅は学校にも学業面での厳しい指導を期待している。一方、日本の学校は「勉強」以外にも力を入れており、生徒を全人格的に伸ばす教育方針をとっている。そのため、特に放課後勉強に充てるための時間を多く取られてしまうクラブ活動を雪梅は「勉強」を妨げるものと認識しているのである[5]。

では、雪梅にとって、子どもの教育達成とは何であろうか。「息子にも安定して暮らしてもらえれば良い。」と語るように、雪梅にとって教育達成とは子どもが安定した暮らしをすることである。そして、雪梅が望む教育達成を可能にするのは「学業達成」に他ならない。雪梅自身、満足な収入が得られ、そして Q 市に居住する中国人のなかで一定の地位にいるのは自分が熱心に勉強をした結果であると認識している。その経験から学業達成、つまり良い大学への進学こそが成功への道であると考えているのである。このように、「学業達成」を目標とする雪梅にとって、日本の学校は目標を達成できる場所ではない。そのため雪梅は、「仮に Q 市に ES が存在するなら通わせるか」という質問に対して「絶対に行かせます」と語るように、中国式の教育に強い思いを抱いているのである。

第３項　「学校との積極的交渉」から「声かけ戦略」へ

では、日本の学校に意味を見出せない雪梅はどのような対策を取るのであろうか。端的に示すならば、彼女は「学校との積極的交渉」や「声かけ戦略」を取るのである。

先述した通り、雪梅は教員や制度的な点で日本の学校教育に不満をもち、日本の学校を「無責任な場所」として認識している。しかし、無責任な教員や「勉強」が疎かにされる教育制度を目の当たりにしながらも、雪梅は最初から日本の学校を「無責任な場所」として認識していたわけではない。日本の教育に不満をもちながらも、雪梅は自身が望む教育を達成するために積極的に行動を起こすのである。学校の責任者にクレーム申し立てをすることで、少しでも状況の改善を試みたのである。にもかかわらず、学校の教育方針は変わらなかった。この時点ではじめて日本の学校は「無責任な場所」と位置付けられるのである。ただし、学校との積極的交渉は日本の学校を「無責任な場所」と認識してからも続いている点には言及しておかなければならない。すなわち、学校の責任者に直接言っても状況が改善されないのなら、さらに上の機関にクレーム申し立てをするという考えである。インタビューの時点で、「いつも校則と教

育の関連を考えています。いつか報告書にして提出できれば良いと思っています。」と語るように、今でも可能な限り学校への関与を念頭に置いて行動している。

では、日本の学校に積極的な意味を見出せなくなった雪梅はどのような対処をしたのであろうか。自身のクレーム申し立てが状況の改善に繋がらなかった時点で、日本の学校は雪梅が望む教育達成が果たせる場所ではなくなる。そこで雪梅は、学校に教育を委ねることを止め、自身で「学業達成」の大切さを子どもに説く「声かけ戦略」とも言える戦略に切り替えていくのである。

> 何日か前に「この世界で母親ほどあなたのことを考えている人いますか。あなたの彼女が良い子なのも知っています。でも彼女があなたにやさしくするのには理由がある。でも私があなたに良くするのには何の理由もないんです。」と息子に怒ったんです。ここまでしているのに何でわかってくれないのかと凄く怒りを覚えました。だから、「大学に行かなくても良いよ。あなたの人生だから。」「私がここまで言うのはあなたのため。別に自分の面子のためなんて考えたことはない。」とよく言っています。（雪梅）

また、「勉強したくないなら、将来皿洗いしかできないよ。」と語るように、「勉強」が最も大切だと考えている雪梅は、なぜ「勉強」が大切なのかという点を将来と結び付けて子どもに説いている。また、雪梅による「声かけ戦略」は「勉強」が将来に繋がるという点を説くだけにとどまらない。自分が子どもに対して、いかに愛情を注いでいるかという献身的行為をも説くのである。そして、その献身的行為に報いる義務、つまり「親への恩返し」を「声かけ戦略」に組み入れることで、子どもの「勉強」に対するモチベーションを高めているのである。

ここまで雪梅が日本の学校を「無責任な場所」と認識し、学校主導の教育から親による子どもへの「声かけ戦略」へ切り替える戦略を紹介した。では、これらの教育戦略の背後には何があるのだろうか。雪梅がもつ資本に着目するならば、彼女の生い立ちからもわかるように、圧倒的な言語的資本、つまり日本語力と雪梅自身の中国での経験にその背景を見出すことが可能である。

先述の通り、雪梅は福山市で中国語講師や通訳、中国人の子どもに日本語を教える仕事に就いている。いずれも高度な日本語が必要な職業である。雪梅はそうした高度な日本語を要する職業に就くために相応の努力をした。今でも図書館によく通い、毎日欠かさず日本語を学習している。その努力もあって、合格率 10%以下のような日本

語の試験にも合格した。また、雪梅自身の中国での経験も「学業達成」という教育戦略の根幹を支えている。「私自身、語学でのし上がったから。」と語るように、「勉強」することが安定した将来に繋がると雪梅は考えている。実際、来日後は日本語を勉強するために、日本語講座とニュース番組しかみていなかったとのことである。そういった努力が現在の自分を形成しているという認識が、「学業達成」という目標を自身の子どもにも設定するに至った理由であると推測できる。

以上のように、雪梅がもつ圧倒的な言語的資源が学校側との折衝を可能にし、そして中国での勉強の経験が「学業達成」という戦略の根幹をなしているのである。

第５節　小芳の教育戦略

第１項　生い立ちと来日経緯

前項では、日本の学校に否定的な意味づけをしながらもさまざまな戦略を駆使しながら教育達成を目指す雪梅の姿を描き出した。本項では、雪梅とは対照的に、日本の学校に肯定的な意味づけをしている例として、小芳の事例を紹介する。彼女の教育戦略を一言でまとめるならば、日本の学校の「戦略的利用」である。

ここでもまず、小芳の生い立ちと来日経緯を記述する。小芳の家庭は夫と妻、長男の３人で構成されている。小芳の両親は四川省の農村出身で、国策で同省の都市部に移住している。そこで生まれた小芳は都市部の出身ということになる。しかし、都市部に移動したものの、小芳の家族はそこでも農業に従事することになる。そして、彼女の戸籍は現在でも農村戸籍である。農村出身である点や、実家が農家という点が彼女の成長に大きな影響を与えることになる。

雪梅同様、小芳も幼少時は非常に家が貧しかった。そのため、農民階層からの「上昇」が家族にとっての目標であった。その手段が学校に通うことであった。しかし、先述のように小芳の家は非常に貧しかった。加えて、彼女には兄弟もいた。そのため、子ども全員を学校に通わせることが困難であった。そこで、子どもの中でも「１番賢かった」という小芳が家族の「上昇」の中心としての役割を担うことになったのである。「親が苦労しても、子どもには苦労をさせたくなかった。」と小芳が語るように、家族の期待を一身に受けた彼女は中学卒業後、「中専」[6]に進学する。成績が良かったため、本当は「高中」[7]に進学したかったという小芳であったが、結局高校進学に必要な点数に届かず、中専に進んだのである。そして彼女は、「実家が農家なので、農業しかないですよ。」という理由で、進学先でも農業を学ぶことになる。彼女が自分に農業しかないと考えるようになる背景には、両親の教育戦略が影響する。例えば、両親は

小芳に、「あなたは農民だから、農民の視点で物事を見なさい。」「農家の運命を背負っているのだから農業をしなさい。」と言い聞かせてきた。しかし、両親の考え方は、小芳には受け継がれなかった。反抗こそしなかったものの、「自分を抑えつけたくない。」という理由から、彼女は両親に従わなかったのである。

農業に縛られたくなかった彼女は、中専への進学をきっかけにその考えが確固たるものになっていく。進学先が都市部だったため、彼女は都市部出身者と交友関係をもつようになる。そこで比較的裕福な友人に「農業をやっていたら、一生農民のままだよ。」と言われたのである。以来、彼女は「実家で農業をしてはいけない。商売をしないといけない。」と考えるようになったのである。その後、彼女は衣料品店を自ら経営したり、雇われ店長などの職に就いた。そして、それらの仕事で彼女は成功した。また、成功は彼女自身のみならず、彼女の仕事が多くのオーナーをも成功に導いたという。こうした成功の経験を小芳自身は「親のいうことを聞かなかったから。」と語り、自信に満ち溢れていたと当時を振り返る。

以上のように、商売で成功し「上昇」を果たした小芳は、1992 年に現在の夫と知り合い、後に結婚した。1998 年に長男が生まれ、その 1 年後である 1999 年に夫が知人の紹介で料理人として日本に渡った。「日中間の格差とか、表面的な部分しかみていなかった。」と小芳が語るように、経済的な豊かさを求めての来日であった。当初、夫は３年ほど稼いだ後に帰国する予定であった。しかし、時間の経過とともにその認識は修正されていく。「新しい料理が多く出てきたから、帰っても夫はやっていけない。」と小芳が語るように、中華料理の変遷に夫がついていけないという理由で当面の帰国を諦めることになったのである。帰国の延期は、すなわち家族分断の延長を意味する。そのため、夫は在日期間が長引くにつれ、孤独を感じるようになった。そこで、家族を再編するために小芳は来日を決意した。小芳自身の来日に関しては、親族からの大きな反対はなかった。しかし、子どもが来日することには対しては周囲から多くの反対があった。とりわけ、日中間の歴史問題が大きな要因となり、「なぜ日本なのか、別の国に行けないのか。」などと反対された。そのため、子ども自身も日本に渡ることを躊躇したという。一方で、家族の再編を第 1 に考えていた小芳は子どもを納得させるために行動を始めた。彼女は、周囲とりわけ学校の教師に、日本の良い部分だけを伝えるように、悪い部分を語らないように働きかけたのである。尽力の末、息子を納得させた小芳は 2012 年に来日した。

既に述べた通り、小芳は中国である程度の成功をおさめ、「上昇」を果たしている。しかし、来日によって彼女は再度「下降」を経験することになる。来日後の小芳は、

夫と同じ中華料理店でウェイトレスの職に就いた。そこでの経験を彼女は「凄く惨め」と意味づける。中国では、自分の商売を持ち、車を運転し、そして友人との時間も多くもてたという彼女であるが、日本に来てからは、言語の壁によって皿洗いやウェイトレスの仕事にしか就けず、それに毎日を追われるようになったからである。中国では何でもできていた自分が、「外の世界」では何もできない状況を「地獄よりも深い。」と彼女は表現する。そのため、小芳と夫は帰国することも考えた。しかし、先述したように、夫が中国の変化についていけないという理由で帰国が困難になる。

小芳が来日してから１年４ヶ月になるが、この短い間に彼女は、帰国できない理由が夫だけはないことに気づく。子どもの適応問題である。すなわち、息子も中国の変化についていけないため、中国での「上昇」は困難だと考えるようになるのである。このような理由から、小芳は帰国への想いをもちつつも、Uriely(1994)が主張する永続的ソジョナーの様相を呈するのである。しかし、彼女が日本に留まる理由はこれらのような否定的な理由からだけではない。次節からみていくように、日本にいることが子どもにメリットをもたらす認識しているためでもある。

第２項　成長が可視化する場所と日本の学校の戦略的利用

では、こういった経緯のもとで小芳は子どもの教育をどのように行っているのであろうか。中学校までの教育を全て中国で施した小芳は、来日後日本の学校にどのような意味づけを見出していくのであろうか。先述のように、小芳は日本の学校を戦略的に利用している。その理由は日本の学校を肯定的に意味づけているからである。小芳が日本の学校に対してもつ意味づけを端的にいうならば、「成長が可視化する場所」と表すことができる。

第１に、小芳にとって日本の学校は、「学習意識の変化」という点で日本の学校を高く評価している。

> 日本で学ぶようになって英語に興味を持てるようになったようです。本人も言っています。「最近、英語の成績が上がって来た。興味を持てるようになったよ」って。だから、ここで学ぶのはとても良いと思っています。（小芳）

語りにあるように、長男は来日してから苦手科目である英語を克服している。中国にいた頃は、英語の先生をみるだけで頭痛がするほど英語が嫌いだったという長男は、日本の教育方針（希望する科目を選択できるなど）によって、むしろ英語が好きにな

ったのである。ただし、ここで注目すべきなのは、小芳が評価しているのが英語の成績が向上したかどうかではなく、長男が英語を「好き」になったという点である。もちろん、「大学には絶対行ってほしい」と語るように、大学進学を望む親にとって英語の成績が向上したのは望ましいことである。しかし、それ以上に子どもの英語に対する意識が「嫌い」から「好き」へと変化した点に喜びを感じているのである。

第２に、小芳は学習だけに「成長の可視化」を認識しているわけではない。「人格形成における成長の可視化」にも大きな喜びを感じているのである。

> 中国でもまとめ役をしなかったのに、日本で(笑)無理矢理かやらされているのかは分かりませんが、とにかく今その役職を担っているのは事実ですから。…（中略）…中国ではそういうことをしようと考えたこともなかったです。でも日本に来てからはガラッと変わりましたね。意識がまるっきり変わりました。…（中略）…積極性が身につきましたね。良いことですよね。（小芳）

このように、小芳は子どもが日本の学校によって積極性が身についた点を評価している。クラブ活動や委員会といった課外活動によって子どもの人格が良い方向へと目に見えて変わっていると認識しているのである。

以上２点から、小芳にとって日本の学校とは学習面だけでなく、人格形成の面でも役に立つものであり好ましいものであると解釈できる。ただし、小芳も来日当初からこのような教育戦略を有していたわけではない。中国にいた頃は、厳格な教師のもと「クラスへの貢献」に徹していたのである。子どもは熱心に勉強して成績を上げること、そしてそれがクラスへの「貢献」になるという教育を行っていたのである。

では、こうした「成績至上主義」的な考え方から日本の学校教育に肯定的な意味づけをするに至る背景には何があったのであろうか。結論から言えば、中国の学校教育との比較にその理由を見出すことができる。例えば、「（中国では）無理矢理させられている。」や「（日本では）強制感を感じません。」と語るように、子どもが活き活き学んでいる点に小芳は日本と中国の学校教育に対比をみるのである。つまり、「強制や疲労からの解放」がそこには存在するのである。また、先述したように小芳自身、両親から農民になるよう、教育されてきた。しかし、そうした「束縛」から脱出した小芳は自分の可能性を信じるようになった。そのため、「勉強」だけを一方的に押し付ける中国式教育では、彼女が考える教育達成を成し遂げられないのである。その結果、小芳は全人的に子どもの可能性を広げる日本の学校を戦略的に選択していくのである。

以上、小芳の事例をみてきた。中国式教育を行ってきた小芳は来日後、日本と中国の学校教育を比較し、さまざまな経験から「強制や疲労からの解放」や「成長が可視化できる場所」として日本の学校を肯定的に意味づけていくようになった。つまり、小芳は単純にキム・敷田が言う「初期設定」(2013, 127)として日本の学校をとらえているわけではない。日本の学校を戦略的に利用している姿をみることができるのである。

第６節　雅文の教育戦略

第１項　生い立ちと来日経緯

ここでは「家族団らん」を目指して、否定的な意味づけをする日本の学校にあえて子どもを通わせ続ける雅文の事例を紹介する。雅文は、遼寧省の農村部に生まれた。そのため、雅文は幼少時から農業に従事する両親を手伝っていた。村では女性は農作業に従事し、男性は他の地域に出稼ぎに行くのが一般的であったという。雪梅や小芳同様、雅文も農村部で生まれたため、非常に貧しい生活を送っていたという。そして、その貧しさゆえに彼女は高校や中専には行けず、中学でその学歴を終えた。そのため、彼女は、「村から出れば、きっと良くなる。」と考えていた。先述のように、雅文が生まれた村では、女性は家で農業を手伝うのが一般的であった。そのため、彼女にとって外に出る機会はほとんどなかった。しかし、このような環境においてでも、雅文にとって外に出られる可能性は他の村民に比べてはるかに高かった。なぜならば、彼女の祖母が残留婦人だったからである。

1997 年、雅文の祖母は日本に帰国した。祖母の帰国にともない、雅文の家族も呼び寄せられた。祖母の呼び寄せに対して、彼女には日本に渡ることに全く躊躇いはなかったという。「人挪活, 树挪死」[8]と雅文が述べるように、彼女は日本への移動を人生の活力を得るためのチャンスととらえていたためである。４年後の 2001 年に、雅文は夫と６歳になる息子とともに来日した。来日後は、夫が安定した仕事につき、雅文自身もパートをしている。そのため、経済面で困難を感じたことはないという。むしろ、帰国する際には必ず、夫の両親にお金を渡すほど、経済的には余裕を感じているようである。他にも雅文は、日本の環境などに居心地の良さを感じている。しかし、彼女は来日前には想定していなかった場面で多くの困難に直面することになる。

第１に、中国人として経験する差別である。来日後、雅文は工場に勤務していた。そこで彼女は日本人が中国人に対して「良くない」イメージをもっていることに気づく。例えば、懸命に仕事をしていても、日本人よりも評価が低い点、同じ失敗でも中

国人だけが怒られる点に彼女は常に憤りを感じてきた。また、こうした差別の経験は夫も共有している。転職する際に、夫を雇わないように日本人から根回しをされたり、職に就く際に多くの金銭を要求されたこともあった。しかし、こうした差別が完全に日本人だけに起因しているのではないことにも雅文は言及する。例えば、利益を得るためならば同胞同士でも構わずに喧嘩をする点を挙げながら、「日本人はもう中国人の性格をよく理解していると思う。」と語る。こうした状況は、次第に雅文を疲弊させていく。日本には楽しいことがなく、家と職場を往復するだけという彼女にとって、日本での生活は閉塞感が強いものとなっていくのである。閉塞感が強まっていくなか、雅文は中国への想いを馳せるようになる。元々「お金を稼ぐために来た。」という彼女は、中国への帰国を考えるようになるのである。なお、帰国には、夫の強い要望もある。雅文の場合、両親や親戚はほとんど Q 市に居住している。そのため、世話をしなければならない親族は全員目の届く範囲にいる。一方、夫の場合は、親族は全員中国にいる。そのため、両親の世話は夫にとって大きな気がかりとなるのである。このような理由から、雅文は「いつか絶対帰ります。」と語るように、帰国への絶対的な意思をもつようになる。

第２に、家族分断である。来日して１年ほどたった頃に雅文は、生涯忘れられない出来事に遭遇する。長男が事故に巻き込まれたのである。来日後、長男はすぐには学校に行かず、しばらく家で待機していた。その間、特にすることもなく毎日自転車に乗って遊んでいた。ある日、急に飛び出した自動車に驚いた長男は、転倒して脚に大怪我を負った。すぐに治るだろうと思われていた怪我であったが、精密検査の末、骨が壊死していたのである。そのため、約１年間の治療を要した。治療期間から長男を学校に通わせ始めた雅文は、ある日長男の寂しそうな表情に気づく。理由を聞くと、怪我で遊びに行けないため友達ができない、中国に帰りたいという理由であった。不憫に思った雅文は、長男を中国に帰す決心をする。長男の帰国はすなわち、家族分断に他ならない。後述するように、この家族分断が雅文を悩ませるようになる。

ここまで、雅文のライフス通りを来日後の経験を中心に追ってきた。以下では彼女の教育戦略を考察していくが、とりわけ第２の困難、すなわち家族分断が雅文の教育戦略を決定づけることになる。雅文は来日後、第２子である長女を出産する。彼女に対する教育も長男との経験が大きく作用するのである。次項からは前節同様、日本の学校教育に対する雅文の意味づけをみたあと、彼女の教育戦略において家族分断の経験がいかに立ち現れるかを描き出す。

第２項　日本の学校への意味づけ：「遊び場」としての学校

雅文は雪梅同様、日本の学校教育に対して肯定的な意味づけをしていない。簡潔に表現するならば、日本の学校を「遊び場」と認識しているのである。

> だって机の下に潜って授業を受ける子どももいるので。子どもが机の下にいるのに先生はそのまま授業を続けているし。誰も注意しません。何も言いません。中国では絶対許されません。私の頃は、一言も話せませんから。手悪さをしようものならすぐにチョークが飛んできますよ。だから、日本の学校は遊んでいるような雰囲気です。遊びに行く感じです。行っても行かなくても誰も気にしない。全部自分です。でも中国では違います。勉強しなければ置いて行かれます。日本の方が何倍も楽ですね。（雅文）

子どもが授業中に見せる自由な行動、その行動に対して何も言わない教師に不満を感じる雅文の姿は雪梅と重なる。また、雅文にとって、日本の学校とは行っても行かなくても良い場所だと認識されている。その背後には、雅文自身が中国で経験した中国式教育の厳しさが控える。日本の学校のこうした現実を目の当たりにし、自分が望む理想は中国式教育であると彼女は述べる。

> 理想ですか。やっぱり中国の方が良いですね。中国の方が強制的に勉強させますので。日本は、自分でやるかやらないかなので。（中国の）親戚の子どもが高校に行っていた頃、休みなんかありませんでしたよ。いつも夜遅くまで勉強して。勉強しすぎて馬鹿になるんじゃないかと。（雅文）

以上のように、雅文は「放任主義」である日本の教育ではなく、強制的に勉強をさせる中国式教育の方が子どもにとって良い将来をもたらすと考えている。そのため、仮に地域に ES が存在するのなら、必ず ES を選択すると語っている。このように、雅文は中国の学校教育に肯定的、日本の学校教育に否定的な意味づけをしているのである。

第３項　子どもの「一時的喪失」体験から「家族団らん」へ

先述のように、来日後間もない頃に雅文は長男を一度中国に帰国させている。その間、長男の世話は祖父母に委ねられていた。この事実からもわかるように、雅文は子

どもを中国で育てられるだけの環境をそなえている。経済面などの理由で自分たちが帰国できなくても、中国にいる親戚に子どもを預けて育児を行うことが可能なのである。にもかかわらず、現在雅文は日本の学校に２人の子どもを通わせている。なぜ雅文は否定的な意味づけをする日本の学校にあえて子どもを通わせ続けているのであろうか。その理由は「家族団らん」の重視であると推測される。

> 極論ですけど、中国に凄く良い未来があったとして、たとえその未来を諦めても娘は自分のもとから離すつもりはないです。（雅文）

このように雅文は、長女を自分のもとからは絶対離さないと語る。つまり、子どもと親が一緒にいることが最も大切であると考えているのである。そこには、中国で手に入るかもしれないより良い将来を手放してでも子どもを親から離さないという強い決心がみられる。その背景には、先述した家族分断がもたらした子どもの「一時的喪失」体験が存在する。繰り返しになるが、来日して間もなく、長男は遊んでいる最中に大怪我をし、しばらく自由に動けない時期があった。そのため、長男は怪我で動けない不満に加え、日本の学校がつまらないと親に訴えた。そこで、雅文は長男だけを帰国させ、祖父母に約７年間預けた。その時の体験が「家族団らん」の重視に繋がるのである。

> 私が中国に帰ったある年のことです。息子に「お母さん、何で会いに来てくれないの？？」と聞かれました。理由を聞くと、実家村には山が多いのですが、息子は毎日山に登って太陽を見ながら、「お母さんはいつ迎えに来てくれるんだろうって考えていたんだ。」と考えていたみたいなんです。その言葉を聞いた瞬間涙があふれました。「何のためなんだろう。子どもを国に置いてまで自分は何のために日本にいるんだろう。」って。だから、また日本に戻しました。良いか悪いかは分かりませんでしたが、やっぱり子どもは親のそばにいるべきだと思いました。私が帰らない以上、娘も帰しません。息子という前例がありますから。もう間違いは犯しません。（雅文）

上記のように、長男を「一時的喪失」したことを雅文は非常に後悔している。語りにもあるように、たとえ中国に良い将来があり、それを犠牲にしてでも親と子がともにいることを重視しているのである。ここで注意すべきなのは、雅文が教育の成功を

「良い将来を送ってほしい。」と結論付けている点である。「家族団らん」という選択は、子どもから「良い将来」を奪ってしまう可能性もある。しかし語りのように、この選択が正しいのかどうかは、雅文自身にもわからない。こうした矛盾に気づきながら、子どもをそばに置くことを選択しているのである。すなわち、「家族団らん」が「良い将来」よりも優先されるのである。そのため、同じ後悔を繰り返さないために、娘は何があっても自分のもとに置くという考えに至るのである。換言するならば、雅文が選択した「家族団らん」は、「戦略的犠牲」とも呼べるのである。また、「一時的喪失」体験がもたらしたのは、親子間の物理的な距離に起因する「孤独」だけではない。親子間の心が通い合えなくなるという心理的な孤独をももたらす。

> 中国と日本の行き来で息子を台無しにしてしまいました。夫はよく娘も中国に行かせようと言いますが、私は嫌です。たとえ日本でホームレスになったとしても私のもとから離れてほしくありません。親元から離れて祖父母のもとに置いておくと子どもの心が変わると思います。以前の息子は今と全く違います。中国で過ごした何年間かですっかり変わりました。私が何か言うとすぐ「うるさい」って言われますし。本当です。一言でも多いと「一言少なかったらだめなのか。うざい。」などと言われます。6、7 年離れていましたからね。何というか、親子の間によそよそしさが生れてしまいました。（雅文）

親子間で心が通じ合えないと感じている雅文は、「一時的喪失」体験が子どもの人格形成に影響を与えたととらえている。この体験から雅文は、親子が離れることは子どもの教育達成にも良くないと認識するようになる。児島(2006)の定義に従うならば、雅文はまさに人格形成のために教育戦略を展開しているのである。つまり、親のもとにいることこそが子どもの人格形成において最も重要であると考えているのである。

以上、雅文の事例を示した。否定的な意味づけをする日本の学校にあえて子どもを通わせる理由には、長男の「一時的喪失」体験に起因する「家族団らん」戦略が存在していた。雅文の事例からわかるのは、教育戦略が学校教育だけにとらわれるものではないという点である。雅文にとって、学校教育という教育上最重要とも言える要素を犠牲にしてでも「家族団らん」は達成されるべきものなのである。つまり、雅文にとって教育戦略とは、子どもの人格形成にも良い影響を与える「家族団らん」という理想を実現するための戦略なのである。

第７節　瑞麗の教育戦略

第１項　生い立ちと来日経緯

本項では、他の非集住地域からＱ市に移動してきた瑞麗の事例を考察する。非集住地域間の移動という経験は日本の学校教育とどのように関連づき、彼女の教育戦略に立ち現れるのであろうか。ここでもまず、母の生い立ちと来日経緯を示す。

瑞麗は生まれも育ちも湖南省である。前項まで、３人の事例をみてきたが、瑞麗が彼女たちと決定的に異なるのは、都市部に生まれ、比較的裕福な家庭に育った点である。こうした家庭環境のもと、瑞麗は「きちんと勉強してほしい。先生になってほしい。」と、幼少時から両親や親族にも高い目標を期待されていた。また、親族に高学歴が多い瑞麗自身も小さい頃から医者や教員などの高度専門職を望んでいた。なかでも、英語の教員として教鞭をとっていた伯父の存在は瑞麗にとって憧れの存在であったと彼女は語る。そのため、伯父への憧れから彼女も英語教師を志望することになる。「ずっと競争をしてきました。」と瑞麗が語るように、彼女は厳しい受験戦争を勝ち抜いた。そして、湖南省にある師範大学に入学を果たした。大学卒業後、彼女は自分の希望通り、湖北省で英語教師の職に就いた。文化的再生産論の視点に立てば、瑞麗のこうした生い立ちはまさに両親や親族が保有する文化資本を受け継いだ結果であると言える。

教員の仕事をしばらく続けるうちに、瑞麗は同じ湖南省出身の男性と知り合い、交際の末結婚した。結婚当時、瑞麗の夫は修士号を保有しており、瑞麗同様高学歴であった。そのため、夫も企業で高度な職業に就いていた。当時の生活状況を瑞麗は、「悠々自適に生活していた。」と語る。また、休暇になると全国に旅行に行く余裕もあったという。このように、裕福な生活を送っていた瑞麗であったが、ある日夫が彼女にとって思いがけない相談を持ちかけた。仕事を辞めて日本で博士号を取りたいという願望である。瑞麗は、博士課程への進学自体には反対しなかった。しかし、進学するには仕事を辞めなければならなかった。そのため、瑞麗は夫の来日に反対した。しかし、「夫が全て独断で決めたんです。」というように、瑞麗の反対むなしく、夫は進学を決意したのである。仕方なく彼女は夫の渡日を承諾した。

夫の渡日当初は学位の取得後、夫が中国の大学で教え、自分は英語教師を続けるというのが瑞麗の考えであった。しかし一年後、事態は変わる。夫に日本へ呼び寄せられたのである。「学位取得後は帰国してほしかった。日本の学位があれば中国での就職は問題ないと考えていた。」と語る瑞麗にとって、日本に残りたいという夫の希望に非常に驚いたという。なお、夫が日本に残りたいと考えた理由には、日本の静かな環境と、家族と離れて暮らす寂しさが挙げられる。一方、瑞麗は日本には渡りたくなかっ

たという。教師の仕事を失いたくなかったのがその理由である。また、来日に際しては、親族の反対もあった。しかし、夫の必死の説得により、瑞麗は３歳の長女を連れて来日することになる。この頃には、「子どもが小さかったし、言語が１つ増えても良いかな。」と、来日に対してある程度の納得を見せていたとのことである。

来日後の瑞麗は夫が住む K 市で、家族３人で暮らした。夫が学位を取るまでの間、瑞麗が飲食店でパートをして、家族の生活を支えた。来日後は日本の環境に慣れなかったと彼女は振り返る。加えて、子育てとパートをしながら家事もしなければならない状態は彼女にとって大きな負担となった。それでも、「絶対乗り越えられる。」と常に信じて彼女は努力したという。とりわけ、言語面で多くの努力をしたと瑞麗は語る。独学で日本語能力検定の１級を取得したのである。幼少時からから培ってきた彼女の文化資本がここでも垣間見える。

来日後の瑞麗の交友関係に目を向けると、日本人と中国人の両方と多くの付き合いがあったようである。K 市は中国人数が多くない自治体である。そのため、本来ならばそれほど多くの同胞と関わることは困難であると予想される。しかし、ここで彼女の夫が保有するネットワークが活きてくるのである。夫が通う大学の中国人留学生、とりわけ瑞麗と同じく、留学生の妻として来日した女性と良好な関係を築いたのである。そうして知り合った中国人の友人と子ども向けの中国教室を立ち上げたこともあった。また、日本人とも多くの付き合いがあり、非常に仲が良い友人も何人かいるという。こうした豊富な人間関係をもつ瑞麗であるが、子どもに目を向けると、状況は一変する。非集住地域である K 市には、彼女の子どもと交流できるような同胞はいなかったのである。そのため、「中国人が多い地域が良い。」と語るように、彼女は子どもの教育面にも同胞を希求したのである。

こうした同胞への希求は、夫の転勤によって実現することになる。学位取得後、夫は大学の研究所で研究職に就いていた。しかし、任期付きの職であったため、すぐに別の仕事を探さなくてはならなかった。このような背景から、2014 年に夫が Q 市に移った。そして１年後の 2015 年に瑞麗と中学３年生の長女も Q 市に引っ越した。Q 市に移動した後、瑞麗はある中国人家庭と出会うことになる。中学校の同級生に、高さんという中国人がいたのである。この出会いは瑞麗自身だけでなく、長女にとっても非常に喜ばしいこととなった。同級生に中国人がいると聞いた瑞麗はすぐに高さんの両親が営んでいる中華料理店を訪問した。それから瑞麗は、高さんとよく交流をするようになった。そして、移動によって実現した同胞との出会いが瑞麗の教育戦略に大きな影響を及ぼすようになるのである。

第２項　日本の学校に対する意味づけ：閉塞感がない場所、同胞と出会えた場所

ここでもまず日本の学校に対する瑞麗の意味づけをみておこう。瑞麗は、C 同様、日本の学校には非常に肯定的な見方をしている。

> 日本の教育は中国に比べて、健全だと思います。そんなに大きなプレッシャーは必要ないと思うからです。先生も親も子どももみんなプレッシャーがあります。受験科目と体育などの文化的な科目を同じようにやればよいと思いますが、中国は受験科目に偏っています。体育などの科目が足りないと思います。こっちに子どもを通わせて分かりました。無意識のうちに日中の対比をしています。中国の教育は…。体育などの科目が足りません。だから、子どもたちはかわいそうです。うちの子の美術もそうです。一生懸命にやっているのに、他の成績も良いです。体育もそこそこ良いです。でも、中国は「勉強しろ」しかありません。かわいそうです。とても閉塞感があるように思います。体育や音楽に興味があるのなら、のびのびとやらせれば良いと思うのです。そっちができたら受験科目の方も自然と頑張るようになると思うのです。だから日本の教育は良いと思います。（瑞麗）

語りのように、瑞麗にとって学校とは、「勉強」だけをする場所ではない。受験科目以外の科目も彼女にとって子どもの成長には欠かせないのである。中国では受験科目が重視されるため、体育などその他の科目は相対的に少なくなる。一方、日本の場合は雪梅や小芳の節でも述べたように、全人的な教育を重視している。こうした中国と日本の差を彼女は、「日本の方が健全」と表現する。瑞麗がこのように認識するに至る背景には、中国における彼女自身の教師経験が挙げられる。中国にいた頃は、教科を教えるだけが教師の仕事ではなかったと瑞麗は語る。校内ではあらゆることが教師の責任になるという。例えば、成績の順位付けなどである。小芳も言うように、中国ではクラスの成績がすなわち担任の評価に繋がる。そのため、教師は自分の生徒が少しでも上位に上がれるように常にプレッシャーに苛まれる。また、「勉強」を重視し、子どもの可能性を狭めている中国の教育方針にも言及しながら、瑞麗は中国の学校教育を子どもと教師双方にとって閉塞感があるととらえている。このように中国と対比させながら、彼女は日本の学校教育に肯定的な意味づけをしているのである。

また、学業だけでなく、日本の教師の責任感も彼女にとって肯定的に映っている。

学校はしっかりやっているよ。全て先生に頼っています。先生を信頼しています。先生を見ればわかります。先生も教え子の成功を願っています。穏やかな人生を送れるよう願っています。だから安心して任せています。（瑞麗）

瑞麗たちがQ市に引っ越す前、長女が学校で差別される出来事があった。ひどく傷ついた長女は、それから中国というルーツを前面に出さなくなった。非集住地域から非集住地域への移動をした瑞麗は、転校先のQ市でも同じことが起きるのではと懸念していたという。しかし、担任に相談をしたところ、「大丈夫、何かあったらすぐ私に言ってください。」と丁寧に対応してくれた。「良い教師」との出会いが、彼女が抱える移動による不安を解消してくれたのである。こうした「良い教師」との出会いは、Q市だけでなく、K市にいた頃も同様だったようである。このような経験から彼女は日本の教師に全幅の信頼を寄せているのである。

以上のように、雪梅とは正反対に、瑞麗は教師の面でも教育方針の面でも日本の学校に肯定的な意味づけをしている点をみてきた。しかし、彼女の日本の学校に対する意味づけはこれだけではない。Q市への移動が彼女に別の意味づけをもたらしたのである。「同胞と出会えた場」でもあるのである。「中国人が多い方が良いですね。友人がいないと寂しいじゃないですか。」と語るように、瑞麗は同胞である中国人が多い環境を望んでいる。先述したように、瑞麗はK市にいた頃、夫の留学生ネットワークをもとに同胞との関係性を築いていた。そのため、K市が非集住地域であったにもかかわらず、比較的多くの中国人と関わりがあった。一方で子どもに目を向けてみると、長女と一緒に遊んだり話したりするような同胞の子どもは存在しなかったという。長女と年齢が離れた子や男の子しかいなかったのである。このような環境では、「中国人としてのアイデンティティをもつのは当たり前」だと語る瑞麗にとって、同胞の子どもとの関わりあいを通してその目標を達成することは困難であった。しかし、Q市に移動したことによって、長女は転校先で同胞の高さんと出会うことになる。この出会いは長女にとって、非常に喜ばしいことであったという。また、高さんとの出会いがもたらしたのは、学校という場における長女と高さんの関係性だけではない。

だから今日も来ましたし。今日、お姉さん（筆者母）に会えてとても嬉しいです。Q 市に来てすぐにこの店に来ました。「お母さん、クラスに高さんという

子がいて、家が黄龍っていうお店をやっているの。」って娘が教えてくれたので、探して来たんです。（瑞麗）

K 市では、夫の留学生ネットワークを活用して同胞との友人関係を築いていた瑞麗であったが、Q 市への移動により、彼女自身がもつ同胞との関係性もリセットされることになる。夫の留学生ネットワークが使用できず、そして「友人を作るのが下手なんです。」と語るように、同胞との関係性の再構築は彼女にとって非常に困難である。集住地域においては、同胞との出会いも比較的容易となるかもしれない。しかし、非集住地域に身を置く彼女にとって、この出会いは非常に重要な意味をもつのである。語りにもある通り、子どもと高さんの出会いを知ってすぐに高さんの両親を訪ねて行った点からも、瑞麗の同胞に対する関心の高さがうかがえる。ここまで、瑞麗が日本に学校教育に積極的な意味づけをしているとともに、学校が「同胞と出会えた場」としても認識されている点を確認した。次項ではこうした意味づけ、とりわけ同胞との相互行為から練られていく教育戦略に目を向ける。

第３項　同胞から学ぶ教育戦略と日本式教育・中国式教育の併用

ここではまず、瑞麗が教育達成をどのようにとらえているのかをみておこう。彼女にとって教育達成とは、子どもを「社会に貢献できる人間」に育てあげることである。

人となりがちゃんとしていれば良いと思います。あとは自分の生活の豊かさを維持しながら社会に貢献して、役に立つ人間になってほしいです。／「社会に貢献できる、役に立つ人間になる。これは基本ですよね。」（瑞麗）

このように、自分の生活を豊かに保ちながら、社会に貢献できる人間こそが瑞麗の目標である。そして、その目標を達成するには一生懸命に勉強することが必要であると彼女は語る。こうしてみると、圧倒的に勉強量が多い中国式教育を選択する方が合理的であるように思われる。しかし、中国式教育は次の点で彼女の選択肢から外れることになる。第１に、「拝金主義なところがある。」と語るように、自身の利益だけを追う教育であり、社会への貢献が疎かになる点である。第２に、先述した通り、「勉強」ばかりを追求する中国式教育が子どもの可能性を狭める点である。換言するならば、子ども自身の豊かな生活の可能性を狭めてしまうのである。こうした点から、瑞麗は全人的な教育を行う、すなわち子ども自身の可能性を追い求めながら社会に貢献でき

る人を育成できる日本式教育こそが彼女の教育達成には相応しいと認識されるようになるのである。とはいえ、自分が望む教育達成には「勉強」も非常に大事であると瑞麗は語る。

> やっぱり勉強ですね。勉強せずにどうやって変わるんですか。勉強しないと良い刺激も得られません。他の所から吸収して、自分で考えないといけません。だから、勉強しないと何も分かりません。勉強は大事です。（瑞麗）

もちろん、今までみてきたように、瑞麗は子どもを「勉強漬け」にしようとは考えていない。勉強した過程を大事にしてほしいと考えているのである。小学校時代から向上心が強く成績が良かった長女だが、高校受験シーズンになってやる気を落とした時期があった。また、瑞麗が「勉強」を促しても長女はあまり聞かなかったという。

> あまり勉強に力を入れていないと私も焦る時はあります。高さんと同じように「受からなかったら中国帰るよ。」ってプレッシャーをかけます。「私立には行かせないよ、働かないといけないから。働くと背中痛いし。」って。（瑞麗）

日本の学校教育には閉塞感がない点が、瑞麗が日本の学校教育に対して肯定的な意味づけをしている背景となっていることはこれまでみてきた通りである。K 市にいた頃､彼女は子どもに学業面で過度なプレッシャーを与えないようにしてきた｡しかし、高校受験という差し迫った状況に直面すると彼女も、雪梅が実践していたような「声かけ戦略」を実践することになる。ここで、注意しなければならないのは、この「声かけ戦略」は瑞麗が元来保有していたものではないという点である。高さんの母親は非常に厳格な教育方針の持ち主である。語りのように、中国への「帰国」を１つの「脅し」にして子どもにプレシャーかけている。そこには、日本育ちである彼女の子どもが「帰国」による友人喪失を非常に恐れているという背景がある。一方、瑞麗の子どもも中国語が話せない、あるいは友人喪失の恐怖から長期の「帰国」を嫌がっているという。そこで、こうした高さんの教育を彼女は学び取ることになる。K 市では考えられなかったような、「帰国」を武器に子どもにプレッシャーをかけていくのである。すなわち、Q 市への移動で得られた、子どもの教育を共有できる同胞によって、瑞麗の教育戦略は修正されていったのである。

以上、瑞麗の教育戦略をみてきた。当初、瑞麗は日本の学校教育への肯定的な意味づけから、日本式教育のみを実践していた。しかし、Q 市への移動がもたらした同胞との出会いは、子どもに「勉強」のプレッシャーをかけるという戦略を彼女に付与した。つまり、彼女は日本式教育を志向する一方で、重要な場面では中国式教育も導入し、両者を併用して教育戦略を立てているのである。

第８節　紫微の教育戦略

第１項　生い立ちと来日経緯

紫微は浙江省杭州市に生まれ、現在 43 歳である。紫微も瑞麗同様、都市部に育ち家庭も比較的裕福であった。紫微の家は化学工場を営んでいる。そのため、将来家業を継ぐことも視野に入れて、彼女は理系の道を期待された。しかし、自由奔放な性格であったこと、そして歴史が非常に好きだったため、彼女は社会科学や人文科学の本ばかりを読んでいたという。そうした彼女を両親も次第に自由に育てるようになったとのことである。こうして、彼女は好きな歴史を学ぶ道を進むことになる。浙江省の工業大学まで進学した紫微は歴史学や文献学を専攻した。また、それらと並行して社会学の勉強もした。学問に魅了された彼女は、次第に研究職を志すようになる。そして卒業後、南京にある大学で研究員の職に就いた。その後も彼女は研究一筋で、自分の好きな道を進んでいた。

研究員の職に就いて何年か経った頃、彼女は結婚を決心した。元々結婚にはあまり関心がなかった紫微だったが、両親に心配されるうちに彼女自身も自分の年齢に焦りを感じたためであった。そこで、友人が紹介してくれた楊さんと交際するようになった。楊さんは中国で修士号を取得した後、博士号を取得するために日本の T 県に渡った。そして、一時帰国した時に紫微を紹介された。楊さんは東北地方出身である。「当時、浙江省と東北地方には大きな経済格差があった。」と紫微が語るように、紫微と楊さんの家も経済的に格差があった。しかし、彼女が結婚相手に求めたのはお金ではなく、話が合うかどうかという点であった。その点、楊さんは学歴も高かったため、学問に打ち込んでいた紫微にとって非常に居心地が良かったという。そして、約１年間の交際を経て２人は結婚した。

紫微は当初、瑞麗と同じく夫に帰国をしてほしいと考えていた。中国は海外への頭脳流出が深刻だったため、学位取得者は帰国後非常に良い待遇で迎えられる傾向にあったからである。そのため、紫微も夫に大学で教鞭を取ることを希望していた。しかし、夫である楊さんに帰国の意思はなかった。彼は肺が弱く風邪を引きやすいため、

日本のきれいな環境で生活したいと望んだのである。一方、紫微に来日の気持ちはなかった。研究員という仕事があったこと、そして日本に対して良くない印象を抱いていたからである。そんな彼女も夫の懸命な説得により考えを変えることになる。紫微の来日に対する考えにとりわけ影響を与えたのは、子育てに関してであった。当時、彼女は双子を出産したばかりであった。中国では、病院に行くのにもさまざまな手順を踏む必要がある。周囲に助けてくれる人も多くなかった彼女にとって、双子を育てるのは非常に困難に思えたのである。そのため、何をするにも便利で清潔な日本の環境に魅力を感じるようになったのである。その後、渡日を決めた紫微は日本のことを調べ始めた。元々日本に良い印象をもっていなかった彼女は、少しでも日本を好きになるように、日本の「良い部分」ばかりを調べたという。こうして、2005 年に彼女は子ども２人をともない、夫が住む T 県に渡った。なお、来日に際しては親族からの反対はなかったが、来日してから 10 年以上経つが、日本への「悪い印象」のため、紫微の親族は一度も日本に来ていない。

T 県で生活を始めた紫微は子育て中心の生活を送ることになる。夫が働き、彼女が子どもの世話の中心を担った。渡日してから４年ほど経ったころ、夫の仕事の都合により紫微一家は九州に引っ越した。そして、九州で３年ほど過ごした後、再び T 県に戻った。その時点で子どもが学齢期に達していたため、彼女は２人の子どもを小学校に通わせた。日中は子どもが手から離れるため、彼女は工場でパートの仕事始めた。最初は知人の中国人の替わりに１日だけ勤務する予定だったが、そのまま長期で働くことになった。夫の収入が比較的良く、加えて紫微自身もパートをしていたため、一家の経済的状況は非常に良いとのことである。それを象徴するのが、苦労の末に購入した一戸建てである。

このようにみると、紫微の来日後の人生は非常に順調なものとなっている。しかし、彼女は「道を誤ったのかもしれません。」と語る。紫微が日本での生活に否定的な意味づけをするのには、周囲の中国人との関わりがある。先述のように、紫微は「話が合う人」との出会いを重視している。すなわち彼女の場合、「話が合う人」とは「教養がある人」である。しかし、彼女が住む J 町は非集住地域である。そのため、彼女が求める人物には出会えないという。代わりに彼女が目にするのは、中国人の「良くないもの」を絶えず実践する「低層の中国人」である。こうした人々の行いが、日本人が中国人を蔑視する原因であると彼女は語る。そのため、紫微は自分も「低層の中国人」と一緒にされるのを恐れて中国人との関わりを少なくしていったのである。このように、自ら同胞との関わりを断っている彼女だが、その関わりを完全に断ち切ることは

できない。日本での生活に閉塞感を感じているからである。例えば、中国ではできていたような行いも日本では許されない場合が多い。そのため、彼女は「いつも海に行って叫びたいと思う。」と語る。こうした、閉塞感から少しでも解放される場として、彼女は「低層の中国人」の集まりを利用しているのである。こうした背景から、彼女はいつの日か中国に帰りたいと考えているが、とりわけ子どもの教育問題で将来展望が見えずにいる。

以上、紫微の生い立ちと来日経緯をみてきた。では、こうした文脈のもとで、彼女はどのような教育戦略を展開していくのであろうか。結論からいうと、彼女の教育戦略には長男のいじめ体験や、「低層の中国人」との関わりが大きく影響している。以下では、その点に着目して、紫微の教育戦略を描き出していく。

第２項　日本の学校に対する意味づけ：「痛み」と「喪失」を生む場所

これまでの事例では、日本の学校の教育方針などを中国の学校と比較しつつ、いかに子どもを育て上げるべきかという点に言及する事例に注目してきた。一方、紫微は長男の経験から、日本の学校を「痛み」と「喪失」を生む場所としてとらえている。

> それで息子は泣いて、どうしても学校は嫌だと。その時初めて事の重大さに気づきました。それを学校にいうと調査をしてくれました。いじめていたのは１人じゃないということがわかりました。「お母さん、僕へのいじめはレベルが違うんだよ。日本人同士のいじめはいじめで片付けられるけど、僕を殴る時は犬のように殴るんだよ。」と息子は私に言います。「どうして中国人に生んだの。」って。本当にどうして良いか分かりませんでした。（紫微）

九州から T 県に戻った当初、紫微家族は V 市の団地に住んでいた。長男に対するいじめはそこから始まった。初めのうちは団地内における「いじめっ子」―「いじめられっ子」という子ども同士の関係性に起因するものであったという。しかし、学校にまで持ち込まれたいじめは、子ども同士の関係性に「日本人」―「中国人」というエスニシティの関係性も加えられていった。語りにも見られるように、いじめの痛みから、長男は中国人としての自分を疑うようになる。そして、母親である紫微に「なぜ自分は中国人として生まれたのか。」という質問を投げかけるようになる。長男の質問に紫微は今でも答えられず、苦悩しているという。つまり、長男のいじめの経験は、長男だけでなく、紫微にも痛みをもたらしたのである。こうして、学校は紫微一家に

とって痛みをともなう場所となっていくが、いじめに起因する痛みはかれらにさまざまな喪失をももたらす。第１に、子どもの自己肯定感の喪失である。

> それに中国人という自分の身分を気にしています。自分たちは弱いのだと。中国人は、相手が謝りに来るともう何も言わないと思っているようです。近所に、妻が中国人、夫が日本人の夫婦がいます。かれらの子どもがいじめられた時、相手が謝りに来たのですが、夫婦はその子を凄く叱っていました。だから、うちの子も私たちにそうしてほしいと願っているようです。そうすることによって、威信のようなものが取り戻せると。今は自分に自信がありません。（紫微）

先述のように、長男はいじめの経験によって、中国人としての自分のルーツに疑問を抱いている。そして語りにもみられるように、その疑問はやがて中国人としての自己肯定感の喪失につながる。長男にとって、自己肯定感の喪失にとりわけ大きな影響を与えているのは、中国人の「弱さ」である。長男へのいじめに対して、紫微は当初、学校に相談するなどの対処をしていた。紫微の相談を受けた学校側は事実を認め、加害者を謝罪に行かせた。謝罪した加害者に対し、紫微は必要以上に咎めなかった。謝罪後、いじめはおさまったかにみえた。しかし、すぐに再発した。こうした一連の流れを目にした長男は、「なぜ、中国人はこんなに弱いのか。」と悩むようになった。そこには、紫微がふり返るように、加害者を強く叱る日本人親との対比がある。つまり、中国人が日本人よりも弱いからいじめられるのだと、長男の目には映っていたのである。また、中国人としての自己肯定感の喪失は長男だけにみられる現象ではない。彼の双子の妹である長女も、兄のそうした姿から自身のルーツを隠すようになっている。

第２に、長男の育ちの場の喪失である。

> 今は学校に行っていません。だから転校を考えています。でも息子本人は、また同じことが起きるのを心配しています。怖がっていますね。／息子は学校に行きたいのに、行く術がありません。他の子どもとも交流できません。目標もないので、家で何をして良いのかもわかりません。だから、テレビやゲームを与えないと、本人もどうして良いのかが分からないのです。（紫微）

事態解決の糸口が一向に見えないと感じた紫微は、夫に相談した。そして、V 市から隣町である J 町に長男を転校させた。新たな場所に希望を見出そうとしたのである。

しかし、紫微たちが期待した通りにはならなかった。転校先であるJ町の学校でも長男へのいじめが始まったのである。度重なるいじめに長男は耐え切れず、ついには不登校になったのである。そこで、紫微は２度目の転校を考えるようになる。一方、同じことが起きるのを恐れる長男にとって、転校は痛みの再来を意味する。そのため、彼は「死んでも行かない。」と学校を頑なに拒むようになる。こうして、学校という学びの場や友人を奪われた長男に、紫微はゲームという娯楽を与えることで、「切り抜け」ているのである。

第３項　「弱い中国人」から「強い中国人」へ、「悪い中国」からの隔離

ここまで、紫微にとって学校が「痛み」や「喪失」を生み出す場所となっている点を確認した。では、彼女はこうした状況にいかに対処しているのであろうか。上述のように、長男に娯楽を与えることだけが彼女の対策なのであろうか。これまでの事例では、日本の学校教育と中国の学校教育を対比させながら教育戦略を修正したりする母親たちの姿をみてきた。一方、上記のような経験をしてきた紫微の教育戦略は彼女たちとは一線を画すものとなっている。すなわち、いかにして子どもの自己肯定感を育むのかが彼女にとっての最優先事項になっているのである。

> それに我々は「お前は手を出したらいけない。」と教えています。なぜ「相手が手を出したら、お前も手を出せ。」という一言を忘れたのでしょうか。凄く後悔しています。何かあっても親が解決してあげると教えていましたから。例えば学校でいじめられた私たちが先生にかけ合うって。でも、最近息子に起きたことから、自分が間違っていたかもしれないと思うようになりました。喧嘩になったら、本人にやらせるべきだと。（紫微）

長男が中国人を「弱い」ととらえているのには、紫微の教育方針も影響を与えている。紫微は、子どもの問題は親が解決するという教育方針である。そのため、子どもにはケンカになっても自分から手を出さないように教えている。こうした教育方針を紫微は正しいと信じて疑わなかった。しかし、度重なるいじめの経験による長男の「痛み」や「喪失」を目にするうちに、自分の教育を後悔するようになる。そこで、彼女は子どもたちに、「殴られたら、殴り返しなさい。」と方針を転換するようになる。すなわち、「弱い中国人」から長男が望む「強い中国人」へと子どもを作り変えようと試みたのである。なお、彼女がこのように方向転換をしたのには、同胞の影響もある。

自営業を営む中国人の父親がいじめられた子こどものために、加害者を叱ったり、あるいは東北地方出身の中国人が「体の大きさ」や「気性の荒さ」ゆえに誰にも手を出されない点である。換言するならば、力で相手をおさえることに息子の自己肯定感を取り戻す糸口を見出したのである。また、長男が中国系としての自己肯定感をこれ以上失わないように、紫微は「悪い中国」から子どもたちを切り離す戦略も行使する。

> 子どもにはあまりテレビを見せません。…（中略）…２年生の時に中国では反日デモがあったじゃないですか。日本人と喧嘩して。だから日本では中国人が悪いことをしている場面ばかり報じます。家庭という場では、そういうシーンはとても衝撃的ですよ。その日の報道が終わったら、お終まいじゃありませんからね。毎日報じます。だから、そういう部分では中国の印象はとても悪いと思います。（紫微）

トランスナショナリズム研究では、移民の子どもたちはメディアやインターネットなどを通して、「想像上のホーム」を形成するといわれる（徳永 2014, 71）。しかし、紫微の子どもたちが日本で目にするのは、中国の「悪い」部分ばかりである。そのため、子どもたちは頻繁に中国に「帰国」しても、汚い場所といった否定的なイメージが常にかれらを付きまとうことになる。そこで、紫微はこうした状況を打開しようと子どもたちから「中国」を取り上げることを選択する。また、紫微が取り上げるのは、メディアなどが映し出す「イメージとしての悪い中国」だけではない。日本で出会う同胞からも子どもたちを引き離していくのである。

> 最初は私も子どもを連れて中国人と会っていました。でも途中から、これはまずいなと感じるようになりました。…（中略）…日本に来ても中国の良い部分を出そうとしません。中国の悪い部分を日本に持ち込みます。外で、大声で話したり。…（中略）…中国人は、日本人に見下されていると思う一方で、自分からは努力しません。…（中略）…そして、みんな集まると、愚痴を言い合います。夫が悪いとか。同時に中国は汚いなど、中国のことも悪く言います。両方、悪くいうのです。そういうのをみていると、子どもを連れて行きたくなくなるのです。子育てに全くメリットがないので。友人が遊びに来ても、悪い話ばかりです。だからもう良いだろうと。（紫微）

先述したように、紫微は日本の生活、とりわけマナーやルールの細かさに閉塞感を感じている。その悩みを少しでも吐き出せるのが、同胞との語らいの場である。そのため、彼女は同胞との集まりにはよく参加したという。自分が抱えている悩みを共有できる同胞は紫微にとって非常に大事な存在である。しかし、こうした集まりに彼女は次第に不信感を抱くようになっていく。語りに見られるように、中国人の「悪い部分」ばかりを目にするようなったのである。そして、こうした「悪い部分」は子どもの教育に悪いと考えるようになる。すなわち、子どもが中国人の「悪い部分」に触れるのを恐れているのである。

もちろん、そこには子どもに中国人の「悪い部分」を吸収してほしくないという願いが存在する。しかし、子どもが中国系としての自己肯定感を喪失している状況では、次の点がより重要である。つまり、「イメージとしての悪い中国」だけでなく、実際に中国人がもつ「悪い部分」に触れることで、中国系としての自己肯定感の喪失が一層促進される点である。こうした事態を避けるために、紫微は同胞から子どもを切り離していくのである。ただし、ここで注意しなければならないのは、彼女が子どもと同胞の接触自体を悪だと認識しているわけではないという点である。むしろ、「成功」している同胞との関わりを大事にしている。しかし、「自分が成長できる人とは会うべきだけど、ここのような田舎には低層の中国人しかいないから関わらない方が良い。」と語るように、非集住地域に住む紫微にとって、彼女が望む同胞にはほとんど出会えないのである。そのため、彼女は子どもと同胞の関わりを断つ戦略をとるようになるのである。

第９節　小括

本章では、ES や IS を進学先や進路として選択肢に含むことができない地域において、中国人ニューカマーの母親が日本の学校に対してどのような意味づけをしているかに着目し、彼女たちの教育戦略を描いた。本章で紹介した事例をまとめると、雪梅は、日本の学校教育に否定的な意味づけをしていた。そのため、「学校との積極的交渉」や「声かけ戦略」などを駆使して学業達成という子どもの教育達成を目指していた。一方、小芳は雪梅とは異なり、日本の学校に「成長が可視化する場所」という肯定的な意味づけをし、日本の学校を戦略的に利用していた。また、雅文は日本の学校教育に否定的な意味づけをしながらも、あえて子どもを日本の学校に通わせ続けていた。その背景にあったのは「家族団らん」という理想であった。非集住地域から非集住地域への移動を経験した瑞麗は、日本式教育を志向する一方、重要な場面では中国式教

育も導入して教育戦略を立てていた。そこには、移動先で出会った同胞の存在が大きな役割を果たしていた。そして、長男のいじめ体験から学校を「『痛み』と『喪失』が生まれる場所」として意味づける紫微は、子どもが自己肯定感を喪失しないよう中国から子どもを遠ざけていた。

以上のように、本章の事例からは児島も述べているような「固定的・一枚岩的」(2006, 109)ではない多様な教育戦略がみてとれる。岡山の非集住地区における在日コリアンの日常的実践を考察した川端は、家族や親戚以外に在日の知り合いがいない、そして民族学校に通った経験もない環境がかれらの個人化を促すと述べる（川端 2010; 2012）。本章の母親たちも、非集住地域で生活する以上、個人化した環境に身を置くことになる。例えば、彼女たちは皆、子どものモデルになる同胞がいないと語る。また、事例でもみてきたように、彼女たちに子どもを ES に通わせた経験はない。こうした個人化した環境では、教育をめぐる実践も個々人に委ねられ、多様な教育戦略が生まれると考えられる。

しかしながら、本章で明らかにした多様な教育戦略にも共通する部分は存在する。すなわち、選択肢が限られた環境に一方的に溶け込むのではなく、あらゆる可能性を模索し、もがきながらも自身が望む教育達成を目指すという点である。例えば、本章では教育戦略を描き出す際に日本の学校教育に対する親の意味づけに着目した。その結果、雪梅のように日本の学校教育に否定的な意味づけをしていた場合でも、日本の学校以外の選択肢がないという現実をただ受け入れるのではなく、さまざまな戦略を用いて現実に対処していた。また、雅文のように中国の学校教育を重視していながらも、家族をより良い方向に導くために学校教育にとらわれない教育戦略に作り変えていく「家族団らん」の戦略を創造していくのである。あるいは小芳のように、日本の学校教育に否定的な意味づけをもたない場合でも、単純にキム・敷田がいう「初期設定」(2013, 127)を受け入れていくわけではない。そこには、日本の学校教育に「子どもの成長の可視性」という積極的な意味を見出し、教育達成を目指す戦略が存在する。

このように、かれらは集住地域に住む者同様、直面する状況によって臨機応変に戦略を修正するなど、「創造的教育戦略」とも呼べる教育戦略を展開していた。ただし、ここで言う「創造的教育戦略」は、集住地域に住む中国人ニューカマーたちに比べて特殊性を帯びているという意味ではない。本章で示した事例は、非集住地域あるいはその周辺に居住する中国人ニューカマーだけが見せるものではないという点は容易に想像できる。集住地域に居住する者も同じような教育戦略を実践しているかもしれない。しかし、集住地域に住む者は外国人としての問題を抱えながらも、制度や環境な

どを利用しながら教育達成を目指せる。例えば、日本の学校を迂回したり、あるいはES などと比較しながら教育戦略を立てられる。事実、先述のように集住地域に関する先行研究では、家族の物語にあわせて、日本の学校と ES を対比させながら学校選択をするニューカマーたちの姿が描かれてきた。

一方、非集住地域に住む者はそういった制度を利用したり、日本の学校を迂回できないという、「選択肢の不在」とも呼べる前提を乗り越えなければならない。つまり、選択の幅が狭いなかでも現実に流されずに、あらゆる可能性を模索しなければならないのである。さまざまな困難に直面しながらも子どもだけでなく、家族そのものを良い方向に導くという理想を達成するために教育戦略を創造していくのである。こうした「創造的教育戦略」こそ、外国人非集住地域に住む中国人ニューカマーの教育戦略が見せる特徴の１つであると言える。

---

[1] 春燕については、子どもの習い事に関する語りは得られなかったため、不明である。
[2] 都市部の青年に農村の労働を経験させることで、社会主義の思想を浸透させようとした政策。毛沢東の指導による。
[3] 「天は自らを助くる者を助く」の意。
[4] 雪梅にとって勉強とは、国語や英語などの受験科目を意味する。そのため、「勉強」と表記する。
[5] クラブ活動などの課外活動が学業を妨げていると認識する雪梅であるが、彼女自身は課外活動が不要だとは考えていない。子どもに少林寺拳法やピアノを学ばせるなど、むしろそういった点には力を入れている。
[6] 日本の商業、工業高校などに相当。
[7] 日本の普通科高校に相当。
[8] 動くことが人に活力を与え、反対に木は動かすと死ぬという意のことわざ。

第３章　細分化されるホーム意識―中国との関係性の不在に着目して―

第１節　課題設定

前章では、母親が行使する教育戦略を、日本の学校教育に対する意味づけに着目して描き出した。本章では対照的に、子世代へと視点を移す。そして、非集住地域に住む在日中国人ニューカマー青年（以下、ニューカマー青年）たちがいかなるホーム意識を抱いているのか、その立ち現れ方を描き出す。

志水は、ニューカマーの子どもの教育課題を６つに分類する。すなわち、「不就学」「適応」「言語」「学力」「進路」「アイデンティティ」である（志水 2008)。なかでも、アイデンティティが他の５つの課題の「集約点としての性格」(2008, 22)を帯びていると考えるなら､ニューカマーの子どものアイデンティティ形成は非常に重要である。アイデンティティと深く関わる概念に「ホーム」がある。本章では、ニューカマー青年たちのホーム意識を考察していくが、まずはホームと密接な関係にある「居場所」に言及しなければならない。

住田によると、居場所とは「自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地のよいところ、心が落ち着くところ、そこに居るとホッと安心して居られるところ」(2003, 3)である。本来、居場所は文字通り「人がいる場所」という物理的空間を表す言葉である。しかし、近年では物理的空間を表すと同時に安心感やくつろぎ、他者からの受容や承認が感じられる場所という意味が加わった。住田に従えば、このような心性の意味合いにおける居場所の使用は、不登校児童問題に端を発する。すなわち、不登校の子どもたちに対する「脱落者」や「問題児」、「怠け者」といった否定的なイメージが学校だけでなく、家庭にまで持ち込まれたために、かれらにとって居心地が良いと感じる場所が存在しなかったのである。そこで、そうした否定的な認識から不登校の子どもたちが脱却できるよう、かれらが安心していられるような居場所作りが叫ばれ始めたのである。そして、現在では子どもだけでなく、女性の居場所や高齢者の居場所など、さまざまな場面で使われるようになっている。（住田 2003, 3-4）

こうして、居場所は現代の人々にとって重要なものとなり、居場所研究も盛んに行われるようになった（例えば、久田 2000; 田中他 2001）。一方で、居場所研究が蓄積されていくなかで、従来の研究は日本人のみを想定した研究であるという批判も沸き起こる。日本人の子どもにとっての居場所は、ホスト社会で周辺化されやすいニューカマーの子どもたちにとっては必ずしも居場所とはならないからである。（矢野 2007, 171）つまり、ニューカマーの子どもたちは「マジョリティとは異なる意味をも

つ居場所をつくっているし、固有の問題を解決するための居場所が必要」（額賀 2014, 2）なのである。この点に関して、例えば真鍋は、「まず子どもがそこで自分が生きるための営みを繰り広げることが可能か、すなわち、日本に『居られる』のかどうか、から問う必要がある」(2007, 34)と指摘する。

このような議論のもと、額賀は、ホーム概念に着目する重要性を指摘する。額賀によると、ホームとは「人々が帰属意識や愛着、安心感を抱く場所であり、トランスナショナルな文脈における居場所概念」(2014, 5)である。２つあるいはそれ以上の世界を生きているニューカマーの子どもたちは、常に複数の世界から何らかの影響を受けながら成長している。そのため、ニューカマーの子どもたちにとって、ホームはアイデンティティを形成するうえで重要な意味をもつ。額賀が定義するように、ホームを居場所の１つであるとらえるなら、ホームという居場所の有無やホームをどう感じるかによって、かれらのアイデンティティは移り変わるであろうし、反対にアイデンティティがどのように形成されたかによって、ホームの感じ方も異なると推測される。また、居場所は、「他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場」（田中 2001, 8）になる。したがって、日本国内だけではなく、かれらが生きる複数の世界に跨ったホームに目を向ける必要があるのである。

後で詳述するが、ニューカマーのホーム意識に関する研究には例えば、三浦(2014)がある。三浦はニューカマー1.5 世がどのようにホーム意識を変容させていくのかを考察している。そこで明らかになったのは、エスニック教会や地域学習室がかれらに複数のホームを感じさせるという点である（三浦 2014)。すなわち、自身のエスニシティを確認できる場所がホーム意識に大きく影響するのである。こうしたエスニシティを感じさせる場所は、集住地域に多く、ニューカマーのホームに関する研究もそうした地域で行われてきた。一方で、非集住地域におけるニューカマーのホーム意識を論じた研究はほとんど見られない。先述した通り、「どこをホームと感じるかは、アイデンティティの問題とも関連する」（三浦 2015, 208）と考えるならば、集住地域に住む者とはまた異なる世界に生きる非集住地域に住む者たちのホーム意識を明らかにすることは、ニューカマーの教育を考えるうえで欠かせないと思われる。

以上の議論から、本章では非集住地域に居住するニューカマー青年が日本と中国という２つのホームになり得る場所の間で形成するホーム意識を描き出す。

第２節　先行研究

ここでは、ニューカマーのホーム意識に関する先行研究を概観し本章の位置づけを

述べる。拝野は、日系ブラジル人第２世代の「ホームランド」観をブラジル人学校就学者に着目して明らかにしている。拝野によると、ブラジル人学校の就学者たちは日本の学校を経験しているから日本に定住する、ブラジル人学校にいるからブラジルに帰るという二者択一的な選択をするのではない。キャリア形成や自身の可能性を考慮しながら「ホームランド」や「ホーム」を選び取っていくというのである（拝野 2011）。

三浦は、エスニック教会や地域学習室に焦点をあて、フィリピン人をはじめとするニューカマーの子どもたちのホーム意識を描き出す。一連の研究で三浦が主張するのは次の通りである。第１に、エスニック教会や地域学習室には排斥感や違和感がなく、自分と背景が似ている者がモデルとなるため、将来展望を複数の場所に確認しやすいという点である。第２に、エスニック教会や地域学習室は日本における居場所になるだけではなく、想像上のホームを与えてくれる場としても機能しているという点である。すなわち、これらの施設が提供する居心地の良さや、母国の再現性がニューカマーの子どもたちにホームだと感じる場所を複数もたらすというのである（三浦 2014; 2015）。

山ノ内は、ブラジルの日系人社会や日本のブラジル人集住地域で行った調査をもとに、日系人の子どもや若者のホームとしての居場所形成を論じる。そこでは、ブラジルで生まれ育った若者たちが日系青年グループから日系人として肯定的なアイデンティティを獲得していく様子、在日ブラジル人の子どもたちが地域日本語教室などを拠り所に自己肯定感を確認していく様子が明らかにされている（山ノ内 2014）。

徳永は、アジア系アメリカ人の女子生徒がポピュラーカルチャーを通して形成する第３のホームを考察している。彼女たちは、ホームランドやアメリカをホームとして認識する一方で、アジアのポップカルチャーを通じてアジアへの想いを強めていく。つまり、行ったこともない場所を「想像上のホーム」(Espiritu 2003)として想い描いていくというのである（徳永 2014）。

こうしたホーム意識の研究は、アメリカの研究でも行われている。例えば Kibria はアメリカ生まれの中国系と韓国系の移民２世のホーム意識に言及する。そこでは、かれらが中国と韓国をホームだと想い描くが、訪中や訪韓するなかでホームがアメリカへと移り変わる様子が描かれている(Kibria 2002)。また、丸山は、中国系アメリカ人２世たちが中国への「ルーツ観光」を通して形成するエスニック・アイデンティティや故郷観に言及する。丸山によると、調査対象となった中国系アメリカ人の多くは、ルーツ観光を通して習慣や言葉、生活レベルでアメリカと中国の違いに気づかされるという。そして、そうした違いへの気づきがかれらの帰属意識をアメリカへと改めて

導くというのである。また、ルーツ観光という短期間の中国訪問は、かれらの中国に対する帰属意識を強化しないという点が明らかにされている（丸山 2013）。

以上、ニューカマーのホーム意識に関する先行研究を概観した。これらの研究が一貫して強調してきたのは、ホームの「可変性」と「複数性」である。本章で言うならば、中国系だから中国がホームとして固定されるとは限らないし、日本生まれだから中国にホームを感じないとも限らない。つまり、本質主義的にかれらを規定するのではなく、歩んできたルートにかれらのホーム意識を見出すことが重要なのである。

なお、ホームを居場所概念の１つと認識するならば、注意しなければならない点がある。「関係性」の有無や濃淡である。額賀(2014)は、ニューカマーの子どもたちは居場所を「制度との関係、他者との関係の中で新たに創り出して」(2)いかなければならないと指摘する。また、徳永は「重要な他者」との関わりがニューカマー生徒の将来展望に影響すると述べる（徳永 2008）。すなわち、萩原(2001)が指摘するように、「居場所は関わりの中で生まれたり喪失したりする」(54)のである。これらの論からうかがえるのは、関係性の重要さである。上記の先行研究で言えば、ES や宗教施設、あるいは地域の日本語教室、同胞で構成されるグループによってホーム意識が変容したり、ホームだと感じる場所が増えたりする。換言するならば、日本だけでなく自身のエスニシティとの関係性がホーム意識に深く関わっているのである。

では、エスニック教会や地域学習室などのエスニック施設が存在しない、あるいは容易に利用できない地域に居住するニューカマーはいかなるホーム意識を形成しているのであろうか。つまり、額賀や徳永が言うような関係性（エスニック施設や同胞、重要な他者との関わりなど）が欠如しがちな地域に居住する者たちは、いかなるホーム意識を形成しているのであろうか。かれらは集住地域に住む者たち、あるいはエスニシティとの関係性をある程度獲得できる場所に住む者たちと同様に可変的で複数性のあるホーム意識を形成しているのであろうか。

そこで、本章では、中国人ニューカマー青年たちが形成するホーム意識の立ち現れ方を描く。その際、ホームになりうる中国との関係性に着目する。また、かれらのホーム意識を描き出すにあたっては、序章で述べた通り、かれらが生きてきた「ルート」が特に重要となる。なぜならば、ルート（ホスト社会への組み込まれ方や経験など）によってホーム意識が変化する可能性があるためである。そのため、かれらのホーム意識を考察するに際には、非集住地域というルートのなかで培われる経験を重視する。以下、第３節ではまず、かれらの人間関係と将来展望に着目して中国との関係性の不在を確認する。そして、第４節ではさまざまな要因によって、ニューカマー青年たち

がホームとしての中国から遠ざかっていく様子に言及する。そして、第５節ではかれらのホーム意識の内実が一枚岩では語れない点に言及する。

第３節　中国との関係性の不在

先述の通り、非集住地域ではルーツを確認する場面が集住地域などに比べて少ない。もちろん、両親や親戚が中国人であるかれらにとって、日常生活で全く中国を感じないわけではない。しかし、かれらは日本人しかいない学校に通わなければならないなど、家を一歩出ると「日本的なもの」で満たされた世界での生活を余儀なくされるなど、日本社会に埋め込まれている。こうした中国との「関係性の不在」とも呼べる環境のもと、さまざまな要因によってかれらの中国へのホーム意識は一層弱められていくことになる。ここではまず、かれらと中国の関係性の不在を簡単に確認しておく。

大阪の高校に通うニューカマー生徒の人間関係を調査した比嘉によると、かれらの人間関係は学校内の外国人を中心に展開する。そして、とりわけ同じエスニシティをもつ者との関係がニューカマー生徒たちの心理的負担を軽減する（比嘉 2008）。大阪はニューカマーが多く、かれらに対する支援も盛んに行われている地域である（志水 2008）。こうした地域では、比嘉が指摘するような人間関係を築くことができる。一方、Q 市はどうであろうか。自身の友人関係を陽子は「（中国人は）全くおらん。」、久美は「周りに中国人おらんしな。」と語る。このように、かれらの人間関係は日本人を中心に形成されざるをえない。なかでも、学齢期に来日した 1.5 世たちにとって、同胞の不在は切実な問題となる。

> 強く思っていました。とても。高校の時もそうでした。中国人の友達が１人いればお喋りしたり、一緒に遊べるなって。言語の壁がない友達が欲しかった。だからとても切迫していました。（健軍）

語りのように、日本語が話せなかった健軍にとって、周囲に中国人がいない環境は切迫した状況を生み出す。もちろん、両親とは中国語を話せたが、成長をともにする友人ということになると、彼の周囲にはいない。そのため、健軍は心から中国の友人を渇望するようになる。また、健軍が中国人を友人として希求するのは、遊ぶためだけではない。「日本人には本当の心を明かせない。」と語るように、「心から話せる存在」として中国人の友人を希求しているのである。

こうした中国との関係性の不在は、かれらの進路にも大きな影響を与える。例えば、久美は以下のように語る。

> 高校卒業して、フリーターでコンビニで一年半くらいバイトして。それは「店を開くけぇ、手伝いをせぇよ」って、自分も「したいな」って思っとったけぇ、就職もせずにたちまちフリーターで過ごそうって思って。（久美）

高校卒業後の進路について、久美は定職を考えていなかった。当時、久美の家は中華料理店の開業を予定していたため、彼女は店を手伝うよう両親から要請された。そのため、久美は開店準備が整うまでは定職に就かなかったという。しかし、「若いけぇ、何も考えてないんじゃない？」と語るように、フリーターとして過ごすために彼女は手伝いを始めた。つまり、彼女には進路に対するはっきりとした考えはなかったのである。田房は「モデル・マイノリティ」を引き合いに、モデルになる存在が外国人の子どもたちの母語保持や学習意欲、そして進路選択に影響を及ぼすと述べる（田房2005）。前章では、Q 市に住む中国人ニューカマーの母親に焦点をあてたが、彼女たちによると、子育てをするうえでモデルとなる同胞はいないという。帰属するエスニック集団にモデルがいない場合は、日本人との個人的な関わりが重要になる（田房2005）。本章で言えば、陽子が日本人との関係のなかで高校卒業後の進路を決めている。

> 周りも「私ここ目指すけぇ」っていうのはおらんかったんよ。割と「どうする」とかようて。「私ネイル行こうと思うんじゃけど」「良いね、行こうや」で 2~3 人集まったみたいな。離れるの寂しいし、一緒のとこ行こうよ、決まってないし。（陽子）

結局、陽子は「眠かった」という理由で受験をしていない。また、一緒に受験した友人も卒業したのは 1 人でだけであったという。田房が言うように、自集団にモデルがいない場合は日本人がモデルとなりうる。しかし、モデル自身の将来展望が弱いと、外国人の子どもの将来展望も曖昧模糊なものとなる可能性がある。

以上、非集住地域における関係性の不在を友人関係と進路意識を例に紹介した。このような状況のもと、次節からはさまざまな経験や制約によってニューカマー青年たちがホームとしての中国を自ら切り離していく様子と、中国にホームを感じつつも中

国から切り離されていく様子を描き出す。具体的には、中国系としての自己肯定感の喪失からホームとしての中国を自ら切り離していく者、さまざまな壁によってホームとしての中国が切り離されていく者に大きく分けて考察する。

第４節　自ら切り離すホームとしての中国

中国との関係性を築きにくい環境において、ニューカマー青年たちは、時として自らホームとしての中国を切り離していくことを迫られる場面に直面する。その大きな原因の１つがいじめを経験した時や中国人の「悪い面」を見聞きした時などにもたらされる自己肯定感の喪失である。本章で取り上げる対象者のほとんどは何らかの形で、中国系というルーツを否定される経験をしている。この点に関して、武志、恭子、智子、国祥が特に顕著であった。ここでは自己肯定感の喪失による影響が今でも残り続ける武志と恭子の事例を中心に、かれらが自らホームとしての中国を切り離す様子をみていく。「周りの目を凄い気に」しながら生きているという武志は以下のように語る。

> 昔の人って中国のことが嫌いな人が多いんですよ。だから、そういうテレビで悪い報道とかしてたら、おじいちゃんおばあちゃんって、特におじいちゃんは偏見もってたら悪くいうんですよ。／何か日本のテレビで中国のそういう悪いとことか凄い流れてるじゃないですか。やっぱり言いたくないですもん、自分が中国人って。／何となく言ったら、周りの人と違うっていう感じが、友達が減るんじゃないかなっていうのがあったんじゃないかな。（武志）

このように、武志にとって中国は表出したくないルーツである。もちろん、「中国の人ってそんなんじゃないんですよ。」と語るように、武志にとって中国は全くの「悪いもの」ではない。また、「（悪いのは一部の中国人だけで）自分とは関係ない。」としたうえで、自分が日本人から白い目で見られるとは思わないと述べている。しかし、それでも「中国が嫌い」な日本人に気を遣いながら、そして友達がいなくなるかもしれないという恐怖から中国というルーツを隠すようになる。そして、中国に帰属意識を感じられなくなり、「日本人みたいなのを出してた。」と語るように、自身を「日本人」だと表出していくようになるのである。

中国に肯定的な意味づけができない経験は、恭子も共有している。

> だってテレビで中国のやつ見とっても、ねぇ、よくモラルがないとかっていう

けど、「ありえんわ。」って思う(笑)マナーが悪かったり。だって並ぶことができないでしょ、あの人たち。割り込むでしょ？／（中国人であることが）嫌になる。だって川とかもきれいにできんわけでしょ？有害物質ばかりでしょ？何でも捨てるし、「意味がわからん。」みたいな。だってその水飲みょうるわけでしょ、いうたら。どんな油使っとるかもわからんし。だって小銭が爆発するとか意味わからんし。（恭子）

語りのように、武志同様に中国の「悪い」イメージが恭子の中国系としての自己肯定感を喪失させるのである。そして、中国人を「あの人たち」と呼ぶように、自分とは切り離して考えるようになるのである。ただし、ここで気を付けなければならない点がある。すなわち、武志の場合は中国（人）をメディアが報道するようものではないと認識したうえであえて出自を隠していたのに対して、恭子の場合は自身も報道に沿う形で、中国（人）に対して否定的な意味づけをしている点である。では、恭子がこのような意味づけをするようになった背景は何なのであろうか。そこには、父親の影響がある。

2014 年頃から Q 市では、転売目的で中国人が日本製の目薬を買い占めた結果、品不足になる現象が起きている。その結果、数少ない目薬をめぐって中国人同士の店内での争いが多発したため､状況を重く見た店側が購入を制限する事態にまで発展した。この目薬買い占め騒動の中心人物の 1 人が恭子の父親である。恭子はこのような父親の行動を恥ずかしく感じている。他にも、父親の声が大きい、大声で中国語を話すから恥ずかしいと語っている。こうした父親の行動の積み重ねが恭子の中国（人）に対する否定的な意味づけを強化していったのである。ちなみに、中国人の行動が「恥ずかしい」という感覚は陽子や久美なども語っている。また、恭子が中国に対して否定的な意味づけをする背景には、いじめの経験もある。前節で言及したように、彼女は小学校から中学校にかけて、中国系であることを同級生にバカにされてよく泣いていた。

うん、だって中学校の時の先生にもいじめられとったし。先生にもいじめられたし、同級生にも。先生の場合は、格下っていうんかな。「この子だったらえぇわ。」みたいな感覚でうちにはめっちゃ強く言ったりしょうたし。本人もようたもん、その先生最後に。卒業式とかクラスが変わった時に「俺も差別とかそういうのもした。」とか。「ああ、うちのことじゃろうな。」って。（恭子）

同級生からのいじめに加えて、本来なら助けてくれたり、エンパワーしてくれるはずの教師にも差別やいじめを受けたという。こうした経験をもとに、恭子は中国系であることが「嫌」になったのである。

以上のように、非集住地域に住むニューカマー青年たちは、いじめや中国への負のイメージなどによって自身のルーツである中国を表出しなくなったり、肯定的な意味づけができなくなる。換言するなら、中国への帰属意識を感じられなくなったり、中国における将来展望を感じられなくなるのである。例えば武志と恭子は２人とも「中国は怖い。」場所だと語り、中国人との結婚もしたくないという。Olsen は、学校内に設置された特別学級が唯一移民の子どもたちの自己肯定感を促進する居場所だと指摘する(Olsen 1997)。しかし、「(国際教室など）全然。だって（外国人）少ないもん。」と恭子が語るように、かれらには中国にルーツをもつ者としての自己肯定感を確認できる場所は存在しない。それが中国に対する否定的な意味づけが定着していく１つの要因であると考えられる。

また、三浦は、ニューカマーの子どもたちがいじめや排斥の経験から、出身地への希求を高める点を明らかにしている。それは日本以外にルーツがあることを肯定的に確認できる場所としての教会や居場所としての地域学習室によって可能となる（三浦 2014)。一方、上記のように、本章の対象者たちは反対に中国ではなく日本に対する希求を高めていた。教会や地域学習室などの施設、すなわち自己肯定感を高めてくれるような関係性の不在がかれらのホーム意識を日本へと引き寄せるのである。

第５節　切り離されるホームとしての中国

久美:(国籍を)変えたほうが良いとはいうけどな。変えたいとは思わんのんよ。逆に中国の国籍でおりたいくらいなんよ。

美香[1]：かっこいいよな。

久美：かっこいいっていうか、うん。

「日本に帰化したいか」という筆者の問いに対する久美と美香の姉妹による会話である。前節では、自己肯定感の喪失によって中国をホームととらえられず、日本をホームだととらえるニューカマー青年たちの姿を考察した。しかし、久美と美香の語りからもわかるように、かれらの中国に対する想いは完全に消えているわけではない[2]。

そこで、ここでは自己肯定感の喪失を経験しながらも、中国に強い帰属意識をもつ智子と美香を事例に取り上げる。そして、中国に帰属を感じながらも、関係性の不在によって、ホームとしての中国が彼女たちから切り離されていく様子を描く。

まずは、20 歳での「帰国」を機に中国に対する想いを変容させた智子の事例を挙げる。恭子の妹である智子は、「今すぐ帰りたい」と語るように、中国に強い想いを馳せる。しかし、彼女は最初からこのような想いを中国に抱いていたわけではない。むしろ中国人であることや、中国が嫌いだったのである。その背後には、恭子と同じように小学校から中学校にかけて経験したいじめがある。「中国人じゃけぇってなめられとったんかなって。見下された感じ？」と語るように、智子にとって学校は居づらい場所であった。

> いじめられてから中国が嫌いになったんですよ。小学校の時にいじめられて。で、中国が嫌になって。何か中国人ってのが凄い嫌で。それが中学校３年生まで続きました。それから日本人なんじゃって思って。（智子）

このように、いじめによって智子は自分が中国系であることを否定的にとらえるようになる。そして、武志と同じように自分を「日本人」だと考えるようになる。しかし、小学校３年生以来「帰国」していない彼女にとって 10 数年ぶりの「帰国」は中国の楽しさや居心地の良さに気づく大きな転機となる。

> 今すぐ帰りたい。20 歳の時に中国に帰ってから、「中国ってこんなに楽しいんじゃ。」って思って。そっからもう、毎日「帰りたい帰りたい。」って感じ。／テキトーなところとか自分にとって凄い居心地が良くって。で、何か朝外に出たら食べ物とかいっぱいあるし、人がいっぱい歩いとるし、１日中人がいるじゃないですか。お店もいっぱいあるし、食べ物も美味しいし、「楽しいなぁ。」って思って。（智子）

また、10 数年ぶりの「帰国」が智子に感じさせたのは、楽しさや居心地の良さだけではない。「日本人」にはない「中国人」としての自分の良さにも気づかせてくれるのであった。

> 何か自分が中国人で良かったと思うことが最近すごい多いです。日本だけじゃ

なくて、中国にも行けるし。で、中国の文化とかも知れるわけじゃないですか。そういうのも日本人にはあんまりできんこと？が自分にはできるのは凄い良いなぁって。（智子）

智子は 2015 年現在、26 歳になる。20 歳での「帰国」から 6 年間、中国に対する想いは一度も変わっていないという。今では「中国で仕事してみたい。お店出したりとか」と具体的な夢を語るほどに想いが強くなっている。また、自分の「テキトーさ」や金（きん）が好きである点を中国人と重ねるなど、自分自身を「中国人」だと認識するようになっている。一方で、智子自身が作り出した「日本人である自分」は消失する。そして以前とは反対に「こっちはしょうがなく働いとる感じかな」と、日本を仕方なくいる場所だと認識している。

次に、母親との関係が上手くいかず、中国への想いを強めていく美香の事例である。久美の妹である美香は本稿の調査対象者のなかで、唯一幼少時の記憶を中国にもつ。彼女は 5 歳で来日するまで、北京の祖父母に預けられていた。そのため、来日まで両親や姉と過ごした記憶がほとんどないという。来日後の経験について、美香は以下のように語っている。

ごめん、また泣けてきょんじゃけど。きつかったよ本当に。今じゃけぇ笑い話にできるよ、そりゃ。泣きょうる、私。今はまだお母さんのこと好きじゃけど、自分が好きじゃけぇかもしれんけどな。…（中略）…その、小さい時の話をするといっつも泣くんじゃけど私。やっぱ、自分でよう耐えれたなっていうのかわからんけどよう。よう何か生きてきたなって思うんよ。それぐらい多分、本当に怖かったんよお母さん。本当に。もう私どんだけその、友達の親とかそれこそ、中国の姥姥[3]とかおばちゃんとか羨ましいと思って来たことか。…（中略）…高校はまだいいけど、特に小学校中学校。だってもう、助けがないじゃん。子どもじゃけぇ何もできんじゃん。（美香）

美香の来日は、家族と離れ離れに暮らしていた美香本人にとっても、既に日本で暮らしていた家族にとっても喜ばしい出来事となるはずであった。しかし、美香は来日後、ことあるごとに母親から暴力をふるわれるようになる。そして、語りのように美香にとってこの家族再編は居場所であるはずの家族を喪失することにつながる。ちなみに、Q 市には美香の従兄にあたる男性がいる。美香は幼少時、彼の家にはしばしば

泊りに行っていたという。その時の経験を彼女は涙ながらに語る。

> じゃけぇ、そのお兄ちゃんの親とかもそうじゃけど、みんな優しく見えるんよ。じゃけぇ、私自分の家よりも、たまに泊りに行っとったじゃん、お兄ちゃんの家に。それが凄い幸せだったのは本当によく覚えとる、家より。（美香）

このように、本来居場所となるべき自分の家に居場所を感じられず従兄宅に幸せを感じていたと美香は語る。しかし一方で、「お兄ちゃんの家が羨ましい。」と語るように、美香にとって従兄宅は真の居場所とはなりえない。あくまでも束の間の幸せを感じさせてくれる一時しのぎの居場所にしか過ぎないのである。このような状況のなかで、美香は中国に対する想いを強めていく。例えば、彼女は「中国の姥姥とかおばちゃんとか羨ましいと思ってきた。」「（日本に）いるはずじゃないのに。」と語る。これらの発言からは、彼女のなかに祖父母や従姉と過ごした中国での日々が甦っている点、中国にこそ自分の家がある点が如実に表されている。そして現在では、先述の語りのように中国籍を保有していることを「かっこいい」と思うほどに中国に帰属意識をもっている。

以上、智子と美香を事例に、ニューカマー青年たちのなかに中国が生き続けていることを述べた。２人とも辛い経験をするなかで、中国をホームだと認識するようになっていった。しかし、ここで注目すべきは、いくら彼女たちが中国にホームを感じていても、中国が彼女たちにとって完全なホームとはなっていない点である。例えば、智子は「今すぐ帰りたい。」と思う一方で、中国語ができない点、喘息を患っているため空気が悪い場所には住めない点を挙げながら、中国には帰れない現状を語る。また、美香も中国語ができて初めて中国で仕事ができると述べる。彼女たちはこうした言葉の壁を乗り越えるために勉強を始めているが、現時点では上手くいっていない。かれらがこうした壁を乗り越えられるような関係性が存在すれば中国での将来展望も望めるであろうが、「中国語教室みたいなのがあればなぁ。」と久美が語るように、Q 市ではそういった関係性はまだ希薄である。彼女たちが中国を希求しても、現状では中国には戻れないのである。

第６節　細分化するホーム：「帰属を感じるホーム」「将来を望めるホーム」

以上、非集住地域に居住する中国人ニューカマーたちが、中国との関係性の不在によって、ホームとしての中国を自ら切り離したり、切り離されていく様子をみてきた。

では、このような状況のなか、かれらのホーム意識をどのように理解するべきであろうか。先述のように、従来の研究では、ホームの複数性や可変性が指摘されてきた。本章でもその視点に立つが、より重要なのは、ホームの内実が一枚岩ではとらえきれないという点である。つまり、中国か日本（あるいはその両方）という枠組みではなく、歩んできたルート（経験）によってそれぞれの場所がかれらにとって、ホームとしてどのような意味をもっているのかという点に着目すべきである。なぜなら、これまで述べてきたような経験によって、かれらにとってのホームは場面ごとにさらに細分化していくからである。そこで、ここでは「帰属を感じるホーム」と「将来を望めるホーム」という視点から、かれらにとってのホームの内実を考察する。

美香が中国に強い帰属意識をもちながらも言語の壁により、中国から切り離されていることは既に述べた通りである。こうした中国から切り離される経験は彼女の姉である久美も同様にしている。例えば、久美は周囲から（パスポートの利便性などのため）日本に帰化するべきであるとよく勧められるという。しかし、「変えたいとは思わんのんよ。」と語るように、久美本人は中国籍に強いこだわりをもつ。ここからは妹の美香同様、中国への強い帰属意識がうかがえる。一方で、「意識的には、自分は中国人じゃって意識じゃけど、居場所は日本。」というように、日本こそが自分の居場所であると語る。久美がこのように中国と日本を意味づけるようになった理由を彼女は以下のように語る。

> 親世代が亡くなったらどうなるんかなと思うけどね。親世代が死んだら、自分らが 40, 50, 60 ってなった時に誰とつながっとるんじゃろって思う。お父さんがよくいうじゃん。「誰とつながっとんじゃろ、じゃけぇ、今のうちに仲良くしとけ」って。誰とつながるんじゃろうかって。今はおばちゃんとかおばあちゃんとかおるけど。もう 20 年とか経ったら、おらんかもしれんし。向うとのつながりがなくなったらもう向こうに行くこともないんじゃろうなって考えたら寂しいよな。行っても泊まらして貰う家がないよね。今は帰る家があるけど、おばあちゃん家。おばあちゃんが亡くなって、親世代の人もみんなおらんくなったら誰の家に行けば良いんって感じじゃし。って思うと、遊びには行くけど、いとこはあてにはせん。ホテル頼んで。（久美）

関係性の不在は日本においてだけではない。中国における関係性の不在も彼女をホームとしての中国から切り離す要因になる。久美には比較的多くの親戚が中国にいる。

しかし、彼女は頻繁に中国に渡るわけではない。そのため、その親族たちとはほぼ関わることがない。情報技術の発展は、母国の変化や状況の把握を比較的容易にすると言われている(Smith＆Guarnizo 1998; Vertovec 2009=2014)。久美もこの流れに乗れれば良いのであるが、現実は厳しいようである。SNS などのツールを用いて、中国の親戚と繋がっている久美ではあるが、中国語がほとんどできない彼女と親戚の会話は必然的に、「ご飯食べた？」「いつ帰って来るの？」というような簡単なものに収束されていく。また、彼女自身からは親戚と連絡を取ることはない。母親が中国に電話する時、あるいは母親に頼まれて SNS を使用する時のみ、彼女は中国の親戚と会話をするのである。

こうした状況では、本来仲良くなりやすいはずの従姉妹たちとも共通の話題を持てるはずがない。すなわち、久美にとって中国には、親によって維持されている「いずれ消えてしまう」関係性しか存在しないのである。その結果、「生活していけるか不安じゃけぇ、ずっと。言葉、習慣、友達おらんし。（中国に「帰る」とは）思わんかな。」と語るように、彼女にとって中国は将来を望めない場所として意味づけられていくのである。つまり、久美にとって、中国は「帰属を感じるホーム」である一方、「将来を望めるホーム」とはならないし、反対に日本は「ここでしか将来を望めないホーム」となるが、「帰属を感じるホーム」ではないのである。

以上、久美を事例にホームの内実、すなわち「帰属を感じるホーム」と「将来を望めるホーム」が別々の場所に細分化されている様子を述べた。一方、これら２つのホームが一致する場合もある。例えば、前章では武志と恭子が中国系としての自己肯定感の喪失から自身を「日本人」に作り変えていく様子に言及した。つまり、日本がかれらにとっての「帰属を感じるホーム」となっていたが、かれらは「将来を望めるホーム」としても日本を意味づけている。

> 中国だったら、僕みたいな人だったら成功するかもしれないっていうのもありますけど。僕って結構ルーズなんですよ。それは中国人の血が流れてるからかもしれないけど。ほんとにあほみたいなあれですけど。向うに行ったら先輩とかもないですし、やりやすいんじゃないかって。（武志）

語りのように、武志は自分の可能性に言及している。つまり、中国系としての自己肯定感を喪失している一方で、仮に中国に渡れば自分に流れている「中国人の血」が成功につながるかもしれないという期待である。しかし、先述のように武志にとって、

中国は「怖い場所」だと認識されている。そのことが、自分に可能性を感じているにもかかわらず、武志を中国から遠ざけてしまう。

> 住みたいとは思わないですよ。治安とかも悪いし、良い人もおるんですけど、日本に比べたら住みにくい。まぁ、言葉も通じないし、怖い。戦後の日本みたい、イメージが。中国はもう住めないですよ。知り合いも少ないし、生活の仕方もわからんし、わからんことだらけなんで、怖いじゃないですか。日本の方が安全。（武志）

このように、中国に将来の可能性を感じていながらも、武志にとって「怖い場所」である中国は住む場所ではない。彼にとって、中国は「将来を望めるホーム」としては機能していないのである。このような意識は恭子も同様に保持している。先述のように、武志同様、負のイメージから中国を「怖い場所」として意味づけていた恭子であるが、彼女が中国に将来を望めないと感じる背景には、中国への負のイメージだけではない。

> （帰化）したいとは思う。旅行行きたい人だから。旅行行くたびに、海外旅行とか行きたいけど、ビザとらにゃいけんし、ビザ代かかるし、この辺ないし、倍かかるけぇ。／通りあえず便利。ビザが要らないっていうのが。だって韓国行った時もクーポンがあったけど、日本人限定のクーポンだったし。ビザとっても長いしね。中国人だから。（恭子）

恭子は大の旅行好きであり、日本各地、いろいろな場所を旅行しているという。「旅行のために日本国籍取りたい」という語りからもわかるように、旅行は恭子にとって重要な意味をもつ。金銭面や仕事の関係で海外へはほとんど行けていないが、できることなら多くの国を訪れてみたいという。しかし、中国籍である恭子は多くの国でビザが必要となる。Q 市の近くには、ビザを取得できる場所が存在しないため、遠方まで赴くかあるいは、代理申請ということになる。いずれにしろ、彼女にとってビザの取得は、とりわけ金銭面で大きな負担となる。また、旅行先で得られる日本人だからこそ得られる特典なども彼女は受け取ることができない。そのため、容易に、そして多くの恩恵を受けながら海外へ渡航できる日本国籍を取得したいと考えている。このように、旅行に大きな意味を見出す恭子にとって、中国はその将来が望める場所とし

ては機能しない。反対に、日本は旅行をする将来が望める場所、つまり、「将来を望めるホーム」となるのである。

以上のように、久美と違い、武志と恭子の場合、帰属意識と将来展望の両方が日本へと向かう。換言するならば、かれらの「帰属を感じるホーム」と「将来を望めるホーム」は一致しているのである。

第７節　小括

本章では、中国との関係性の不在に着目して非集住地域に居住する在日中国人ニューカマーのホーム意識を論じた。本稿で明らかになった点をもう一度確認しよう。

第１に、中国系としての自己肯定感の喪失によって、かれらは時としてホームとしての中国を自ら切り離していく。そして、日本にホームを求めるようになる。例えば、日本人に気を遣いながら生きる武志は、中国（人）の良い面を認識しつつも、「中国人」が「バレる」ことで友達を失うかもしれない恐怖からルーツを隠していた。そして、「日本人」のように振る舞うことで自分自身を「日本人」へと作り変えていった。また、恭子はいじめの経験やメディアの報道にみる中国（人）の「悪い」面から中国を怖い場所だと意味づけていた。そして「中国人」である自分が「嫌」になり、中国に住むことはありえないと語っていた。

第２に、中国もまたかれらの心の中に生き続けるが、言語などの壁によってかれらはホームとしての中国から切り離されていく。辛い経験から武志同様に自分自身を「日本人」へと作り変えていた智子は、「帰国」を機に中国への想いを変容させていた。すなわち「嫌いな場所：中国」から「今すぐ帰りたい場所：中国」という変容である。また、家族再編という辛い体験によって中国で過ごした５年間の記憶が呼び覚まされた美香は、祖父母との生活を想い描くなど中国に対する希求を高めていた。しかし、現時点では中国は彼女たちにとって完全なホームにはなっていない。言語の壁などにより、彼女たちは中国での将来展望から切り離されていくのである。

第３に、ホームは細分化する点である。中国と日本は両方ともかれらにとってのホームとなりうる。しかし、だからと言って単純に中国か日本、あるいはその両方という区分ではかれらのホーム意識はとらえられない。場面ごとにかれらのホームへの意味づけが異なるからである。すなわち、「帰属を感じるホーム」と「将来を望めるホーム」に細分化していくのである。そして、いかなるルート（経験）を歩んだかによって、それらが一致したり、異なったりするのである。

以上が本章で明らかになった点であるが、改めて言及しなければならないのは、ホ

ームの複数性と可変性である。すなわち、かれらが今後どのようなルートを歩むかによって中国や日本に対する意味づけが変わっていくのである。あるいは中国や日本ではなく、他の場所がホームになる可能性もある。繰り返しになるが、非集住地域に住むニューカマー青年たちは中国との関係性を獲得しにくい環境に生きている。すなわち、エスニック教会や地域学習室などを自信の獲得やロールモデル獲得の足掛かりにできる集住地域とは異なる世界に生きているのである。そのため、経験次第で自己肯定感の喪失が定着し、自分のルーツに自信を持てなくなる。高橋朋子は「１つの固定化したルーツ」だけを追求する危険性を指摘する（高橋 2013, 29）。本章も「ルート」から形成されるホーム意識に着目している以上、ニューカマー青年たちが必ず中国にホームをもつべきであるという立場は取らない。しかし、かれらが自分のルーツに自信を持ち、そこから主体的にホームを選び取っていく最低限の支援は必要なのではなかろうか。「今でも中国人ってのは気にする。極力言いたくはない。ばれん限り言いたくない。」と恭子が語るように、かれらは時として自分の中にある中国のルーツが「ばれる」と表現する。こうした表現を使わなくても良いように、すなわちルーツを隠さなくても良いように帰属意識でも将来展望でもホームを感じられる関係性を創出していかなければならないのである。

---

[1] 他の対象者とは異なり、美香は中国にいたころの記憶を少なからず保有している。
[2] この点については、三浦(2014)も 1.5 世たちが出身地と日本の両方を「帰る」場所だと認識している点を例に挙げて指摘している。なお、本稿の対象者たちも日本と中国双方に対して、「帰る」と表現している
[3] 母方の祖母という意味の中国語。

第４章　私の成長物語

第１節　課題設定

序章で述べた通り、本稿では主体性に着目して考察を行ってきた。一方で、その主体性が非常に限定されたものである点にも注意を払わなければならない。母親たちに関して言えば、彼女たちはさまざまな戦略を用いて自分たちが目指す教育を達成しようとしていた。しかし、そもそも ES や IS の存在を知らない、モデルとなるような同胞との出会いがほとんどないなどといった点は、彼女たちの限られた主体性を物語っているともとらえられる。また、子世代に関して言えば、かれらのホーム意識は中国との関係性が不在するなかで内面化されていた。しかし、同胞との結びつきがより強い場合は、3 章でみてきたような事例とは異なるものになったかもしれない。つまり、世代にかかわらず、かれらにとって自己実現を語ることや想像することが非常に困難であるのも１つの事実として受け止めなければならないのである。

本稿の対象者たちは、多くが大学に進学せず現在に至っている。ニューカマーの高校進学率自体が日本人生徒に比べて相対的に低いということを考えれば、ほとんどが高校進学を果たしている本稿の対象者たちは比較的高学歴と言える。しかし、かれらが進学する高校は多くの場合、偏差値的に「底辺校」と見なされている学校である。そして、進学後はほとんどの対象者が大学進学に興味を示さず卒業していく。仮に進学したとしても、「低偏差値校」にしか進めないことが多い。そんななか、筆者は博士課程まで進学している。そして、自分のルーツである中国と向き合うような研究を行っている。このような筆者の経験は非集住地域の中国人ューカマーたちにとって１つのモデルになると考えられる。もちろん、筆者の選択が全ての中国人ニューカマーたちに通底しているとは思わない。しかし、Q 市という非集住地域で育った筆者だからこそ語れることがあると考えられる。そして、そうした筆者の語りや経験が同じく非集住地域に住む者たちの自己実現に影響を与える可能性もあると考えられる。そこで、本章では筆者が現在に至るまでどのような経験をしてきたか、すなわち筆者が歩んできたルートを示す。そして、自己実現に至るまで、その時々の経験がどのように筆者に影響を与えたのかを振り返る作業によって、非集住地域に住む者たちに１つのロールモデルを示すことを試みる。

以上の課題を考えるうえで、筆者自身も非集住地域で育ったニューカマーの子どもだったという「当事者」としての視点が重要になる。このように考えると、当事者研究の視点に立つべきであろう。なぜなら、当事者の視点は「当事者しか知りえない」

経験を含み、専門知を相対化し、実践に応用できる可能性を秘めているからである（伊藤 2015, 25）。ただし、「当事者とは誰を指すのか」という点には注意を払わなければならない。熱田によると、当事者という言葉は「最も身近な人々である家族や支援者、治療をする専門家にも決して代弁できない本人の意思があるということを表す」(2013, 76)ために、精神疾患などを経験した人々が暮らす共同体で使われ始めた。その背景には、親による障害を抱えた子との無理心中や、介助される側の気持ちが汲み取られないままなされる抑圧とも呼べる支援に対する問題提起があった（熱田 2013, 76）。換言するならば、専門家や研究者に異議申し立てをするために、当事者という言葉が使われてきたのである（熱田 2013, 78）。

一方で、単純に対象と同じ背景を共有しているというだけでは、当事者研究、つまり「当事者である」ということにはならない。自己定義によって初めて、人は当事者に「なる」と上野は指摘する。「女性である」「障がい者である」などというだけでは、真に「当事者」とは言えないのである（上野 2003）。本章に引き付けてみると、１人の在日中国人というだけでは、筆者は当事者とはいえない。在日中国人が直面する問題に取り組み、そして、その問題を自分の問題だと認識することで初めて筆者は当事者になれるのである。筆者は大学入学後、常に在日中国人に関心を寄せてきた。そして、そこに筆者を駆り立てたのは紛れもなく１人の外国人として日本で育った経験であった。このように考えると、筆者は在日中国人として「当事者である」だけでなく、上野が言うような自己定義によって「当事者になった」と考えられる。

第２節　方法: オートエスノグラフィーの意義

以上、本章では当事者研究の立場をとることを示した。なかでも本章ではオートエスノグラフィーを用いる。オートエスノグラフィーとは、「自叙伝的な記述とそれをとおした研究に属し、個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示する」(Ellis & Bochner 2000=2006, 135)方法である。すなわち、「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する」（井本 2013, 104）方法なのである。

「従来の」エスノグラフィーは、参与観察を通した対象の理解を目的としている。一方、オートエスノグラフィーの目的は次の通りである。主観的で感情的、そして人間的な学問や記述をオートエスノグラフィーは目指す。そのため、自分の経験を振り返り、その時の「私」が何を・なぜ・どのように感じたのかを探ることが求められる。そして、そのような作業によって文化や社会的文脈を理解していくのである（井本

2013, 104-105)。では、こうした目的をもつオートエスノグラフィーには、どのような意義があるのであろうか。伊藤によると、オートエスノグラフィーの意義はその当事者性にある。先述したように、オートエスノグラフィーは当事者の視点に立つ研究である。そして、当事者は「当事者しか知りえない」経験をもつ。この「当事者しか知りえない」経験こそがオートエスノグラフィーの実践への応用可能性だと言う（伊藤 2016, 28)。つまり、Ohnuki-Tierney が指摘するように、当事者は当事者以外ではおよそ知ることが困難な日常的な知識へのアクセスが容易にできる。そして同時に、感情的、感覚的にもそれらを理解できるのである（Ohnuki- Tierney 1984, 585)。以上、オートエスノグラフィーの目的と意義を述べてきたが、オートエスノグラフィーを使用する際にはいくつか注意すべき点がある。

第１に、学問性や科学性の問題である。その目的ゆえ、オートエスノグラフィーには「そもそも科学なのか」という定義の曖昧さが常につきまとう。例えば、小説、詩、随筆など書き手によって用いるテクストが異なる。そして、それらには感情や思想がともなうことが往々にしてある。そのため、井本が指摘するように、同じオートエスノグラフィーでも、芸術だと認識される場合もあれば、学術的価値が高いと認められる場合もある（井本 2013, 105)。この問題に対して井本は、研究を演出的であるととらえる Denzin を引用しながら(Denzin 2006, 422）、規範にとらわれないことがオートエスノグラフィーの意義であると主張する。オートエスノグラフィーは実験的で挑発的である必要があるため、学問的確立をむしろ拒否しなければならないと言うのである（井本 2013, 109-110）[1]。また Ellis & Bochner は、オートエスノグラフィーを書くにあたり、研究者自身の経験に基づく「意味づけ」が大事であるとする。そして、それはオートエスノグラフィーがもつ芸術性に起因するという(Ellis & Bochner 2000=2006, 151)。このように、オートエスノグラフィーは科学性と芸術性をあわせもつ方法論であると言える。つまり、科学と芸術の間で位置する手法なのであるが、この芸術性が第２の注意点につながる。妥当性と信頼性の問題である。

オートエスノグラフィーでは、研究者自身が過去に経験した事象を振り返る。そのうえで、その経験の主観的な分析や内省が要求される。また、テクストには「私」という１人称が全面的に登場するのが特徴である（井本 2013, 104)。そのため、「私」という主観的な立場から語られたことに、果たして妥当性と信頼性がともなうかどうかが問われる。この問題に対し、Ellis & Bochner は、「経験をありのままに捉えられない、ということこそ真実」(2000=2006, 150)としたうえで、オートエスノグラフィーにおける物語性を重要視する。彼女らによると、真実には唯一の基準はない。その

ため、妥当性を判断するためには、オートエスノグラフィーという作品が「いかにもあり得るものと思えるかどうか」が重要であり、読み手に「描かれた経験を、真に迫り、納得できて、あり得ることだと感じさせる」ことが必要である(Ellis & Bochner 2000=2006, 151)。つまり、研究参加者や読者、書き手自身を納得させることがオートエスノグラフィーの妥当性を担保するというのである。一方、信頼性に関しては、個人の語りが常に「特定の時と場所で生み出され」、現在と「想像される未来」、「思い出される過去」が結び付けられるため、オートエスノグラフィーには一般的に想起される信頼性は存在しないと指摘する(Ellis & Bochner 2000=2006, 151)。このように、物語の視点を重視するオートエスノグラフィーでは、語られた物語が事実であるかどうかという「事実認識」を問題にはしない。「重要なのは物語に『よって』考えることであって、物語に『について』[2]考えることではない」(Ellis & Bochner 2000=2006, 153)のである。

以上の点をふまえつつも、研究者の主観に完全に依存してしまうのでは、時には「作り話」になってしまう懸念もある。したがって、最低限の妥当性や信頼性を確保しなくてはならない。「自分史」の創設者である色川によると、自分史には「追体験的な方法」と「省察的な方法」がある。追体験的な方法とは、「かつて自分が体験したその状況に身を置いて―その体験した時と場に自分を移行させて、みずからの目に歴史の原風景を映させながら、その渦中の人としての自己を描く」（色川 1992, 15）方法である。省察的な方法とは、「今自分が立っている現在の位置から、かつての時代の枠に縛られていた自分の行動と思想とを反省的に観察する」（色川 1992, 15）方法である。色川は、迫力ある自分史を書くためには追体験的な方法が適切であると言う（色川 1992, 16）。これは Ellis & Bochner が提案する「感情的想起」と呼ばれる方法に近似する。すなわち、心身ともに過去に戻り、その場面を想像する方法である。感情的想起によって過去の細部が蘇り、出来事に近づきやすくなるのである(Ellis & Bochner 2000=2006, 152)。このように、過去の出来事や場面に自分を重ね合わせて想像することを色川も Ellis らも強調する。しかし一方で、両者が指摘するのはその時の感情や自己にとらわれ過ぎてしまうという欠点である。追体験的方法や感情的想起を用いる場合でも過剰な主観を抑制したり（色川 1992, 16）、「経験の内と外」(Ellis & bochner 2000=2006, 152)の出入りに注意を払わなければならないのである。

以上の点をふまえ、本章では筆者の主観や感情を重視する一方で、それらが過剰に働かないよう、時には抑制する方法を用いる。すなわち、ニューカマーの教育を専門とする他の研究者に筆者をインタビューしてもらう方法である。この方法により、感

情的なものを想起しつつも過剰な主観を抑えた自己の追体験を語ることが可能になると考えられる。

以上、次節からは追体験的な方法や感情的想起を根幹に、インタビューで得られた語りと照らし合わせながら、筆者の自己実現の物語、すなわち成長物語を描いていく。その際、筆者の人生を４つの時期に分けて記述を示していく。すなわち、①出生から来日まで、②来日直後から小学校卒業まで、③中学校入学から高校卒業まで、④大学入学から現在までである。また、本章ではそれぞれの物語を描き出す際に、松田と同じくエピファニーが重要だととらえる。つまり、人生の転機における体験を通して、物語を示す必要があるのである（松田 2010, 33）。そのため、各節では筆者の人生にとって重要だったと思われる経験を物語として提示していくことにする。

第３節　第１の物語：出生から来日まで

第１項　中国の小学校で過ごした２年間

1985 年５月９日の朝、北京市の病院で私は生まれた。両親は、私に空のように大きくなってほしいという願い、「昊」と名付けた。両親は共働きで同じ会社に勤めていた。そのため、私の世話はしばらく両親が雇ったベビーシッターに任されていた。私が少し成長すると、両親は引っ越した。そして、私を職場付近の幼稚園に通わせた。仕事が終わるといつも母が迎えに来てくれた。当時、私の父は既に日本におり、中国にいる私と母に、定期的に送金していた。そのため、我が家は他の家庭よりも比較的裕福だった。特に印象深かったのは、迎えに来た母がよく買ってくれた玩具だ。他の子どもたちの羨ましがる姿が懐かしい。

1991 年９月、６歳になった私は近所の小学校に進学することになった。８歳で来日するまでの２年間、私はそこで過ごした。中国の小学校はとても厳しかった。例えば、授業中は必ず手を椅子の後ろに回さなければならなかった。ピクリとも動くことは許されなかった。挙手をする時も、右肘を左手の甲に乗せなければならなかった。それができない子どもは酷く叱られた。そして、放課後残されて座る練習や挙手の練習をさせられた。厳しい集団行動は授業以外でも行われた。貧困地域[3]への募金、昼食後の昼寝など、全ての行動が学校に管理されていた。まるでロボットのようだった。

管理された学校生活に私は向いていなかった。母親に多動症とまで疑われた当時の私は居残り組の常連だった。下校時間から１時間以上残されることもあった。そんな時、いつも母が私を迎えに来てくれた。普段優しい母も、教育のことになるととても厳しかった。母が運転する自転車の荷台に乗って帰ることがよくあったが、学校で怒

られた時、母はいつも無言だった。そして、家に帰るとこっ酷く叱られた。学校で怒られてばかりの私を母は何とかしようと躍起になった。当時中国で流行していた姿勢矯正具を使って私の姿勢を良くしようとした。思い返してみると、私の姿勢はそれほど悪くはなかった。母は姿勢の矯正という方法で私に落ち着きを身につけさせようとしたのだろう。

教育に厳しかった母は、いつも私に「高級な人間になれ。」と言い聞かせた。母が考える「高級」とは、尊敬される人間や品位がある人間、注目される人間、目立つ人間などの意味を含んでいた。そう言われるうちに、私も自然に「そうならなければいけない。」と思うようになった。そして、学校の友達や先生には歌手や科学者になりたいと言うようになった。そのためには勉強を頑張り、先生の歓心をかうことが近道だと思った。当時、中国の学校には「三好生」という制度があった。これは、思想面・学業面・健康面に優れている子どもを表彰する制度である。上記の３つ全てが優れた者には、三好生の印として３本の赤線が入ったワッペンが与えられた。２つに秀でるものは２本線、１つだけに優れるものは１本線のワッペンが貰えた。これらは各クラスに１人ずつで、定期的に行われる投票を経て決められた。選挙では他薦だけでなく、自薦も認められた。私は何とかワッペンを貰えるよう、時には自分を推薦した。しかし、私がいくら自薦をしても、居残り組常連だった私を周りは認めなかった。今思えば、候補は既に決まっていたのだと思う。投票という形をとっていたものの、単なる形式に過ぎなかったのだろう。次第に私は諦めの気持ちとともに自分ではなく、人気のあるクラスメートを推薦するようになった。

こうした管理教育の他に、私が中国の小学校で経験したことで印象深かったのは反日教育だった。国語の教科書は、日本が中国を侵略した様子や、それに抵抗する人民解放軍の雄姿に関する物語に溢れていた。課外授業では、抗日戦争を描いた映画が上映された。また、全校集会では五星紅旗[4]がもつ意味から始まり、愛国精神を叩き込まれた。このような反日教育や愛国教育を受けた私も、かつての日本は悪い国だと思うようになった。しかし、次項で述べるように日本とのつながりによって、私は日本に対して肯定的な気持ちももつようになる。

第２項　身近だった日本

中国の小学校にいた２年間、私が日本について学んだのは、とりわけ歴史問題に起因するネガティブなイメージだったことは前項で述べた通りである。もちろん、私だけでなく他の子どもたちもそうであった。一方、悪いイメージをもちつつも、私は憧

れのような眼差しを日本に向けていた。

当時、子どもが喜ぶような番組や玩具はほとんどが海外から輸入されていた。なかでも、子どもたちの間で大きな人気を誇ったのが日本の漫画やアニメだった。「聖闘士星矢」や「マクロス」は何回も繰り返し放送されていたし、「ドラゴンボール」の漫画をもっていない男の子はいなかった[5]。学校の休憩時間になると、皆運動場でそれら日本のアニメキャラになりきって遊んだ。誰が１番強いキャラを取るかで喧嘩もした。家に帰ると、みんなでアニメキャラの玩具を持ち寄って戦わせた。一方、中国産の漫画アニメは、小学校に上がる頃には誰にも見向きされなくなっていた。そんな日本アニメに親しんでいった私は、いつしか日本に行けば自分も星矢[6]になれると信じるようになっていた。つまり、日本は私にとってヒーローがいる場所であり、それになれるかもしれない場所であったのである。

このように、日本は中国の子どもたちにとって身近な存在であったが、私は他の子どもたちと異なった意味でも日本を身近に感じることができた。中国帰国者２世と結婚した伯母の存在である。1980 年初期に結婚した伯母は、中国帰国者である伯父と結婚し日本に渡った。伯母夫婦は日本で中華料理店に勤務し、長期的に在日していた。そのため、私が伯母に会えるのは彼女が日本からたまに帰って来る時だけだった。伯母は、年に１回も会えないほとんど他人のような存在だった。しかし、彼女の帰国を私はいつも待ち望んでいた。帰国するたびに、私に日本のお土産を買って来てくれたからだ。なかでも、大きなロボットの玩具はたまらなく嬉しかった。当時、日本の玩具は非常に高価だった。そのため、周りの友達は滅多に手にすることができず、模倣品で遊んでいた。友達をよそに「本物」を手にできる私は、周りから羨望の眼差しで見られた。とても誇らしかった。伯母がつないでくれる日本との関係性によって、私は優越感に浸ることができた。

1986 年、父が伯母の協力のもとで日本に留学[7]することが決まった。私と母は、父と離れて暮らすことになった。母によると、父が留学後初めて中国に帰省した時、私は父のことを「おじさん」と呼んだらしい。それが故意なのか、本当に忘れていたのかは分からない。約１年間の留学後、父は中国に戻りタクシー運転手の職に就いた。支給された車で父は私をよく遊びに連れて行ってくれた。空白の期間を経て、ようやく家族３人での暮らしが始まったのである。

そんな暮らしが始まって３年後、1989 年に父は再び渡日することになる。伯母の呼び寄せで、日本の中華料理店に出稼ぎに行くことが決まったのである。日本に行った父は大阪の中華料理店に勤めた。その間、父は何度か中国に戻った。その頃には私も

４歳になり、父を「おじさん」と間違うことはなかった。父の帰国が楽しみでならなかった。伯母と同じように、帰って来るといつも日本の玩具を持ち帰ってくれたからだった。また、父が戻る度に我が家は見違えていった。人間の体ほどある音響設備、当時ではまだ高価だった大型カラーテレビ、テレビゲームなどその頃の中国では珍しかった物が我が家にはあった。そして、よく日本製品の優秀さを聞かされた。ここでも私の日本に対する身近さがみてとれる。

日本とのつながりが私にもたらしたのは、友達に対する優越感だけではなかった。学校の先生との関係にも、日本とのつながりは大きく作用した。中国では人との「関係（つながり）」が重視される。関係が多いほど、できることは多く、逆であれば機会は減る。そのため、中国人は関係作りを非常に重要視する。母も例外ではなかった。担任の先生によく日本製のストッキングや生活用品を贈っていたのである。私に目をかけてもらうためだったのだろう。また、前項で述べたような居残りをさせられた時も、こうした贈り物は役に立った。そんなことを知った私は、自分自身から先生に贈り物をしたいと母に言ったこともあった。このように、日本とのつながりは、私に物理的な優越感をもたらしただけでなく、社会的な武器をも与えてくれたと言える。ただし、贈り物も先述した三好生の選出には役立たなかった。

以上、私は日中間に跨る「トランスナショナルな家族」（Foner 2009; 額賀 2012）という文脈のもと暮らしていたが、1993 年に来日が決まる。日本での滞在が長引くと予想した父が私と母を呼び寄せたのである。日本に行くことはすなわち、中国で築いた関係性を放棄することになる。幼かった私にとって、友達や親戚との別れはとても怖かった。日本でやっていけるのかと不安だった。しかし一方で、「ようやく星矢になれるかもしれない。」という幻想が私の不安を和らげてくれた。今思えば馬鹿げた話だが、その馬鹿げた考えが出発前日の私を自然体にしてくれた。次の日、私は家まで見送りに来てくれた人たちと最後の挨拶をした。今でも交友が続く幼馴染と涙ながらに抱擁した。

第４節　第２の物語：来日から小学校卒業まで

第１項　「リュウホウ」の誕生と友達の喪失

両親の袖を掴みながら初めて日本に降り立った日のことは、今でも鮮明に覚えている。きれいな街並みや整然と並ぶ戸建ての家、見たこともないロボットを置いている玩具店、当時まだ８歳だった私には何もかもが新鮮で異国というよりはキラキラと輝く別世界に迷い込んだようだった。私が家族とともに移り住んだ Q 市にある市営団地

には、私たち家族を中国から呼び寄せた伯母の家もあった。家の手配が完了するまで、そこに住むことになった。

伯母の家に住み始めて間もない日のことであった。家のドアをノックする音が聞こえた。ドアを開けると、そこには私を物珍しそうに見つめる女の子が２人立っていた。伯母の娘たちと遊ぶために来たらしい。従姉が言うには、私が一緒に住むことになったのを聞きつけて遊びに来たとのことだった。彼女たちは何を言うわけでもなく、私を見つめてクスクスと笑うだけだった。そんな彼女たちの姿は、私にはとても奇異に思えた。毎日どこかのチャンネルで抗日戦争のドラマが放送される。学校に行けば、「共産党がいかに日本軍と戦い勝利したか」「日本がいかに悪い国か」、これが来日前の日常だった。そんな環境で教育を受けていた私も、日本に対して少なからず悪い印象を抱いていた。それらの経験から、私は自分が中国人だから馬鹿にされていると感じた。日本語ができない私は、語気を荒げて中国語で詰め寄った。「中国をなめるなよ。」、そんな言葉だったと思う。彼女たちが私と同様、中国にルーツをもつことをすぐに知ったが、この印象深い出来事とともに、私の日本での生活は始まった。

来日してから約１ヶ月経った頃、両親から小学校の入学手続きができたと知らされた。それまでは何をするでもなく、１人で留守番をしていた。学校に入学すると聞いて、楽しみという感覚はなかった。中国人が日本の学校でやっていけるのか、そう考えると不安に襲われた。何より言葉ができず、ただ怖かった。

私がいくら不安に感じていても時は待ってくれない。いよいよ初登校の日がやってきた。その前日、私は両親や伯母と学校で注意するべきことを話し合った。両親は、私がいじめられないかを特に心配した。「いじめられたら、先生に言うんだよ。」とアドバイスをくれた。一方、伯母は私の名前のことを考えていた。私の名前である「昊」は「ハオ」と発音するべきである。しかし、伯母は「ホウくん」という発音を教えてくれた。この時、「リュウホウ」という日本語読みの私が生まれたのである。

当時、私が入学した小学校には、私を含め５人の外国にルーツをもつ子どもが在籍していた。中国人が４人とフィリピン人が１人であった。私を除いた子どもたちは皆、日本生まれや生まれてすぐに来日している。そのため、日本語の問題はそれほど顕著ではなかった。それどころか、フィリピン人の男の子は学年一のやんちゃ坊主でクラスのリーダー格でもあった。そのためか、言葉の分からない私は、同級生たちにとって珍しく映ったのだろう。休憩時間になると、日本人の子どもたちに囲まれ、いろいろと質問された。もちろん言葉が分からないため、中国の漢字を書いて驚かせたりしながら遊んでいた。

編入して間もなく、明という友達ができた。日本に来て初めてできた友達だった。右も左も分からなかった私にとって、明の存在はとても大きかった。頑張って日本語を話そうとしたが、恥ずかしくて口に出せなかった。そんな時でも、明にだけは恥ずかしがらずに話せた。「待って、ちょっと。」と私が言うと、明は「違うよ、『ちょっと待って。』だよ。」と直してくれた。1人称に「私」を使っていた私に、「男の子は『僕』だよ。」ということも教えてくれた。日本語の練習に、明はいつもつきあってくれた。明の助けもあって、私はみんなの前でついに初めての日本語を話すことになる。セサミストリート[8]のキャラクターが描かれた下敷きを見て、「何これ。」と言ったのが、私が皆の前で発した初めての日本語だった。その時、「リュウホウが日本語喋った！」というクラス中の驚きは今でも鮮明に覚えている。これを機に日本語を話していくようになったが、これは明のおかげによるところが大きいと今でも思う。このように、明は私にとって、大切な存在であった。学校ではいつも一緒にいた。しかし、そんな日々も長くは続かなかった。

ある朝、登校すると下駄箱に明がいた。「明、おはよう。」、私はいつものように挨拶した。返事はなかった。「おはよう。」、少し大きめの声で言い直した。それでも返事はない。様子がおかしいと感じた私は、「明、どしたん。」と聞いた。明は無言で立ち去ろうとした。私は明の腕を掴み、さらに問い詰めた。「もう遊ばんけぇ。」という一言を、私は即座に理解できなかった。「え、なんで。」と聞き返す私に、「なんでも。今日からもう遊ばんけぇ。」と、明は下駄箱をあとにした。何かの間違いだと思い、教室でも明に声をかけたが返事はなった。私と明の関係、そして日本での最初の友人関係はこうして終わった。当時は、自分が何か悪いことをしたのだと思っていた。しかし、大人になった今、私が中国人だったために、明の両親が何かを言ったのではないかと振り返ることがある。もちろん、真相は分からないままである。

第２項　恩師との出会い

日が経つにつれ、少しずつだが日本語がわかるようになった。しかし、授業にはまだついていけなかった。特に国語の時間は座っているだけで、とても退屈に感じた。テストの時間はさらに退屈で、何もすることがなかった。そんな私に手を差し伸べてくれたのが担任の吉岡先生だった。吉岡先生は答えを全部教えてくれた。「ここ、ここ。」と、ジェスチャーを交えながら抜き出し問題の抜き出す範囲を示してくれた。そんな吉岡先生は私の救いだった。指示通りに書くだけの単純作業だったが、「やることがある」時間がとても心地良かった。来日後、吉岡先生をはじめとした先生との出会いが

私にとって大きな意味をもつ。なかでも、次に挙げる２人は私の日本での経験を語るうえで欠かせない存在である。

先述のように、私はほんの少ししか日本語が分からず授業ではほとんど座っているだけの状態だった。そんなある日、校長の山田先生に呼び出された。「怒られるのだろうか。」、そんなことを考えながら校長室へ向かった。校長室に入ると、山田先生は私をソファに座らせた。そして、日本での生活や学校生活について簡単な日本語で聞かれた。詳しい内容はほとんど覚えていない。しかし、鮮明に覚えていることがある。日本の学校には、どこでも部活動などで獲得したトロフィーや賞状を飾るスペースがある。山田先生は、私をその前に連れて行くと次のように話した。「日本語を覚えたら、好きなのをあげよう。」と。今思えば、そんなことができるわけがない。それでも幼い私にはとても嬉しかった。結局、山田先生の定年退職で約束が果たされることはなかった。しかし、その言葉が私にはこの上ない励ましとなった。

それから間もないある日、吉岡先生は私を図書室に連れて行った。そこには１人の女性がいた。「林先生です。」と吉岡先生が紹介してくれた。私の日本語指導をするために外部からやって来た先生で、毎日放課後に１～２時間ほど日本語を教えてくれるという。こうして、図書室の隣にある図書準備室に日本語教室ができた。当時、日本語指導が必要なのは私１人だけだった。そのため、日本語教室には毎日私と林先生と私の２人しかいなかった。授業は、絵カードやおはじきなどゲーム形式が中心だった。私が日本語を嫌いにならないように、楽しく工夫をしてくれたのだろう。

林先生とは日本語教室での関わりしかない。それでも、私にとって生涯忘れることのできない人物である。というのも、私にとって日本語教室は、学校内で思ったことを自由に言える場所であり、ありのままの自分をさらけ出せる場所でもあったからである。例えば、私には幽霊が怖くて家に帰れなかった時期があった[9]。男の子の私は、そんなことは誰にも言えなかった。しかし、林先生にだけは甘えることができた。そのため、無理を言って林先生に家まで送ってもらったことも少なくなかった。林先生は決まって、「早く１人で帰れるようになると良いね。」と言いながら私を家まで送ってくれた。時には用事があるにもかかわらず送ってくれた。先述のように、来日後、私の両親はすぐに働きに出た。勤務先が料理屋だったため、いつも帰りは遅かった。そのため、家に帰っても１人でいるのが常だった。そんな私を林先生は心配してくれたのだと思う。余談だが、林先生と一緒に帰ったある日、私は横断歩道で転倒した。その時、前歯が欠けた。今でも前歯は欠けたままで、鏡を見ると林先生を思い出すことがある。

クリスマスや子どもの日になると、林先生はわざわざプレゼントを用意してくれたり、ちょっとしたパーティーをしてくれたりもした。2人だけのパーティーだったが、とても温かかった[10]。アニメキャラクターのかるたや絵本をもらった時は、とても嬉しかった。学校では禁止されていたお菓子も、日本語教室では内緒で食べることができた。学校で同級生にいじめられて学校に行きたくない時も、林先生の所だけが心が落ち着ける場所だった。このように、日本語教室は林先生と過ごした思い出が詰まった私の大事な居場所であった。日本語教室は、林先生が県外に引っ越したことで幕を閉じた。小学校3年生の終わりだった。

日本の小学校は、人生を決定づける体験や出会いを提供してくれた場所である。後述するように、高学年ではいじめも体験した。日本語ができても、自己主張ができずにいた時期もあった。自分が外国人ということで日本の学校では遠慮ばかりしていた。しかし、そこから這い上がり今の自分があるのは、小学校で出会った恩師たちによるところが大きい。

第3項　会館での日々

序章でも述べたが、Q市は人権教育や平和教育が盛んな地域である。また、そうした教育を推進するための施設が数多く存在する。そのなかの1つに人権会館（以下、会館）がある。小学校入学から中学校を卒業するまで、私はこの会館で多くの時間を過ごすことになる。会館の目的は、人権問題や差別問題、地域の福祉に関わる問題の解決を図ることである。そのため、会館は人権教育を提供したりなど地域に開かれた場所であった。私の入学をきっかけに、学校側はこうした目的をもつ会館を外国人児童のための教育に用いるようになった。繰り返しになるが、私が通っていた学校には、中国、フィリピン、後にはブラジルからの子どもが在籍していた。こうした子どもに日本語指導を行うために、会館が使われたのである。こうして私は、林先生の日本語教室と並行して毎週木曜日の放課後、会館に通うことになった。

会館の活動内容は、学校の先生や既にQ市に定着していた外国人（と言っても中国人しかいなかったが）が私たちに日本語を教えるところから始まった。初めて会館に行った日、私の他に前項で登場した中国人の女の子、舞と由里子もいた。彼女たちは日本生まれで日本語も流暢だった。そのため、自分たちの宿題に取り組んでいた。一方、私は知らない中国人男性に日本語の単語を教わった。最初に教えてもらった言葉は「わに」だった。

このように、外国人児童に日本語を教えるという目的で始まった会館の活動は、実

質私１人に対する日本語指導であった。そのため、私の言語上における問題がなくなると日本語指導もなくなった。しかし、学校側の方針で会館には引き続き通わなければならなかった。日本語指導が必要なくなると、会館での活動内容も変わった。私も、舞や由里子と同様、学校の宿題をするようになった。つまり、日本語を学ぶ場から学校の宿題をする場へと会館は変わったのだった。なお、この頃になると、教えに来るのは学校の先生だけになっていた。

私が日本語を習得した後も会館の目的自体は変わらなかった。私が３年生に上がる頃、１学年下に張君という山東省出身の中国人児童が転入してきた。彼も私同様、日本語が分からなかったため、林先生の日本語教室と並行して会館に通うようになった。張君に対する指導内容も初めのうちは日本語指導だった。その後、彼が日本語を身につけると、私の時と同じように日本語指導はなくなり、会館は宿題をする場となった。そして、これ以降も何人かの外国人生徒が転入してきたが、皆同じ道を辿った。また、会館は私の遊び場の１つでもあった。毎週勉強が終わると、職員が体育館を開放してくれた。そこには、バドミントンやボールなどいろいろな遊び道具があった。私は張君や舞、由里子たちと時間を忘れて遊んだ。時には、学校の先生や職員も一緒に遊んでくれた。毎週、その時間が楽しみで仕方がなかった。勉強は嫌だったが、会館に行くのはとても楽しかった。

以上のように、私たち外国人児童にとって、会館は日本語や宿題などの勉強をする場所や遊び場であった。しかし、会館で経験したことはそれだけではなかった。会館は、私に自信を持たせてくれた場所としても機能した。１番印象に残っているのは、会館の職員がさまざまな中国に関するイベントを企画してくれたことである。餃子作りや映画上映会などは特に印象深い。なかでも、私がよく覚えているのは、会館で見た２本の映画、「項羽と劉邦」「ラストエンペラー」である。

中国の武侠映画や歴史ドラマが大好きだった。しかし、来日後はそうしたものを見る機会がほとんどなかった。そのため、久しぶりに見た中国の歴史映画に私はとても興奮した。観客のほとんどは日本人だった。中国人は私と張君しかいなかった。そのため、画面に映る雄大な中国の歴史は、私を「自分は中国から来たんだぞ。」という誇らしい気持ちにさせるのに十分だった。また、会館での私は一方的に日本語を教わる存在ではなかった。おしゃべり程度だったが、職員や学校の先生に簡単な中国語を教えることもあった。そして、学校の先生たちは、中国の素晴らしさや私の将来性を説いてくれた。日本語があまりできず、無力感に溢れていたが、会館にいる時は自信に満ち溢れる時間を過ごすことができた。これらの取り組みは、空間的にも時間的にも

中国と分断された私を中国と結び付けてくれたのである。

４年生のある日、学年全体で人権教育を学ぶ目的で会館に行った。そこでは、人権の大切さに関する授業と会館の見学というスケジュールが組まれた。その日の担当は、毎週顔を合わせる職員だった。外国人児童ではなく、日本の学校に在籍する１人の生徒として彼に接することに違和感を覚えた。というよりも、会館にいること自体に違和感を覚えた。その一方で、「この中で、会館に詳しいのは俺だけ。」という優越感にも浸った。調子に乗って私が他の生徒に会館の解説をしたりもした。このように、私にとっての会館は楽しい場所であり、中国を身近に感じ、そして自信をもつことができる場所であった。林先生の日本語教室と同じく、私の居場所だったのである。

第４項　いじめの経験と２度目の友人喪失

明という友人を失った直後の私は、失意の底にいた。また、私はだんだんとクラスメートにとって興味深い存在ではなくなり、かれらが私の周りを囲むことは少なくなっていった。そのため、しばらくの間、私は孤独な時間を過ごしていた。しかし、間もないうちに、雄太と博樹との出会いによって状況は改善していく。２人との関係が始まったのはある日の休み時間だった。トイレに行こうと教室を出たところ、「なぁなぁ、リュウホウ君。」と後ろから私を呼ぶ声がした。振り返ると、そこには２人の男の子がいた。雄太と博樹だった。「俺らと遊ばん？？」と２人は続けた。まだ即座に日本語を聞き取れない私に、雄太は同じ言葉をゆっくり繰り返した。ようやくかれらの意図を読み取った私は、その日から２人と行動をともにするようになった。２人と過ごす日々はとても充実していた。学校ではいつも３人一緒だった。家がすぐ近くだった私たちは、登下校も一緒だった。スポーツが得意な２人は、サッカーや野球などさまざまなスポーツを教えてくれた。そして、私の誕生日になると誕生日会を開いてくれて、「ダサい」と言いながらも私が好きだった戦隊ものの本をプレゼントしてくれた。

２人とは家族ぐるみの付き合いもした。特に雄太の両親は私をとても気に入ってくれて、キャンプや釣り、海水浴といつも遊びに連れて行ってくれた。車がなく、遠くに連れて行ってもらえなかった私はいつも雄太の家族との遠出が楽しみだった。遊びから帰ると、次の日には必ず両親が作った中華料理をお礼として雄太の家にもって行った。雄太の家族は心から喜んでくれて、私もとても誇らしい気分だった。３年生に上がると、雄太や博樹の他に和之とも仲良くなった。彼らと過ごしていくうちに私の日本語も目に見えて上達していった。３年生が終わる頃には、方言まじりの日本語もすっかり板についていた。

こうして、明が私から離れて行った後、雄太や博樹、和之と出会えたことは幸運だった。しかし、５年生になると状況は一変する。この頃の私は肥満児だった。このことに起因して私へのいじめが始まる。ことの始まりは、プールの授業だった。私の体つきを見た何人かの男子生徒は私を「デブ」や「白豚」などとからかった。最初は、遊んでいると思い「うるさい。」と返すだけだった。しかし、からかいは日を追うごとにエスカレートしていった。体育の時間には「脂が走っている。」、給食の時間には「豚が餌を食っとる。」などと言われた。我慢ができなくなった私は、彼らに対して怒りの感情を表すようになった。しかし、私の反抗的な態度は彼らにとって面白かったのだろう。怒る私をからかうために、さらに酷いことをされるようになった。習字の時間に、「デブ」と書かれた半紙が置かれることもあった。デブが移ると言って、避けられたりもした。こうした行為が一部で済めば良かったのだが、やがてクラス全体が私を避けるという事態になった。クラスでの私の呼び名は「豚」になり、ことあるごとに「汚い。」と言われ、私が触れた後のものは誰も触ろうとしなかった。強制的に生徒会長に立候補させられて、誰も私に投票をしないという嫌がらせをクラス中から受けた。仲が良かった３人の友人も、違うクラスになった雄太以外は直接何かするわけではないが私と距離を置くようになった。

５年生が始まって間もなく、クラスに陳君という中国人が転校してきた。彼は私同様日本育ちのため、日本語に困難を感じない生徒だった。同じ中国出身で同じアパートに越して来たということもあり、私たちはすぐに打ち解けた。しかし、私に対するいじめが始まると彼もまた私に対する態度を一変させた。私が遊びに誘っても、用事があるといつも断られた。しかし、実は他の友人と遊んでいたのだった。特にショックだったのは、それまではいつも私の家に遊びに来ていた博樹と和之が陳君の家に通うようになったことだった。彼らもまた、家の用事という嘘をついて陳君の家に行ったのだった。このいじめによって、私は友人のほとんどをほとんど失った。週末になると何もすることがなかった。５階に住んでいた私は、陳君の家に停めてある博樹たちの自転車をみて涙した。そんな状況でも雄太だけは変わらず接してくれた。しかし、当時の雄太はサッカーや塾などで忙しく、一緒遊ぶことはほとんどできなかった。友人を失った私だったが、陳君の機嫌をとって登下校だけは一緒にしてもらったり、陳君がいない時だけ博樹たちを家に呼ぶことができた。とても惨めだった。博樹たちにとって、私は陳君がいない時の代わりだということはわかっていた。しかし、それでも私はそれにしがみついたのだった。

このように、私は日本の学校で日本人にいじめを受けた。しかし、当時の経験を振

り返ると、それは不幸中の幸いだったように思うことがある。「太っている」という誰しもがもつ可能性の部分が否定されたことにある種の平等を感じるのである。なぜなら、私が受けたいじめが中国というルーツによるものではなかったからである。つまり、「ルーツを否定されるいじめ」とそれ以外のいじめという序列を作り、ルーツが否定されるいじめではなかったことに安堵したのである。そう思うと今でも複雑な気持ちになる。

第５項　両親の苦労と私

前節で言及した通り、私と母は先に日本に来ていた父の呼び寄せで来日した。父は、日本語学校卒業後、大阪で日本人が経営する中華料理店で調理師として雇われていた。当時の生活は苦しく、父は一戸建ての家に他の中国人仲間と 10 人ほどで住んでいた。収入自体が少ないこともあるが、そのほとんどを私たち家族に送金していたためだった。そんな生活が何年か続いた後、私と母の来日によって大阪から Q 市へと移ることになる。それが私たち家族にとっての「家族の物語」の始まりと言える。

両親は共働きで必死に働いた。２人とも同じ中華料理店に勤め、毎夜８時前に帰宅することはなかった。しかし、収入は少なく家族３人で食べていくのがやっとだった。周りの友人たちは、新しいゲーム機や玩具をすぐに買ってもらえる。いろんな所へ遊びに連れて行ってもらえる。それがずいぶん羨ましかった。たまに買ってもらえる 500 円にも満たない飛行機の玩具や怪獣のカードがたまらなく嬉しかった。また、両親は休みが週に１日しかなく、それも平日だった。そのため、私の学校帰りにデパートに出かけるくらいしか家族での外出はなかった。当時は車もなく、自転車で移動していたのが今ではとても懐かしい。

両親は職場でとても厳しい環境に置かれていた。同僚に激しい嫌がらせを受け、父はノイローゼ手前まで追いつめられた。母も日本語がほとんどできないために、人が嫌がるような仕事ばかりを押し付けられた。初めて両親の職場に行った時のことは記憶に深く刻まれている。汗だくで働く２人を見て心が痛かった。

数年後、店のオーナーが父を店長にしたいという話が持ち上がった。しかし、そこでも、同僚の根も葉もない告げ口でせっかくのチャンスが台無しになった。夢が叶うと思った父にとって、大きな衝撃だった。このことによって社長の不信感をかった父は、3 年もの長い間福岡に飛ばされた。当時は父が福岡に行った理由を知らなかった。理由を知った今では、福岡に出発する前に父が買ってくれたプラモデルを大事に取っておけば良かったと後悔することがある。

福岡への異動から３年後、父はＱ市に戻ることができた。しかし、まもなく両親の勤めていた中華料理店は倒産した。そのため、２人とも職場を変えることになった。職場は別々だが、心機一転新たなスタートを切った。父の方は良い職場に巡り合ったようで、店で１番信頼される存在になった。一方、母は職場を変わっても辛い体験をすることになる。日本人によるいじめが母を待ち受けていたのである。まかないのかわりに、１人だけ客の残りを食べさせられる。他の従業員が仕事をさぼって談笑しているなか、他の仕事を全てさせられた。ひどい時には、まだ湯気が立っているラーメンを手にかけられたという。最初のうちは、辛くても私のために耐えていた。しかし、１年が過ぎようとした頃、ついに職場を辞めてしまった。

第５節　第３の物語：中学入学から高校卒業まで

第１項　中学生活の始まり

小学校を卒業する少し前、理科室の前で雄太と進路の話をした。その時、彼が私立中学に進学することを知った。最後の砦を失った気分だった。上述したように、私は５年生からクラスによるいじめを受けていた。そんななか、唯一の友達が雄太だった。そのため、私にとって雄太を失うことは全てを失うことと同義だった。雄太は私と同じ公立中学校に進学するものだと思っていた。そもそも私立の中学校があること自体知らなかったからだ。当時、学校に関することは全て自分で処理していた。私が知らない情報は両親も当然知らなかった。Ｑ市にいた中国人も誰１人子どもを私立に通わせていなかったし、存在さえ知らなかった。そのため、私立への進学は想像もできないことだった。

私は雄太が自分の傍から消えることがこわかった。「どんな酷い目に遭うのだろうか。今度こそ本当に孤立するかもしれない。」、そんなことばかりを考えていた。入学式の前、中学校にクラス分けを見に行った時も自分のクラスに書かれている名前の全てが恐怖の対象だった。進学に対する不安を両親に話すことはなかった。しかし、両親は私の不安を感じとっていた。「いじめられたら、絶対にやり返せ。こわがるな。」と教えられた。２章で取り上げた紫微は、子どもに手を出さないよう教育していたが、私の両親は彼女とは全く逆だったのである。運動が苦手で喧嘩に自信があったわけではなかったが、両親の教えによってある程度覚悟を決めることができた。

しかし、私の不安をよそに中学生活は希望から始まった。入学式の何日か前、北岡さんという男性から電話があった。私の担任になる先生で、入学前に一度話がしたいとのことだった。翌日、北岡先生が家に来た。そして、中国茶を飲みながら両親と４

人で話した。北岡先生は不安なこと、興味あることなどいろいろ聞いてくれた。その時、私はいじめのことは言い出せなかった。両親に心配をかけたくなかった。中国人だから問題があると思われたくなかった。そして、何よりいじめられていたことが恥ずかしかった。その代わり、私は自分が興味をもっていることを話した。中学に入ったら英語を頑張りたいこと、空手を始めたことなど、いろいろ話した。すると北岡先生は、自分の担当が英語であることや少林寺拳法をやっていることを話してくれた。「一緒に頑張ろう。」と言ってくれた。とても嬉しかった。何かあっても北岡先生が助けてくれると思った。何気ない訪問、何気ない一言に救われた気がした。前節に登場した陳君にそのことを話すと、彼の家にも別の先生が訪問したとのことだった。このような先生個人ではなく、学校を挙げての取り組みがあったからこそ私は一縷の希望をもって小学校を卒業できたのである。

第２項　自信に満ち溢れた時代

北岡先生との出会いや両親の教えで希望を持てた一方、やはりいじめに対する不安は拭い切れていなかった。しかし、私が中学でいじめられることはなかった。小学校時代のように、「白豚」「デブ」など多少はからかわれたものの、私が言い返せばおさまる程度のものだった。むしろ、中国出身ということで他の小学校から来ていた生徒から一目置かれるようになった。「中国語話せるんじゃろ？」「名前かっけー！」、そんなことを言われた。日本に来た時のことがフラッシュバックした。興味をもってもらえることが、これほど嬉しいものかと再確認できた。

私に対する注目は来日当初と同じく、すぐにおさまった。しかし当時と違い、悪い気はしなかった。日本に来て６年目になろうとしていた私は日本語に全く困らなかった。そのため、何もできずにじっとしているだけの存在ではなかったからである。友達もたくさんできた。こうして私の中学生活は良いスタートを切ることができた。そして、中学時代は私が自信をつけていく時期でもあった。

前節で述べた通り、中国にいた頃の母は教育に関して非常に熱心だった。それは来日した後も変わらなかった。ただ、小学校時代は成績で母に叱られることはなかった。夏休みの宿題が終わらずに叱られる程度だった。これは、定期テストがなく通知表も「よくできました。」「頑張りましょう。」などの抽象的な評価しかなかったために、母は私の成績を把握しづらかったためだと思われる。また、仕事で帰宅が遅かったために私の成績を気にする余裕がなかったのだろう。しかし、中学は違った。

中学の勉強は小学校とは全く違った。テストの問題用紙と解答用紙が分かれていて

戸惑った。入学早々の確認テストでは平均 60 点台しかとれなかった。小学校時代成績が良かった私は酷く落ち込んだ。言うべきかどうか迷ったが、怒られる覚悟で結果を母に伝えた。やはり酷く怒られた。「良い高校、良い大学に入れなかったら、力仕事しかできないよ。高級な人になれないよ。」、第２章では、子どもに声かけをする雪梅の事例をみたが、私も母に同じようなことを言われた。以後、怒られないようにテスト前は寝る間を惜しんで勉強した。その結果、学年でも上位に入ることができた。なかでも、私が特に力を入れたのは英語だった。

私の周りにいる中国にルーツをもつ子どものほとんどが中国語を話せなかった。例えば、前章の対象者たちも中学で来日した者以外は全員日本語しか話せないか、少しだけ話せるかである[11]。かれらと違い、私は中国語を忘れることなく成長できた。これは、両親が日本語を話せず、家庭内言語が中国語だったためだと思われる。中国語と日本語が話せる私に両親は、言語資本が将来武器になると言い聞かせた。このような両親の教育によって私も自分の言語能力が武器になると信じるようになった。やがて、私の夢は外交官や通訳など、言葉を使う職業になった。

こうした背景から、私は英語にも興味をもつようになった。当時の我が家は経済的に豊かではなかったが、英語塾だけは通わせてもらった。ほとんど同じ中学校の友人しかいない小さな個人塾だった。塾での私はいつも１番だった。先生にいつも褒められた。学校でも英語に関してはいつも１番だった。筆記体もお手の物になった。３年生の時には英検準２級にほぼ満点で合格した。北岡先生に合格証書を渡された時、クラス中が驚きの声をあげた。「ムカつくくらいに凄いわ。」と同級生に言われた。北岡先生にも「凄いな。」と褒められた。英語で良い点をとった時、そして英検に合格した時、すぐに母に報告した。母や先生に褒められた時、同級生に称賛された時、とても誇らしかった。いじめられていた時は何事にも自信をもてなかったのに、中学ではみんなが私に一目置いた。また、英語以外の科目にも力を入れた。理科だけは苦手だったものの、他の受験科目もいつも 80 点以上を維持した。漢字検定も取得した。受験科目以外の科目にも力を入れた。母は音楽や家庭科などには大きな関心を示さなかったが、私は少しでも良い点数を目指した。

私が好成績を維持できた背景には、学校側の配慮もあった。会館の存在である。前節で紹介した会館での活動は中学に入っても続いたのである。小学校時代と同じで、会館ですることは学校の宿題だった。毎週木曜日の夜、会館で勉強した。そこには週替わりで中学校の先生が来てくれた。先生が１人の時もあれば、３人以上いる時もあった。宿題が終わると、私は塾の勉強をした。また、いろいろな教科の先生がいたた

め、私は会館で分からないところを聞くことができた。

会館では勉強だけでなく、先生といろいろな話ができた。中国のことを先生に聞かれたり、中国の政治について議論することもあった。もちろん、私は何もわからず上手く議論できなかった。時には先生たちが、私たち会館に通う子どもたちを夕飯に連れて行ってくれることもあった。１番印象深かったのは、大森先生が連れて行ってくれた中国人が経営する中華料理店だった。先生たちがラーメンをすすりながら中華料理を褒める光景にも私は誇りを感じた。先生たちが私たちに自信をつけさせるために中華料理店を選んだかどうかはわからない。しかし、いずれにせよ中学時代、私には学校、塾、会館と私には自信をつけられる場所、そして居場所が複数あったのである。

第３項　家族との別れ、そして出会い

私には 16 歳の妹がいる。2000 年生まれのミレニアムベイビーだ。辰年に生まれた赤ん坊は、今では書道や絵画のコンクールで賞を獲るまでに成長した。当時の中国では２人目が許されないことに加え、両親が 40 歳を超えての高齢出産ということもあり、まさに目に入れても痛くないほどの可愛がりようだ。妹の誕生は、両親にとって夢が叶ったといって良い。しかし、私たち家族の胸には今も忘れることのない記憶が刻まれている。光を見ることができなかった１人目の妹だ。

中学２年生のある放課後だった。出産予定日のその日、授業が終わると、家まで全力で走った。5 階まで続く階段を駆け抜けるのは、運動が苦手だった私には辛かった。家に帰ると、父が仕事を早退して既に帰宅していた。しかし、なぜか座ったままで喜ぶ様子もない。「まだ生まれとらんのかな。」、そんなことを思った。その瞬間、突然父が私に抱きついた。「あの子はいなくなったんだよ。」、声が震えていた。意味がわからなかった。少し時間を置いてようやく状況が理解できた。あんなに泣いた父を見たのは最初で最後だった。父と抱き合って号泣したことが、今でもふいに甦る。

多少落ち着いた後、父と私は病院に駆け付けた。暗い病室の中に母はいた。その腕には、人形のような赤子が包まれていた。息はしていない。母は私たちに反応することもなく、顔を妹の体に埋めていた。父と私は、母に声をかけることさえできないでいた。悲しみを超える何かに包まれたような空間。そのなかでどう振る舞えば良いのかさえ私には判断がつかなかった。

次の日には、学校の遠足が控えていた。当時の担任に経緯を話すと、「遠足なんていいから、今はお母さんのそばにいてやれ。」と言われた。それから、３日だったか、４日だったか、学校を休み病院に通った。仕事に戻らなければならなかった父に代わっ

て私が母の話し相手をした。その間母は、担当の看護師に頼んで毎日妹を病室まで連れ来てもらっていた。母に「抱いてみる？」と何度か聞かれることがあった。しかし、私にはできなかった。顔をみることさえできなかった。今思えば、「なぜあの時抱いてやらなかったのか。なぜもっと顔をみてやらなかったのか。」と後悔にかられることがよくある。当時の私には、そこまでの強さがなかったのだろう。

夜になると、父も仕事を終え病院に顔を出す。しばらくの間、病院に泊まり母の世話をしていた。学校で朝が早かった私は、父と入れ替わりで帰宅した。母が落ち着くまでの間、同じ市営住宅に住む中国人の李さんが、私の食事や身の回りの面倒をみてくれた。李さんは、私が寂しくないよう何日か泊まり込みで世話をしてくれた。周りに関係の深い日本人がいなかった私たち家族にとって、非常にありがたかった。中国人同士のつながりを感じた時でもあった。

両親だけでなく、きょうだいが欲しかった私にとっても日本に来られたことはとても嬉しかった。中国では味わえない喜びを手に入れるはずだった。しかし、私たちに突きつけられたのは家族の死という冷たい現実だった。よくある話で、そんなに珍しいことではないかもしれない。ただ、中国人としてこのような経験をすることは、日本人とは違った意味合いを帯びているように思う。祖国では望めない新たな家族。ようやく異国でその夢が叶うと思った時にどん底に突き落とされる。少なくとも私には、二重の悲しみの中に叩き落とされたように感じた。15 年以上経った今でも、両親が当時のことを語るのを聞いたことがない。しかし、その苛酷な現実を乗り越えた今、その生まれ変わりのような妹に両親はあふれんばかりの愛情を注いでいる。

第４項　進路と２枚の卒業証書

３年生になると、周囲は進路の話でもちきりになった。私も例外ではなく、どの高校に行こうか考えた。ニューカマーの子どもの高校進学率は相対的に低いと言われている。しかし、私にとって高校進学は当然の選択だった。就職という選択はなく、両親にとっても高校進学は当然のことだった。３年生が始まってしばらくすると、高校による学校説明会が開かれた。そこでは、高校でかかる費用や将来の進路に関する説明があった。周りの友人は説明会の後、すぐに希望進路届を提出した。なかには、５校も受験する者もいた。一方、私はなかなか書けないでいた。そこには、次のような理由があった。

「中国人は差別されるから、１番にならないと高校には入れない。」、中学入学後から、母によく言われた言葉である。母がどこかから聞いた情報らしく、心配していた。

私が高校に行けなかた場合、帰国するという考えもあったほどだった。私は、母の言葉を全て信じていたわけではなかった。しかし、自分のルーツを考えると「どこか不利な部分もあるかも。」と多少の不安はあった。そのため、そもそも高校に行けるのかどうかが心配だった。また、母からは国立か公立しか通わせないと言われた。私立は費用が高いという理由だった。国立は無理でも公立ならどこにでも入る自信があった。しかし、それでも「滑り止め」なしでの受験は怖かった。これらの理由から、私は自分の進路をどうして良いのかわからなかった。やがて、それらのことで頭の中がいっぱいになった。受験勉強にも身が入らなくなり成績も落ちた。

２学期に入って間もない頃のことだった。３年生で再び私の担任になった北岡先生と面談をした。公式な面談ではなく、私のことを心配した北岡先生が個人的に声をかけてくれたのである。「進路で心配な点はないか。」と聞かれた。私は、自分が不安に思っていることを伝えた。「誰がそんなこと言うたんな。そんなこという奴がおったら、わしが怒っちゃるわ。」と北岡先生は声を荒げた。そして、高校受験に国籍は関係ないと教えてくれた。両親にも安心するよう伝えてほしいと言われた。また、私立の受験に関しても、授業料減免の情報を教えてくれた。一気に肩の荷がおりた。北岡先生の言葉が私を救ってくれた。あの時、北岡先生に声をかけてもらえなかったら、きっと私はその後も悩み続けていたと思う。

家に帰ると、すぐに母に北岡先生の話を伝えた。母もほっとした表情だった。その日の夜、私は両親と話し合い公立高校と私立高校１校受験することにした。第１志望は、市内の公立で１番偏差値が高い A 校だった。推薦入試の面接では、「国際性」や中国語をアピールした。結果は不合格だった。不合格通知をもらった直後、私は奈落の底に落ちたような気分になった。死んでも良いとさえ思った。頑張ったのに報われないのかと思った。家に帰って母に知らせた。私の想像とは違い、母は怒らなかった。むしろ、一般入試で頑張れば良いと励ましてくれた。A 校の推薦入試からしばらくして、私立の入試日になった。私の中学からは多くの受験生が来ていた。テストの手ごたえはあった。後日、北岡先生から合格の知らせを受けた。しかし、公立の一般入試を考えると素直には喜べなかった。母の期待に背きたくなかったからだった。

年が明けると、いよいよ一般入試の受験校を選ばなければならなかった。私は A 校を希望していたが、A 校とは別に B 校にも興味をもっていた。B 校は市内の公立では、２番目の高偏差値校だった。面談で北岡先生とも話し合ったが、私はどちらの高校も合格圏内にいた。本来なら、A 校を受けるのが両親の期待に応える１番の近道だったと思う。しかし、B 校には「自由選択制」という、履修する授業をある程度自分で選

択できる制度があった。そのため、英語に関する科目を多く履修できると思い、日に日にB校にひかれていった。母にB校に行きたいと話した。英語の授業を多くとれる点､偏差値もA校と大差ない点などをアピールした｡A校を受験してほしかった母も、ついにB校の受験を認めてくれた。受験当日、私は確かな手ごたえを感じた。苦手な理科以外は全て満点だったと今でも信じている。こうして、私はB校に進学することになった。

進路が落ち着くと、３年生は卒業式ムード一色になった。授業はもうなくなり、卒業式の練習やホームルームが主な学校での過ごし方になった。私が中学を卒業する時期は、卒業式での君が代斉唱や国旗掲揚の義務化が叫ばれ始めた頃であった。義務化に関しては多くの教員が反対していた。私の中学も例外ではなかった。ホームルームでは、君が代の意味や日の丸の意味を北岡先生が教えてくれた。そして､「無理に歌わんでえぇ。立ちたい奴は立てばえぇ。」と北岡先生が熱心に話してくれた。教員は業務上立たなければならないが、生徒は好きにして良いと熱弁した。

また、卒業にあたっては、私たち中国にルーツをもつ子どもにも学校側は配慮してくれた。ある日、北岡先生に話があると呼び出された。そこで聞かれたのは、卒業証書に元号を使うかどうかだった。私はすぐに西暦を使いたいと北岡先生に伝えた。家に帰って両親に伝えると、２人とも西暦が良いと言った。自分の選択は間違ってないと思った。次の日、北岡先生から校長室に行くよう、指示された。校長室に入ると、険しい表情をした校長先生がいた。座るように促されると、校長先生は切り出した。「どうして西暦が良いの？」、私はすぐには答えられなかった。そして、少し考えて答えた。中国生まれの自分は天皇には忠誠を誓っていない、日本軍に斬られた親族がいるなどと答えた。すると校長先生は、「わかった。じゃあ、２枚作っとくな。」と笑顔で返事をしてくれた。もちろん、教育委員会からは元号を使うよう指示があったのだろう。そのため、校長先生は私が安易な気持ちで決めたのかどうかを確認したのだろう。そして卒業式の当日、私は２枚の卒業証書を受け取った。

それまで、日本が中国を侵略したという事実以外に日中間の歴史問題をあまり考えたことがなかった。しかし、この一連の出来事は改めて私のルーツを確認させてくれた。平和教育が盛んなP県にあって、人権教育にも熱心に取り組んでいたQ市という土壌があったからこそ可能だった配慮だったと思う。ちなみに、同学年には舞と由里子もいたが、彼女たちは元号のままで良いと言って西暦入りの卒業証書を希望しなかった。

第５項　高校入学と学力低下、そして大学受験

卒業式が終わると、私は友人たちとバス釣りに行ったりして休暇を楽しんだ。一方で、私には他にもすることがあった。仕事で忙しく、そして日本語が読めなかった両親にかわって高校入学の準備を全て自分でしなければならなかったのだった。入学までのスケジュールを確認し、入学金も自分で振り込みに行った。書類の記入も私が指示をしながら父に書いてもらった。入学直前のあるできごとは今でも忘れられない。

ある日北岡先生から、私の家に電話がかかってきた。「制服作ったか？もって帰るん大変じゃろう？」と北岡先生に聞かれた。私の家に車がないことを知っていた北岡先生が制服の受け取りに同行してくれるというのである。両親に事情を話し、次の日に北岡先生と出かけることになった。翌日、北岡先生の車に乗り込むと、私たちは制服店に向かった。車中では、中学校の思い出話に花が咲いた。なかでも、英語について褒めてくれた。高校で何かあったら、相談に乗るとも言ってくれた。とても心地が良かった。帰り道、北岡先生が買ってくれた缶ジュースの味は今でも忘れられない。このように、高校に入学する直前まで北岡先生は私を支援してくれたのだった。

４月に入るとすぐに入学式があった。私の心配事と言えば、やはりいじめられないかということだった。その頃、身長が大幅に伸びた私は、もう肥満体型ではなかった。そのため、体型を理由にいじめられるとは考えていなかった。そのかわり、私は自分のルーツゆえのいじめを心配していた。中学時代まで、ルーツが原因でいじめられたことはなかったが、それでも新しい環境は私に不安と恐怖を感じさせた。

入学式には父が来てくれた。入学式では、国歌斉唱が行われたが、私は立たなかった。座っていたのは、私を含む数名だけだった。今思えば、新しい環境の入り口で１人だけ目立つのはとても勇気が必要だった。こうして、私の高校生活はスタートを切った。

入学前は不安を感じていた私だったが、中学時代と同様、それは杞憂だった。すぐに友人ができ、クラスにも打ち解けた。入学後すぐに行われたテストではクラス２位の成績を通り、クラスの注目を集めた。不安がなくなると、私も目立ちたいと思うようになった。髪の毛を染めたり、アクセサリーをつけたりした。いち早く携帯電話ももった。とても充実したと思っていた。私の高校生活は、人間関係という点では充実していたように思う。しかし一方で、過酷な現実とも向き合わなければならなかった。学校の授業についていけなくなったのである。

成績の低下は化学から始まった。入学後初めての定期テストで、いきなり追試を受けることになった。もともと理科が苦手だったとはいえ、赤点をとるは初めての経験

で酷く落ち込んだ。しかし、落ちんでも解答はわからない。最終的に追試にも合格できなかった者には課題が課された。そこに私もいた。とても惨めだった。２学期に入ると、数学も足を引っ張るようになった。複雑な数式が並んだ教科書を見ても、何のためにそれをやっているのかがわからなかった。50 点、40 点、30 点とテストの度に点数が落ちていった。テストの悪い点数を見ると、来日したばかりの頃の無力な自分が思い起こされた。やがて、無力な自分から逃げるために、数学や理科の授業は睡眠の時間になった。３年生の頃には模試で５点しかとれないこともあった。

このように、私は理系科目がとても苦手だった。そのため、それを補うために文系科目にしがみついた。英語では 100 点をとることもあった。社会でもいつも 90 点以上をとり、国語も 70 点以上は維持した。２年生で英検２級も取得した。毎回、英語と社会のテストだけは返却が楽しみでしかたなかった。その時だけ、自分の存在が認められた気がした。しかし、時が経つとその自信も失われていく。

学校のテストができていた私も、模試になると全く手が出ないようになったのである。教科書や参考書から出題される学校の問題と応用問題である模試では、難易度に差があり、私はそれに対応できなかった。偏差値はどんどん下がった。50 を切る直前まで下がったこともあった。理系科目は相変わらず悪かったため、周りからは、「リュウホウは英語だけよ。」という声も聞こえるようになった。修学旅行では、当時の担任に「あんた何ができるん？あ、英語か。」とまで言われた。しかし、当時は英語の偏差値も思うように上がらなかった。「俺は何もできない。」と罪悪感に苛まれた。しかし、私には英語以外にしがみつくものはなかった。点数を維持するためにカンニングをした時もあった。そして、模試では他の科目は諦めて英語の勉強にだけ力を入れた。その結果、何とか英語だけは偏差値 60 後半を維持できた。

成績が低下していくなかで、厳しかった母も私の成績を気にしなくなった。私も英語や社会など、点数が良かった科目だけを言うようになった。母も理系科目に関しては、もう向上しないと諦めていた。そんななか、進路選択は再び私を困らせた。周囲には、早くから自分の成績に見切りをつけて私大だけを狙う者、専門学校や短大、就職希望の者もいた。しかし、私はすぐに進路を決めることができなかった。経済面の問題で私大は望めなかったし、国公立に合格できるだけの学力もなかったからである。周知のように、国公立は私立と異なり、全教科が求められる。既に理系科目を放棄していた私には到底太刀打ちできなかったのである。

母には、「早稲田なら、いくら高くても行かせてあげる。」と言われた。中国で早稲田大学と言えば、世界一に等しい名門大学である。そのため、母には私に早稲田に行

ってほしいという願望があった。しかし、偏差値が全く足りないことを伝えると母は諦めた。そして、私と両親は進路をどうやって決めるべきか悩んだ。

３年生になると状況はいくらか改善する。中学に引き続き、私は語学や国際系の学部学科に興味をもっていた。高校では韓国語の授業を履修した。中国語の勉強も考えた。そうした学科がある大学を調べていくうちに、私は関西にある私立の A 大学に興味をもつようになった。偏差値は 60 前半だった。私立には行かせてもらえないと思っていた私はダメもとで両親に相談した。英語を勉強したいこと、そして中国語も同時に学べることをアピールした。すると、両親は A 大学が高偏差値校だったこと、そして外国語大学だったことを気に入り、受験を許してくれた。私は、夢でも見ているのかと思った。早稲田以外の私立は行かせてもらえないと思っていたからである。A 大学は一般入試だけでなく、英語の成績が一定以上の者は推薦入試も受けられた。私は幸いにも推薦入試の基準を満たしていたため、一般入試の前に英語１科目での推薦受験が認められた。担任の先生には、「ここは受かると思うよ。」と言われた。やっと自信が少し戻ったような気がした。

A 大学の受験に向けて準備をする傍ら、引き続き他の大学も調べた。そこで見つけたのが国立の高知大学だった。高知大学には国際社会コミュニケーション学科があり、私の興味と一致した。さらに調べていくと、同学科にも英語推薦の制度があった。まさに運命の出会いだと感じた。さらに調べると、やはり国立大学ということで高校での評定平均値が 4.0 以上の者が対象となっていた。私は急いで担任の先生に確認した。すると、私の評定平均は 4.2 ということだった。天にも昇るような気持だった。先生にも高知大学を受験するよう、勧められた。私の心は高知大学と A 大学に決まった。

11 月には A 大学の受験が始まった。受験会場の大阪には母の友人がついて来てくれた。緊張しながらも私は何とか全問解くことができた。帰りの新幹線では、何度も自己採点をした。２週間経った頃、結果通知が届いた。急いで封筒を開けると合格者の欄に私の番号があった。飛び上がるほど嬉しかった。買い物から帰って来る母の姿が見え、５階から合格したと伝えた。両親もとても喜んでくれた。

しばらくすると、高知大学の受験日が近づいてきた。試験内容は事前に提出した志望書と当日の英語による討論だった。志望書には「真の国際人」になりたいと書いた。異文化理解能力を養いたいことも書いた。先生からはそれが武器になると言われた。また、英語の討論対策として、ALT のニコルと何度も練習した。それでも不安しかなかったが、できるだけの対策をした。受験当日、高知には父と２人で行った。構内に入ると、受験生は控室で待機させられ、３人ずつ呼ばれた。英語での自己紹介は、緊

張しながらも何とかこなせた。討論が始まると、同じグループの女の子は留学経験があり、流暢な英語を話した。私は彼女にのまれないように、可能な限り発言した。議題は覚えていないが、中国語、日本語そして英語と韓国語も少しできることをアピールしたのはよく覚えている。こうして、私の受験は終わった。後日高校のパソコン室で結果を確認した。私の番号がそこにあった。「ムカついてきた。」、一緒にいた友人に冗談交じりで言われ、一緒に喜んでくれた。それがとても嬉しかった。先生に報告すると握手をしてくれた。その晩、両親と話し合って高知大学への進学を決めた。

第６節　第４の物語：大学入学から現在

第１項　大学入学とルーツの再確認

Q 市から高知に移り、新生活が始まった。大学生ともなればいじめを心配することもなかった。新しい生活、新しい友人、私は胸を躍らせた。国際系の学科にはきっと自分に興味を示してくれる学生が多くいると信じた。私の期待通り、大学では多くの友人に恵まれた。高知大学での４年間は、私にとって充実した時期であった。一方、大学時代は、被差別体験や両親の仕事、そしてあるドキュメンタリー番組との出会いによって、私が自分のルーツと改めて向き合う時期でもあった。

「日本人や。失礼やなぁ、あんた。」、大学２年生の時に同級生の A さんに言われた一言である。当時、中国人留学生の中によく見かける女性がおり、私は彼女を中国人と思っていた。ただ、中国人にしては日本語が上手だった。そのため、私は自分と同じく幼少時に来日したのだと思った。そこで、彼女と知り合いであった A さんに彼女が中国人なのかどうか尋ねたところ、前述の返答をされたのだった。その瞬間、自分の全てを否定されたような気がした。何が失礼なのかわからなかった。その後、「言いつけてやろ(笑)」と彼女は続けた。その言葉にどう反応すれば良いかわからなかった。

来日から 23 年、露骨な差別を受けたことは数えるほどしかない。「中国人のくせに。」「中国って電気あるの？」、そういう場合はたいてい相手と喧嘩になった時や発展途上国へ対するステレオタイプから来るものだった。80 歳を超えた老人に、誤解から「中国人の泥棒野郎」と罵られたこともある。ただ、これらの場合は言い返すことができる。相手が感情的になっている分、落ち着けば話し合いもできる。心が傷つくことはほとんどない。しかし、A さんの一言は私の胸に矢のごとく突き刺さった。彼女に私を傷つけるつもりはなく、ごく普通の反応だったのだろう。一方、私は冗談だと割り切れなかった。彼女のその当たり前の反応がとてつもなくこわかった。やはり自分は外国人であり、差別されていると感じた。表面的な差別はさほど気にすることではな

い。目に見える形での差別も問題にならないように思う。極端に言えば、出自を異にする民族間の摩擦はある程度仕方ないと思えた。しかし、ここで紹介した経験では、無意識に日本人から「失礼な存在」という烙印を押された。この無意識に最も尊厳を傷つけられたと感じた。

大学３年生になった 2006 年は、私の家族にとっての転換期であった。父の頑張りもあり、ついに自分の中華料理店を出店できたのである。店の名前は「朝陽酒家」という。来日当初ほど金銭的に困っていたわけではなかったが、それでも一般的な日本人家庭と同じ水準の生活を送ることは難しかった。そのため、開店資金などは銀行に頼らざるをえなかった。また、開店準備や工事も工場勤務の中国人仲間に手作りで頼んだ。上手くいっているとはいえないが、両親の努力で店は今年で 10 年目になる。しかし、ここまでの道のりは平坦なものではなかった。中国から呼んだ料理人が逃げ、店が回らないことが何度かあった。一度料理人がいなくなると、代わりが見つかるまで多くの時間を必要とする。その間、厨房はほとんど父が１人でまわした。人手がいないなかで売り上げを維持するために週に半日しか休みをとれない時期もあった。営業時間が終わった後も、翌日の準備などで日付が変わる前に帰る父を見たことがない。

こうした無理がたたって、数年前に父は腰を悪くした。腰椎すべり症という病気らしい。腰に巻かれたコルセットが痛々しかった。また、母も歳をとるにつれて店の仕事が辛くなってきた。そのため両親は閉店も考えたが、日本では年金などの老後の保証がないため、２人は店を続けざるをえないでいる。２人は帰国も考えたが、まだ高校も卒業していない妹のために当面は帰国を断念している。両親が苦労している一方で、私には何もできなかった。帰省の際に少しの手伝いはできたが、休暇が終わるとすぐに高知に戻らなければならなかった。無力な自分がとても歯がゆかった。

そんななか、インターネットで見た「泣きながら生きて」と題されたドキュメンタリー番組は私の心に強く響いた。番組の内容は、不法滞在の身分となりながらも、家族のために日本で奮闘する中国人男性、丁さんの物語だった。丁さんは、1989 年に留学生として来日したが、劣悪な環境のために日本語学校を抜け出して上京した。そのうち、彼はビザの更新が認められず、不法滞在者となる。一方で、日本で何も学べず、留学費用でできた借金のために、丁さんは帰国もできなかった。こうして、彼は自分の夢であった学業達成を娘に託した。そして、彼女のアメリカ留学費用を稼ぐため、借金返済のため、毎日日付が変わるまで働いた。家族と離れて 15 年間、その間、丁さんが家族と会ったのは、娘と１時間、妻と 72 時間だけだった。また、苦労するうちに、丁さんの歯はほとんど抜け落ちていた。

私の中にこみ上げるものがあった。そう感じた時、私は既に声を挙げながら泣いていた。中学校で経験した妹との別れ以降、あれほど泣いたことはなかった。人生でもあの時ほど泣いたのはほとんどない。涙ものの番組や映画はたくさん見てきたがそれほど涙することはなかった。自分とはかけ離れた世界だとわかっていたからだ。しかし、丁さんの物語に私は特別な意味を感じた。丁さんが両親と重なって見えたのである。両親が私のために払ってきた苦労に自分が果たして応えられているのか考えた。両親の苦労に対して自分は無力だと考えた。考えれば考えるほど、涙を抑えることはできなかった。

第２項　自分との対話と大学院進学

大学に入るまで、私は自分のことを日本で生活している中国人だとしか認識していなかった。バイリンガルという武器を活かした仕事に就ければ良いと考えていた。そのため、大学入学後、私は専ら言語学や語学、なかでも日本語教育に大きな関心を寄せていた。日本語教師の副専攻を履修し、教育実習のために韓国と中国にも行った。ゼミも日本語教育を専門とする教員についた。しかし、前項で紹介したような経験、すなわち被差別体験や両親の苦労、そして丁さんの物語によって、私は１人の在日中国人として何をすれば良いのか、何をすべきなのかと自問自答するようになった。

私が所属していたゼミの学生たちは、皆日本語の教え方や日本語の文法に興味をもっていた。もちろん私も、それらには関心があり言語学や日本語教育の学会にも参加した。そして、当初は比較言語学などを卒業論文（以下、卒論。）で扱おうと考えていた。しかし、いくら卒論のテーマを考えても納得いかなかった。自分が本当にやりたいことは言語学ではないと思った。また、当時の私は日本語教師になるという目標をもっていたが、それに対する考え方も変わった。単なる職業として日本語教師を目指していたのが、日本語教師として日本にいる中国人の力になりたいと思うようになった。私の中に、在日中国人としての使命感が生まれたのである。結局、卒論は在日中国人永住者のアイデンティティに関するテーマに決めた。ゼミ仲間が日本語教育や言語学を扱うなか、相談する相手がおらず何度もテーマを変えようと思った。しかし、最後までやり抜けたのは､やはり当時の私が感じていた使命感があったからだと思う。

３年生の終わりにもなると、卒論の他に進路について考えなければならなかった。友人たちがインターンシップや企業説明会で忙しく動き回るなか、私はあまり就職活動に関心をもてなかった。代わりに興味をもったのが大学院進学だった。そこには、もっと学歴をつけてほしいという母の願いもあったが、１番の理由は使命感によるも

のだった。もちろん、「日本語教師や通訳という職業でも在日中国人の力になれるのではないか。」と考えなかったわけではない。しかし、指導教員の強いすすめによって、私も大学院に強く希望するようになった。何より、大学院で自分をもう一度見つめ直したい、研究者として同胞のために何かしたいという思いがとても強かった。

大学院進学を決めた私は、P 県にある Y 大学に興味をもった。指導教員に連絡をとり、面談をした。当時考えていた研究計画を興味深いと褒めてもらえた。面談に手応えを感じた私は、Y 大学に狙いを絞って受験対策をした。しかし、Y 大学の受験は失敗に終わった。試験の少し前、希望していた教員から翌年 1 年間海外にいるため、入学しても休学をしなければならない旨の連絡を受けた。しかし、Y 大学しか受験を考えていなかった私は、それでも良いと考えて受験をした。試験の手応えはあった。しかし、不合格という結果だった。就職活動をしていなかった私は両親のもとに戻るほかなかった。実家に戻り、両親に進路相談すると、諦めずにもう 1 度受験するようすすめられた。私はその言葉に甘えて、翌年の再受験を決めた。

再受験を決めたものの、私は受験日までどう過ごそうか迷っていた。もちろん、受験の準備をすることが最優先だったが、それだけではダメだと思っていた。店を手伝うか、アルバイトをするか考えた。そんな時、母に北京で中国語を学び直す機会にしてはどうかという話をされた。私はすぐに帰ると返事をした。しかし、中国語は日常生活でも身につくと思った。そのため、その 1 年間で英会話を学ぼうと考えた。こうして、2008 年 4 月～2009 年 3 月の 1 年間、北京で中国語と英会話を学んだ。これまでみてきたように、本稿で登場した母親の多くも子どもの進路に中国を想定する教育戦略をもっている。また、子世代の対象者たちも、自分たちが中国で発展する可能性を考えないわけではない。しかし、世代にかかわらず言語や学歴、学力の問題によって、かれらはその道を阻まれてしまう。一方、私の場合は中国での生活が実現した。これまでみてきた経験によって、「将来を望めるホーム」として中国をとらえることができた私と母親の教育戦略が呼応したためだと考えられる。

北京にいる間、私は日本の大学院の情報収集を続けた。そして、早稲田大学に興味をもった。もちろん、中国における同大学のネームバリューも理由の 1 つだったが、それ以上に人の移動を扱う森本先生の研究室に関心があったからだった。私立である早稲田大学は学費が高く、私にとってはハードルが高い場所だった。しかし、母の強い希望により、私は早稲田大学を再受験の目標に選んだ。こうして、2009 年に私は早稲田大学人間科学研究科に入学した。昔から私の教育に厳しかった母は誰よりも喜んでくれた。今は既に他界した中国の伯父も喜んでくれた。早稲田大学という「世界一

の大学」に入学できた私を中国にいる親戚や知人皆が褒めてくれた。私は、「大学なんて関係ない。」と思っていた一方で、親孝行ができたとも思った。

なお、2008 年の帰国は中国と私を深く結びつけた。それまで中国の親戚とは何年かに 1 度しか顔をあわせることがなかった。また、自分から親戚に連絡を取るようなこともしていなかった。安価な国際電話は移民と祖国の結びつきを強くする(Vertovec 2014, 77-86)。その頃、日中間の国際電話も安価で利用できたが、私は両親に促されて一言二言話す程度だった。しかし、この帰国で親戚たちと長期間関わった私は、日本に戻った後も自ら連絡するようになった。前章で取り上げた対象者たちは通信技術が進んだ今でも、中国にいる親族とはほとんど連絡をしないという。一方の私は、帰国によって、情緒的な結びつきをさらに強めたのだった。そしてその想いを胸に、私は大学院に入学した。

大学院入学後、私は在日中国人に関する研究に関心を寄せてきた。中国人留学生が日本で感じる困難を修士論文で扱った。そして、博士課程に在籍している現在は自分が育った Q 市をフィールドに、ニューカマー中国人の教育に関する研究を行っている。テーマがうまく決まらず、論文がうまく書けず苦しい時もあった。しかし、それでも、インタビューをする度に私は研究を続けようと思った。かれらが自分の生活を私に語ってくれる度に私はかれらにもっと寄り添おうと思った。修士 1 年生の時、ある先生に「君は今後何かをやっていくことになるだろう。」と言われたことがある。数は少ないが、業績ができた度にその言葉が思い返された。そして、自分がほんの少しでも同胞たちに貢献できていると実感できた。また、自分の使命を全うしていると実感することもできた。

大学院への進学は、私にさまざまな出会いを与えてくれた。それまでほとんどいなかった中国人の友人やさまざまなルーツをもつ研究室の仲間たちとの出会いは、私に多くの気づきや学びを与えてくれた。また、早稲田に来たことで人生の伴侶にも出会えた。1993 年の来日から約 23 年が経った。私は今も自分のルーツとルートを見つめながら使命を全うしようとしている。

第 7 節　小括

本章では、Q 市で育った中国人の 1 人として、私のオートエスノグラフィーを提示した。本章を書き終えて改めて感じるのは、来日後さまざまな障壁に阻まれながらも、私が現時点では主体的な自己実現をできているという点である。もちろん、在日中国人としての出自や母の教育などの影響もあるが、それでも私は主体性をもって自分の

進む道をその転換期ごとに選び取ってきたように思う。

鯨岡(2011)は、子どもの主体性を他者との関係のなかで構築されていくものだととらえる。本章に引きつけて言えば、まず見逃してはならないのが、第２の物語と第３の物語で紹介した恩師の存在である。私は来日後、言葉の問題や友人関係、進路選択などの場面で苦境に立たされてきた。しかし、その度に山田先生や林先生、そして北岡先生が私を支えてくれた。トロフィーをもらうという目標を与えてくれた山田先生のおかげで、私は日本語という壁を乗り越えることができた。また、林先生は「日本語ができない私」が安心していられるような居場所を作ってくれた。そして、高校進学では、北岡先生が私のルーツに対して肯定的なアドバイスをくれなければ、私は受験勉強に集中できなかったであろう。

第４の物語では大学進学以降の経験を振り返った。私が自分のルーツを見つめ直した背景には、家族のことや大学で経験した「無意識的な差別」がある。また、大学院受験に失敗した時には母が中国に「帰る」という選択肢を提案してくれた。前章では、ホーム意識が細分化する点に言及したが、「高級な人になれ。」という母の一貫した教育戦略のもと、私は中国を「将来を望めるホーム」だと思えるだけの言語資本や文化資本を身につけることができた。そして、それが長期的な中国への「帰国」を可能にした。こうした「重要な他者」や「他者」との関わりのなかで、私の「『自分はどうありたいか』という思い」（金丸 2013, 289）は、ルーツゆえの職業に就きたいという思いから、同胞のために何かしたいという思いへと変化していった。

また、第２の物語で登場した人権会館は、私の重要な居場所であった。なかでも、いじめによって学校での居場所を失った私にとって、「敵がいない場所」として機能した。また、何よりも会館での私は一方的に支援される存在ではなかった。職員や先生に遊びで中国語を教えるなど、私自身が発信する側でもあった。もちろん、「支援される者」という学校側の認識から、私の会館通いは始まった。しかし、日本語指導の必要性が薄れると会館での学習は学校の勉強になっていったという学校側の取り組みは、まさに本稿で重視する「ルーツにとらわれない」支援だったと言えるだろう。

先述したように、本稿で取り上げた対象者たちは、親世代・子世代にかかわらず、自己実現を想像することや語ることが制限されていることを考慮しなければならない。一方、私は自身のルーツを否定することなく現在に至っている。そして、人生の転換期では主体的な選択をしながら、「今、ここ」にいる。本稿の対象者、なかでも子世代については、かれらが通った学校には会館のような居場所は存在せず、重要な他者とも言える支援者の存在が語られることもほとんどなかった。そのため、中国系という

ルーツをめぐって自己肯定感を喪失したりする。しかし、重要な他者や居場所などの関係性が整ったルートがあれば、私のように主体的な選択や想像をしながら人生を歩んでいくことができると考えられる。

最後に、いじめや差別、家族との別れなど本章を作成するために私は辛く苦しい思い出を振り返らなければならなかった。また、本章は私にとって単なる振り返りではなく、あたかもその場に戻ったかのように、そして当時の体験をもう一度するかのような作業であった。そのため、オートエスノグラフィーの作成は私にとって苦痛をともなう作業であった。しかし、その一方で私が現在に至るまでに歩んできたルートには、かけがえのない思い出も多くあった。

2015 年 7 月、私はある日本語教室に依頼されて自分の経験に関するインタビュー形式の講演を行った。そこには、中国や韓国、ジャマイカなどから来日した中学生たちがいた。話を聞くとかれらは勉強や進路選択に困難を感じているだけでなく、就職することや結婚することも想像できないという。私の物語は、（集住地域、非集住地域にかかわらず）こうした子どもたちを代弁したり、想像力をもたせるなど 1 つのロールモデルになる可能性を帯びているという意味では意義深いと思う。また、記憶を振り返る作業は私自身にとっても一種の救いだったように思う。「移動する子ども」（川上 2013）である私の大切な思い出を呼び覚ましてくれたのだから。

---

1 一方で、オートエスノグラフィーを制度化すべきだとも井本は指摘する。
2 『』は筆者。
3 当時、学校主導の募金活動が何度か行われた。全生徒が募金をしなければならなかった。
4 中国国旗の名称。
5 順番に車田正美、タツノコプロ制作、鳥山明作。
6 聖闘士星矢の登場人物。
7 日本学校に入学した父は、当時だと「就学生」という身分であったが、ここでは、就学も留学と広くとらえ、「留学」と表記する。
8 チルドレンズ・テレビジョン・ワークショップ制作の教育番組。
9 日本で初めて見た心霊番組に衝撃を受けた筆者は、どこにでも幽霊が出ると思い込んでいた時期がある。
10 次項で触れるように、張君が編入してきたため、私が 3 年生に上がってからは、日本語教室は、林先生を含めて 3 人になった。
11 もちろん、学齢期に来日した健軍と国祥は流暢に中国語を話せる。

結論

本稿では、非集住地域に居住するニューカマーの教育のあり様を、中国人を事例に考察してきた。ここでは、本稿で設定した２つの視点、すなわち「主体性」と「育ちの過程（ルート）」に関連させながら結論を述べる。

第２章では、日本の学校に対する意味づけに着目して、非集住地域で子どもを育てる、あるいは育ててきた中国人ニューカマーの母親が行使する教育戦略を描き出した。その結果、彼女たちが創造的に教育戦略を展開していく姿が明らかになった。日本の学校を否定的に意味づけていた雪梅は、「学校との積極的交渉」や「声かけ戦略」などを駆使して教育達成を目指していた。一方、「成長が可視化する場所」として日本の学校をとらえていた小芳は、戦略的にそれを利用していた。また、雅文は「家族団らん」という理想のために、中国の学校に子どもを通わせられる環境にありながらも、あえて日本の学校に通わせていた。非集住地域から非集住地域への移動を経験した瑞麗は、日本式教育を志向する一方、移動先における同胞との出会いによって、重要な場面では中国式教育も導入することが可能となった。そして、紫微は出自が原因でいじめられた長男の体験から、自己肯定感を喪失しないよう中国（人）から子どもを遠ざけていた。このように、彼女たちは限られた環境のなか、「中国人だから」というような一枚岩ではなく、多様な戦略を駆使しながら子どもの教育達成を実現しようとしていた。すなわち、選択肢や資源が乏しくても状況ごとに位置取りをし、自分たちにとって何が望ましいのかを考えながら行動する姿や家族や子どもが良い方向へと向かうように自己実現を目指していく姿がみてとれたのである。

繰り返し述べてきたように、従来の研究は、ニューカマーを「弱者」としてとらえる傾向があった。そのため、かれらは常に「問題」と隣り合わせの存在だととらえられ、その懸命に生き抜く姿が見逃されてきた。こうした視点に対し、本稿では主体性をともなった存在として、ニューカマーをとらえた。これまでの研究では、親の教育経験の乏しさ、あるいは文化資本など活用できるものが少ない点がニューカマーの子どもたちに与える影響が指摘されてきた。そして、そうした指摘のもとでどのように子どもたちを支援すべきかが論じられてきた。しかし、三浦(2015)も指摘するように、これはマジョリティ側の視点である。つまり、「問題を抱える人々」というニューカマーの一側面だけを切り取り、いかにかれらをそこから脱出させるかという点が注目されてきたのである。もちろん、そうした議論が必要なのは言うまでもない。しかし、同時に求められるのは、さまざまな制約にさらされながらも、たくましく生き抜くニューカマーの姿を視野に入れることである。そうすれば、一方的ではないかれらが置

かれた状況に応じた支援も可能になるであろう。

このように、ニューカマーの教育研究では主体性への着目が必要不可欠である。しかし一方で、日本社会での生活におけるかれらの「弱者」としての側面も確実に存在することも忘れてはならない。非集住地域に関して言えば、かれらの主体性が「限られた主体性」である可能性も考慮する必要がある。集住地域では、同胞とのつながりなどによって集団としてホスト社会や居住地域と向き合っていくことができる。一方、非集住地域の場合は、文字通り「マイノリティ」として移住先で生き抜いていかなければならない（徳田 2016, 12）。これは、川端(2010; 2012)が言うところの「環境の個人化」と重なる。第２章で触れたように、移民が実践する戦略は、一時的な「切り抜け」戦術であることが少なくない（宮島 2002, 140）。そのため、個人化した環境、つまり非集住地域ではニューカマーたちの主体性を考慮しつつも、より一層かれらの営みが本当に主体的なものなのか、あるいは一時的な「切り抜け」戦術なのかを見極めなければならないのである。

第３章では、子世代に焦点をあてて、中国人ニューカマー青年のホーム意識を描き出した。その際、かれらと中国の関係性の不在に着目した。中国系としての自己肯定感の喪失は、時としてかれらに中国を切り離させる。その背景にあるのは、武志や恭子が経験したようないじめや日本のメディアにおける中国（人）の「悪い面」である。そうした経験から、かれらは日本にホームを求めるようになる。一方で、中国が完全にかれらの心から消えるかというと、そうではない。例えば、智子は「帰国」を機に「嫌いな場所：中国」から「今すぐ帰りたい場所：中国」というように中国への想いを変容させていた。また、幸せを感じるはずの家族再編が辛い体験となった美香は、中国にいる親族との生活など中国への「帰国」を希求していた。しかし、言語の壁などが彼女たちをホームとしての中国から切り離していた。こうしたかれらのホーム意識は、従来の研究でも言及されてきたように、複数性や可変性を帯びたものである。しかし、より重要なのはその複数性や可変性をどのように理解するかである。つまり、ホーム意識の内実をみていくことが重要なのである。そこで、本章では「帰属を感じるホーム」と「将来を望めるホーム」に分けて、かれらのホーム意識が細分化されていく様子を考察した。すなわち、場面や状況によってかれらにとってのホームは一致したり、異なったりするのである。このように、ニューカマー青年のホーム意識は中国か日本、あるいはその両方というようなとらえ方はできない。場面や状況ごとにかれらが感じるホーム意識をみていくことが重要なのである。

以上、ニューカマー青年たちのホーム意識は、かれらが歩んできたルート（経験）

に大きく左右される。これまでニューカマーの教育研究では、同化主義や排他主義に対抗するために、母語や母文化の尊重が重要視されてきた（三浦 2015, 280）。しかし、そうした視点への固執は、時としてニューカマーの子どもたちを傷つけてしまうおそれがある（高橋 2013）。そのため、かれらのルーツばかりを重視するのではなく、どのような経験を経て「今、ここ」に至っているのかを重視する必要がある。そうすることで、ルーツを押しつけるような本質的な視点から脱却することができるのである。

このように、ニューカマーの教育研究ではルーツとルートの双方を見つめる視点が重要であるが、非集住地域に関しては一層重要だと思われる。例えば、第３章では、いじめなどの負の経験からルーツに対する自己肯定感を失ったニューカマー青年の事例を紹介した。集住地域の場合、先行研究でも明らかにされているように、ルーツとの関係性がエンパワーメントの場となったり、集団として現実に向き合える可能性がある。一方、関係性の不在によって個人化した環境になりがちな非集住地域では、個として現実に向き合わなければならない。そして、第３章の対象者たちのように自己肯定感がそのまま固定化されてしまう可能性がある。

ルートに着目することは、主体性の問題とも関わる。すなわち、非集住地域というルートのなかで、かれらの選択に果たして本当に主体性がともなっているのかという問いである。自分のルーツに肯定感をもてず、「バレる」ことを常に意識して選び取ったホームならば、それは本当に意味での主体性とは言えない。また、自身のルーツがもつ可能性に気づくことなく選び取った進路も主体性がともなったものとはいえないであろう。そのため非集住地域では、より一層かれらがルーツに肯定的になれるような、そして自分の可能性に気づき行使していけるようなルートの整備が必要なのである。

先述のように、ニューカマーの主体性を重視すべきである一方で、「弱者」としてのかれらも確実に存在する。非集住地域ならば、それは一層色濃くなる。そうした状況のなかで、かれらにとって代弁者やロールモデルの存在は欠かせないと言える。タイェブは、移民が祖国とホスト国のどちらにも完全に参加できないとして、代弁者や支援の必要性を説く。なかでも、それは祖国で正常な生活に戻れる可能性がある第１世代と異なり、親の祖国に戻れる機会に乏しい第２世代以降に顕著だと指摘する（エル - タイェブ 2007, 210）。

こうした問題意識のもと、第４章では筆者のオートエスノグラフィーを通して非集住地域に住むニューカマーに１つのモデルを提示した。換言するならば、非集住地域で育った筆者がどのような経験を、どのように意味づけて自己実現を果たしたのかと

いう１つのルートを提示した。そこで描き出されたのは、学校の教師や両親、居場所との関係性のなかで築き上げた筆者の主体的な自己実現の物語であった。学校の先生は、人生の節目で筆者に目標や導きを与えてくれたし、両親が苦労する姿は筆者の使命感を呼び覚ます契機の１つとなった。また、人権会館という居場所の存在によって、辛い時でも筆者はルーツに対する自己肯定感を失うことなく成長することができた。さらに、筆者の自己実現において母親の教育戦略も大きな役割を果たした。厳しい教育だけでなく、筆者が大学院受験に失敗した時も、母のすすめによって中国への帰国という戦略を選びとることができた。このことが可能だったのは、筆者がルートのなかで言語や学歴など、自己実現のために動員できる資本を身につけ、「帰属を感じるホーム」だけでなく、「将来を望めるホーム」としても中国を意味づけられたからに他ならない。第２章で取り上げた母親の多くが、主体的な戦略を展開していた一方で、その主体性が限られたものであることは先述した通りである。筆者の場合、ルートのなかで培った資本やホーム意識が母親の教育戦略にもさらに幅をもたせたと考えられる。

以上、筆者は自分が進むべき道、進みたい道を主体的に選び取ることができた。本稿の対象者たちからは居場所や支援者、モデルなどの存在が語られることはほぼなかった。かれらも筆者が通ったようなルートがあれば、自己肯定感を失ったりしないかもしれない。あるいはもう少し進路について考えるなど主体的な自己実現が可能だったかもしれない。

最後に本稿の課題を述べておきたい。第１に、属性の多様性である。本稿では育ちの過程、すなわちルートに着目した。ニューカマーの中でも最も多様性に富む中国人においては、属性が異なれば歩むルートも異なると予想される。なかでも特に注目すべきなのは、日本と中国という２つのルーツをもつ帰国者や日中国際児とその他の中国人ニューカマーの差異である。また、Rumbaut(2004)が指摘するような世代間の違いである。世代が異なれば、ホーム意識にも違いがあるかもしれない。今後は、属性や世代の違いに着目してかれらの教育実践に迫っていきたい。

第２に、親子間の関係である。本稿では第２章と第３章で教育戦略とホーム意識に言及した。各章では、かれらの主体性やルートに着目して非集住地域に住む者たちの教育実践のあり様を明らかにした点で意義深いと思われる。言うまでもなく、親の教育戦略と子どものホーム意識は世代間の相互作用を通して形成されるものである。しかし、本稿はこの点を十分に検討できなかったという限界を抱える。そのため、今後は非集住地域において、親の教育戦略と子どものホーム意識や育ちがどのように相互作用を及ぼしながら形成されていくのかも明らかにしていきたい。

参考文献

＜日本語文献＞

熱田敬子. 2013. 「当事者研究―『自分自身でともに』見いだす―」, 藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー―新しいフィールドワークの理論と実践―』, 新曜社, 74-79.

阿部康久. 1997. 「長崎における在日中国人の就業状況の変化と居住地移動」, 『人文地理』第 49 巻第 4 号, 85-101.

蘭　信三. 2000. 「パーリアとしての中国帰国者」, 蘭　信三編『『中国帰国者』の生活世界』, 行路社, 1-15.

蘭　信三. 2000. 「中国帰国者とは誰なのか、彼らをどう捉えたらよいのか」, 蘭信三編『『中国帰国者』の生活世界』, 行路社, 19-47.

蘭　信三. 2016. 「多様化する中国帰国者―ポストコロニアリズムとグローバリズムとの交錯点―」, 『コスモポリス』(10), 1-26.

井口　泰・曙　光. 2003. 「高度人材の国際移動の決定要因―日中間の留学生移動を中心に―」, 『經濟學論究』57(3), 101-121.

石川　准. 2001. 「マイノリティの言説戦略とポスト・アイデンティティ・ポリティクス」, 梶田孝道編著『国際化とアイデンティティ』, ミネルヴァ書房, 153-181.

伊藤泉美. 2005. 「横浜の華人社会」, 山下清海編著『華人社会がわかる本―中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化―』, 明石書店, 85-91.

伊藤泉美. 2013. 「外国人居留地」, 吉原和男他編『人の移動事典―日本からアジアへ・アジアから日本へ―』, 丸善出版, 12-13.

伊藤精男. 2015. 「人材育成研究における『自己エスノグラフィー』の可能性」, 『経営学論集』第 25 巻第 4 号, 25-43.

井本由紀. 2013. 「オートエスノグラフィー―調査者が自己を調査する―」, 藤田結子・北村　文編『現代エスノグラフィー―新しいフィールドワークの理論と実践―』, 新曜社, 104-111.

色川大吉. 1992. 『自分史―その理念と試み―』, 講談社学術文庫.

内田直作. 1949. 『日本華僑社会の研究』, 同文館.

榎井　縁. 2013. 「ニューカマーの子どもたちのいま―“地域の取り組み”から『見える』こと―」, 『異文化間教育』37 号, 47-62.

江淵一公. 1997. 「総論　異文化間教育とは」, 江淵一公編『異文化間教育研究入門』, 玉川大学出版部, 13-40.

エリス, キャロリン・ボクナー, アーサー. 2006[2000]. 「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性―研究対象としての研究者―」, デンジン, K, N・リンカン, S, Y 編『質的研究ハンドブック 3 巻―質的研究資料の収集と解釈―』, 平山満義他訳, 北大路書房, 129-164.

太田晴雄. 2000. 『ニューカマーの子どもと日本の学校』, 国際書院.

小田和彦. 2010.『日本に在留する中国人の歴史的変容』, 風詠社.

鍛治　致. 2000. 「中国帰国生徒と高校進学―言語・文化・民族・階級―」, 蘭　信三編『『中国帰国者』の生活世界』, 行路社, 233-287.

鍛治　致. 2007. 「中国出身生徒の進路規定要因―大阪の中国帰国生徒を中心に―」, 『教育社会学研究』第 80 集, 331-349.

金井香里. 2005. 「ニューカマーの子どもの対処をめぐる教師のストラテジー」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 45 巻, 235-244.

金丸　巧. 2013. 「複数言語と向き合うこと―子どものことばと主体性の関係―」, 川上侑雄編『『移動する子ども』という記憶と力―ことばとアイデンティティ―』, くろしお出版, 288-307.

過　放. 1999.『在日華僑のアイデンティティの変容―華僑の多元的共生―』, 東信堂.

川上侑雄編. 2013. 『『移動する子ども』という記憶と力―ことばとアイデンティティ―』, くろしお出版.

川端浩平. 2010. 「岡山在日物語―地方都市で生活する在日三世の恋愛・結婚をめぐる経験から―」, 岩渕功一編『多文化社会の＜文化＞を問う―共生／コミュニティ／メディア』, 青弓社, 116-145.

川端浩平. 2012. 「二重の不可視化と日常的実践―非集住的環境で生活する在日コリアンのフィールドワークから―」, 『社会学評論』63(2), 203-219.

キム, ヴィクトリヤ・敷田佳子. 2013. 「日本の学校に通わせる国際結婚家庭」, 志水宏吉他編著『『往還する人々』の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題―』明石書店, 123-139.

許　淑眞. 1989. 「日本における福州幇の消長」, 『摂南学術. B, 人文科学・社会科学編』7, 59-77.

許　淑眞. 2005. 「(1)日本の華人社会の歴史的特色」, 山下清海編著『華人社会がわかる本―中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化―』, 明石書店, 70-76.

郡司英美. 2005. 「『日系ブラジル人』の子どもを取り巻く研究の再検討」, 『異文化

間教育』21 号, 44-56.

児島　明. 2001. 「『創造的適応』の可能性とジレンマ―日系ブラジル人が生きる学校世界―」, 志水宏吉・清水睦美編著『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって―』, 明石書店, 80-126.

児島　明. 2006. 『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー―』, 勁草書房.

児島　明. 2008. 「在日ブラジル人の若者の進路選択過程―学校からの離脱／就労への水路づけ―」, 『和光大学現代人間学部紀要』第 1 号, 55-72.

児島　明. 2013. 「ニューカマー青年の視点に立った移行支援の可能性―日系ブラジル人青年の『自立』への模索を手がかりに―」, 『異文化間教育』37 号, 32-46.

小島祥美・中村安秀・横尾明親. 2004. 「外国人の子どもと「初等教育」の保障―岐阜県可児市における就学・不就学の実態―」, 『日本教育社会学会大会発表要旨集』(56), 40-41.

駒井　洋. 1997. 「新来外国人の実態」（駒井洋執筆部分）, 駒井　洋他編著『新来・定住外国人がわかる事典』, 明石書店, 12-15.

駒井　洋. 1999. 『日本の外国人移民』, 明石書店.

呉　万虹. 2004. 『中国残留日本人の研究―移住・漂流・定着の国際関係論―』, 日本図書センター.

齋藤譲司・市川康夫・山下清海. 2011. 「横浜における外国人居留地および中華街の変容」, 『地理空間』4-1, 56-69.

賽漢卓娜. 2011. 『国際移動時代の国際結婚―日本の農村に嫁いだ中国人女性―』, 勁草書房.

賽漢卓娜. 2014. 「国際結婚した中国出身母親の教育戦略とその変容―子どもの成長段階による比較―」, 『異文化間教育』39 号, 15-32.

佐久間孝正. 2006. 『外国人の子どもの不就学―異文化に開かれた教育とは―』, 勁草書房.

佐久間孝正. 2011a.『外国人の子どもの教育問題―政府内懇談会における提言―』, 勁草書房.

佐久間孝正. 2011b. 『在日コリアンと在英アイリッシュ―オールドカマーと市民としての権利―』, 東京大学出版会.

桜井　厚. 2002. 『インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方―』, せりか書房.

佐藤郡衛. 2010. 『異文化間教育―文化間移動と子どもの教育―』, 明石書店.

渋谷真樹. 2013. 「ルーツからルートへ―ニューカマーの子どもたちの今―」, 『異文化間教育』37 号, 1-14.

志水宏吉・清水睦美編著. 2001. 『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって―』, 明石書店.

志水宏吉他編著. 2013. 『『往還する』人々の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題―』, 明石書店.

清水睦美. 2009. 「学校内部の権力関係の再構築過程―研究者によるフィールドワークは、ニューカマーの子どもたちの周辺に何を生み出したのか―」, 『異文化間教育』30 号, 42-52.

新原道信. 2001. 「“内なる異文化”への臨床社会学―“臨床の智”を身につけた社会のオペレーターのために―」, 野口裕二・大村英昭編『臨床社会学の実践』, 有斐閣, 255-284.

鈴木洋子. 2011. 『外国人留学生と留学生教育』, 春風社.

住田正樹. 2003. 「子どもたちの『居場所』と対人的世界」, 住田正樹・南博文編著『子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在』, 九州大学出版会, 3-17.

高橋朋子. 2013. 「中国帰国児童の主体的な関係性を目指して」, 『異文化間教育』37 号, 15-31.

高畑　幸. 2015. 「人口減少時代の日本における『移民受け入れ』とは―政策の変遷と定住外国人の居住分布―」, 『国際関係・比較文化研究』第 14 巻第 1 号, 141-157.

舘　奈保子. 2013. 「中華学校を選択した華僑保護者の教育戦略」, 志水宏吉他編著『『往還する人々』の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題―』, 明石書店, 34-46.

田中治彦編著. 2001. 『子ども・若者の居場所の構想―『教育』から『関わりの場』へ―』, 学陽書房.

田中治彦. 2001. 「関わりの場としての『居場所』の構想」, 田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想―『教育』から『関わりの場』へ―』, 学陽書房, 3-12.

田房由起子. 2005. 「子どもたちの教育におけるモデルの不在―ベトナム出身者を中心に―」, 宮島　喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育―不就学問題と多文化共生の課題―』, 東京大学出版会, 155-169.

譚　璐美. 2008. 「華僑　三都物語」, 譚　璐美・劉　傑『新華僑　老華僑―変容する

日本の中国人社会―』, 文春新書, 15-149.

趙　衛国. 2011. 「中国系ニューカマーの教育戦略と社会的ネットワーク―中華料理人の場合―」, 『移民政策研究』第 3 号, 37-53.

張　長平. 2009. 「華人の世界分布と地域分析」, 『国際地域学研究』第 12 号, 57-72.

陳　東華. 2005. 「長崎華人社会の形成と特色」, 山下清海編著『華人社会がわかる本―中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化―』, 明石書店, 120-125.

陳　來幸. 2005. 「神戸華人社会の形成と特色」, 山下清海編著『華人社会がわかる本―中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化―』, 明石書店, 105-113.

陳　來幸. 2013. 「近代日本と華僑」, 吉原和男他編『人の移動事典―アジアから日本へ・日本からアジアへ―』, 丸善出版, 14-15.

恒吉僚子. 1996. 「多文化共存時代の日本の学校文化」, 堀尾輝久他編『―学校文化という磁場―』, 柏書房, 215-240.

坪井　健. 2006. 「在日中国人留学生の動向と今後の課題―中国と日本の留学生政策を背景にして―」, 『駒澤社会学研究』38, 1-22.

坪谷美欧子. 2008. 『『永続的ソジョナー』中国人のアイデンティティ―中国からの日本留学にみる国際移民システム―』, 有信堂高文社.

徳田　剛・二階堂裕子・魁生由美子. 2016. 『外国人住民の『非集住地域』の地域特性と生活課題―結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から―』, 創風社出版.

徳田　剛. 2016. 「『多文化社会・日本』の現況」, 徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子『外国人住民の『非集住地域』の地域特性と生活課題―結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から―』, 創風社出版, 7-32.

徳永智子. 2008. 「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望―『重要な他者』と『来日経緯』に着目して―」, 『異文化間教育』28 号, 87-99.

徳永智子. 2014. 「国境を越える想像上の『ホーム』―アジア系アメリカ人の女子生徒によるメディア／ポピュラーカルチャーの消費に着目して―」, 『異文化間教育』40 号, 70-84.

中島葉子. 2007a. 「支援―被支援関係の転換―ニューカマーの教育支援と『当事者性』―」, 『異文化間教育』25 号, 90-104.

中島葉子. 2007b. 「ニューカマー教育支援のパラドックス―関係の非対称性に着目し

た事例研究―」，『教育社会学研究』第 80 集, 247-267.
永田貴聖. 2011. 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』，ナカニシヤ出版.
中西正司・上野千鶴子. 2003. 『当事者主権』，岩波新書.
額賀美紗子. 2014. 「越境する若者と複数の『居場所』―異文化間教育学と居場所研究の交錯―」，『異文化間教育』40 号, 1-17.
額賀美紗子. 2012. 「トランスナショナルな家族の再編と教育意識―フィリピン系ニューカマーを事例に―」，『和光大学現代人間学部紀要』5, 7-22.
バートベック，スティーブン. 2014[2009].『トランスナショナリズム』，水上徹男，細萱伸子，本田量久訳，日本評論社.
拝野寿美子. 2011.「在日日系ブラジル人第二世代のホームランド―自ら選びとる『生きる場所』」，三田千代子編著『グローバル化の中で生きるとは―日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし―』，上智大学出版, 265-290.
萩原建次郎. 2001. 「子ども・若者の居場所の条件」，田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想―『教育』から『関わりの場』へ―』，学陽書房, 51-65.
比嘉康則. 2008. 「人間関係を築く」，志水宏吉編著『高校を生きるニューカマー―大阪府立高校にみる教育支援―』，明石書店, 168-181.
久田邦明. 2000. 『子どもと若者の居場所』，萌文社.
広崎純子. 2007. 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択―支援活動の取り組みを通じての変容過程―」，『教育社会学研究』80, 227-245.
広田康生. 1997. 『エスニシティと都市』，有信堂高文社.
ファティマ・エル - タイェブ. 2007. 「アーバン・ディアスポラ―ポスト - エスニック・ヨーロッパにおける人種、アイデンティティ、ポピュラー・カルチャー―」，伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う―現代移民研究の課題―』，松村美穂訳，有信堂高文社, 201-233.
福田友子. 2012. 『トランスナショナルなパキスタン人移民の社会的世界―移住労働者から移民企業家へ―』，福村出版.
ブルーマー，ハーバート. 1991[1969].『シンボリック相互作用論―パースペクティヴと方法―』，後藤将之訳，勁草書房.
ホール，スチュアート. 2014[1990].「文化的アイデンティティとディアスポラ」，『現代思想』vol. 42-5 4 月臨時増刊号，小笠原博毅訳，青土社, 90-103.
松尾知明. 2013.「ニューカマーの子どもたちの今を考える―日本人性の視点から―」，

『異文化間教育』37 号, 63-77.

松田博幸. 2010. 「ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何を得ることができるのか？―自己エスノグラフィーの試み―」,『社會問題研究』第 59 巻, 31-42.

真鍋眞澄. 2007. 「ニューカマーの子どもにとっての『居がい』について―移り住んだ場所への文化的アイデンティフィケーションに関する一考察―」,『子ども社会研究』13 号, 32-48.

丸山奈穂. 2012. 「故郷を求めて―中国系アメリカ人のルーツ観光経験―」,『観光研究』23(2), 13-18.

三浦綾希子. 2012. 「フィリピン系エスニック教会の教育的役割―世代によるニーズの差異に注目して―」,『教育社会学研究』第 90 集, 191-212.

三浦綾希子. 2013. 「多文化地区における地域学習室の機能―ニューカマー1.5 世を対象として」,『移民研究年報』19 号, 69-87.

三浦綾希子. 2014. 「二つの『ホーム』の間で―ニューカマー1.5 世の帰属意識の変容と将来展望―」,『異文化間教育』40 号, 18-33.

三浦綾希子. 2015. 『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ―第二世代のエスニックアイデンティティ―』, 勁草書房.

南　誠. 2010. 「『中国帰国者』の歴史／社会的形成―国民、エスニシティ、コミュニティ―」, 永野　武編著『チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ』, 明石書店, 116-148.

宮島　喬. 1999. 『文化と不平等―社会学的アプローチ―』, 有斐閣.

宮島　喬. 2002. 「就学とその挫折における文化資本と動機づけの問題」, 宮島　喬・加納弘勝編『国際社会 2　変容する日本社会と文化』, 東京大学出版会, 119-144.

宮島　喬・太田晴雄編. 2005. 『外国人の子どもと日本の教育―不就学問題と多文化共生の課題―』, 東京大学出版会.

宮島　喬. 2014. 『外国人の子どもの教育―就学の現状と教育を受ける権利―』, 東京大学出版会.

矢野　泉. 2007. 「エスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所をめぐる考察」,『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学』9, 169-177.

山﨑香織. 2005. 「新来外国人生徒と進路指導―『加熱』と『冷却』の機能に注目して―」,『異文化間教育』21 号, 5-18.

山下清海. 2000. 『チャイナタウン―世界に広がる華人ネットワーク―』, 丸善ブック

ス.

山下清海. 2005. 「華人社会の見方と現状」, 山下清海編著『華人社会がわかる本―中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化―』, 明石書店, 16-31.

山下清海. 2008. 「日本の華人社会」, 山下清海編著『エスニック・ワールド―世界と日本のエスニック社会―』, 明石書店, 222-227.

山下清海・尹　秀一・松村公明・杜　国慶. 2008. 「在日華人ニューカマーの中国における送出プロセス―中国東北地方の事例から―」, 『2008 年人文地理学会大会発表要旨』, 128-129.

山ノ内裕子. 1999. 「在日日系ブラジル人ティーンエイジャーの『抵抗』―文化人類学と批判的教育学の視点から―」, 『異文化間教育』13 号, 89-103.

山ノ内裕子. 2002. 「学校における文化と不平等―ブラジル人少女マルシアの事例から―」, 『九州大学大学院教育学研究紀要』5 号（通算第 48 号）, 207-221.

山ノ内裕子. 2014. 「トランスナショナルな『居場所』における文化とアイデンティティ―日系ブラジル人の事例から―」, 『異文化間教育』40 号, 34-52.

＜英語文献＞

Bankston, Carl. L. and Zhou, Min. 1996. The Ethnic Church, Ethnic Identification, and the Social Adjustment of Vietnamese of Adolescents. *Review of Religious Research*38(1): 18-37.

Breton, R. 1964. Institutional Completeness of Ethnic Communities and the Personal Relations of Immigrants. *American Journal of Sociology*, Vol.70, No.2: 193-205.

Denzin, Norman. K, 2006, Analytic Autoethnography, or Déjà Vu all Over Again. *Journal of Contemporary Ethnography*, Volume35, Number4: 419-428.

Espiritu, Y. L. 2003. *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Counties*. Berkeley: University of California Press.

Foner, N. 2009. Introduction: Intergenerational Relations in Immigrant Families. In *Across Generations: Immigrant Families in America*, edited by Foner, Nancy. New York: New York University Press, 1-20.

Kibria, N. 2002. Of Blood, Belonging, and Homeland Trips: Transnationalism and Identity among Second-Generation Chinese and Korean Americans. In *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*,

edited by Levitt, P. and Waters, M. C. New York: Russel Sage Foundation, 295-311.

Ohnuki-Tierney, Emiko. 1984. “Native” Anthropologists. *American Ethnologist*, Vol.11, No.3: 584-586.

Olsen, L. 1997. *Made in America: Immigrants in Our Public Schools*. New York: The New Press.

Rumbaut, R. G. 2004. Ages, Life Stages, and Generational Cohorts: Decomposing the immigrant First and Second Generations in the United States. *International Migration Review*, Vol.38, No.3: 1160-1205.

Smith, M. P. & Guarnizo, L. E. (eds.), 1998, *Transnationalism from Below*. New Brunswick: Transactions Publishers.

Wong, M. G. 1998. The Chinese-American Family. In *Ethnic Families in America*, edited by Charles, H. M. and Robert, W. H. and Roosevelt, Wright. New Jersey: Prentice Hall, 284-310.

Zhou, Min. 2009. How Neighbourhoods Matter for Immigrant Children: The Formation of Educational Resources in Chinatown, Koreatown, and Pico Union, Los Angeles. *Journal of Ethnic and Migration Studies*35(7): 1153-1179.

参考 URL

厚生労働省社会・援護局. 2005. 中国帰国者生活実態調査の結果. 厚生労働省. 2016 年 6 月 13 日閲覧<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kikokusya/03/index.html>

国連人口基金. 2015. 世界人口白書. ジョイセフ. 2016 年 6 月 1 日閲覧< http://www.unfpa.or.jp/cmsdesigner/data/entry/publications/publications.00043.00000004.pdf>

総務省統計局. 2012. 日本の長期統計系列. 総務省. 2016 年 6 月 15 日閲覧<http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm>

中国帰国者支援・交流センター. 2016. 中国帰国者の年度別帰国状況. 厚生労働省. 2016 年 7 月 5 日閲覧<http://www.sien-center.or.jp/about/ministry/reference_02.html>

中国帰国者支援・交流センター．中国残留邦人対策に関する略史．厚生労働省．2016年7月5日閲覧<http://www.sien-center.or.jp/about/whats/t_chart.html>

法務省．2006-2011．登録外国人統計（各年度）．2016年6月23日閲覧<http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html>

法務省．2012-2015．在留外国人統計（各年度）．2016年6月23日閲覧<http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html>

UN News service. 2015. Deputy UN chief presents new report on global migrant trends, highlighting rising numbers for 2015. *UN Daily News, 12 January 2016*. 2016年5月10日閲覧<http://www.un.org/News/dh/pdf/english/2016/12012016.pdf>

謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方々の協力を得た。まず、本稿の調査対象者の方々に心よりお礼を申し上げたい。忙しい合間を縫ってインタビューを引き受けてくださっただけでなく、どんな質問にも快く答えてくださったおかげで、私は質の高いデータを得ることができた。また、調査場所が家から遠かったにもかかわらず、インタビューのためだけに駆けつけてくださった方もいた。そして、非集住地域という環境では、調査対象者の方々の紹介がなければ、十分な人数を確保できなかっただろう。こうした調査対象者の方々による献身的な協力に厚くお礼を申し上げる。

また、多くの先生方の助言がなければ本稿の完成はあり得なかった。指導教員である森本豊富先生には修士時代から数えて7年間もお世話になった。研究面だけでなく、私が道に迷いそうになった時、森本先生にはいつも進むべき道を示していただいた。副査である店田廣文先生と原知章先生にも中間報告会で懇切なる助言をいただいた両先生からいただいた助言の中には、私自身がかねてより課題だと考えていたものもあり、改めてその課題解決の重要さを感じた。心より感謝を申し上げたい。

鳥取大学の児島明先生と中京大学の三浦綾希子先生には、第2章と第3章のもととなる論文の執筆でお世話になった。児島先生には、論文執筆の方向性で貴重な助言をいただいただけでなく、研究における励ましもいただいた。また、三浦先生には論文指導に加えて筆者自身のインタビューをしていただいた。三浦先生が快くインタビューを引き受けてくださったおかげで、第4章を過度な主観に陥らずに書き進めることができた。多大なる謝意を示したい。

筆者がQ市で研究を行ううえで、いつも筆者を支えてくださった福山市立大学の田

渕五十生先生にも深く感謝の意を伝えたい。そもそも本稿で筆者が自分の物語を描こうと考えたのは、田渕先生の助言による。先生は、常日頃から「研究のための研究をするな。」という実践を重要視しておられる。そして、その視点から本稿の当事者である私が自身の経験を描く必要性をご指導いただいた。田渕先生の助言がなければ、本稿の完成は程遠かったと実感している。

また、研究生活を送るうえで森本ゼミの仲間たちにも心より感謝の意を伝えたい。ゼミの発表では、多くの仲間から指摘をいただかなければ、原著論文の採択はなかったように思う。また、苦しい時期や道を見失いそうになった時も仲間たちとの支え合いがあったからこそ前を向くことができた。なかでも、深夜遅くまで論文の修正にお付き合いいただいた東聖子さんにはいくら感謝しても足りないと感じている。

７年間という長い大学院生活を支えてくれた家族にも心からお礼を言いたい。私が大学院に進学したいと言った時に両親は快く賛成してくれたし、そのために経済的援助もしてくれた。また、私が落ち込んでいる時に励ましてくれたのも両親だった。そして、本来なら既に就職して働いていてもおかしくない私に文句ひとつ言わずに支援してくれた妻も私の心の拠り所だった。心から感謝している。

最後に、本稿の作成に直接関わっていなくとも、私を支えてくれた全ての方々に厚く謝意を表したい。小学時代や中学時代に出会った恩師たちがいなければ、私はどこかで挫折をしていたかもしれないし、大学の指導教員が背中を押してくれなければ、私はこうしてパソコンの前にいなかったかもしれない。

こうした方々に支えられて、今の私がある。これからも自分の使命を果たすことでお世話になった方々に恩返しをしていきたい。